
掃天のストラトス

支離滅裂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

掃天のストラトス

【Zコード】

Z0278P

【作者名】

支離滅裂

【あらすじ】

世界中に現れる、天窓と呼ばれる現象。

異世界を垣間見る事が出来る、異常な空間。

それが、僕にとってなんなのか。

ある日、天窓に映し出された『彼女』が、僕の運命を捻じ曲げる。

1・天窓

僕が僕といつ自分を認識し始めた頃、それはこの世の中に現れ始めたといつ。

だけど、それが初めて現れたのがいつだつたのか、僕をはじめとして誰もはつきりと覚えていない。

ただ、この世界に生きる人々全でが、その世界を垣間見始めたのを。この世に在らざる者たちを、この世に在らざる異様な光景を映し出す、それを。

想像を絶する嶮浪を。

荒れ狂う竜巻の群れを。

灼熱の二つの太陽に焼かれる大地を。

凄まじい吹雪の中、聳え立つ峻嶺を。

その過酷な世界をものともせずに生きる、異形の生命達と、生い茂る奇怪な樹木。

そして、その中でもひときわ眼を引く者達。

陽光に煌く金髪と、凍りつくような銀の瞳を持ち、純白の眩しい翼を背に天を舞う、御使いの姿を。

それらを誰もが田にし、誰もが口の端に乗せた。

まるで田の前に存在するようでいて、だがしかし、触れえざるもの。

田々の嘗みの中に忽然と現れ、そしていつの間にか消えうせる。

人々にとつてそれは最早日常と化し、現れることも消えうせる」と
もさう驚くべき事ではなくなつてきていた。

異世界を垣間見る事が出来るそれを。

異形の者達の生命の瞬きを享受できるそれを。

人は「掃天の銀窓」と呼んだ。

僕らは面倒くさいから、天窓って呼んでるナビも。

まだ薄明るい程度の朝の光が、部屋の窓にかかるカーテンの隙間を
縫つて、僕の薄く開いた視界に差し込んでくる。

枕元では、己の責任を存分に果たし終えた目覚まし時計が、いつも
の様に時を刻み続けていた。

田覚まし時計は確かにその責任を果たした。

事実、僕の意識は覚醒した、はずである。

とりあえず勢い良く起き上がりつゝ、心の中では努力をした、のだけれど。

眠い、眠い。

凄く眠い。

なんだか眠い。

とてつもなく眠い。

やたらめつたら眠い。

何故だか知らないが眠い。

や、眠いのは生物としてまだ起きちゃダメよと僕の中の本能が叫んでいるからだよきっと、うん。

なので僕は寝る事を継続することにする。

半ばまで剥ぎ取った布団を被りなおし、枕に顔を埋める。

ああ…至福。

だが僕には起きねばならぬ理由がある。

だから後5分…いや10分経つたら起きよ。

顔を洗うのと歯磨きを省略すれば、それくらいの時間は稼げるだろう。

だから僕は寝るのだ。

寝るつたら寝るのである。

しかしながら、ここ最近はそんな僕の決意を邪魔する存在がちょくちょく発生する。

いや、ちょくちょくではないな。

ここ最近毎日である。

三度の飯と同じくらいに大事なこの憩いのひと時を邪魔するのは、実のところ正体不明である。

どこから聞こえるのか、さっぱりわからない上に、すぐ耳元で聞き超えるようだ話で、まるか彼方から呼ばれているようにも感じじる。

正直こりつとする。

ンなことを並べてみると、いつもより頭の中で響き始めた。

抑揚のないあつさつとした声で、紅く明滅する光を伴って頭の中で反響する。

でも内容はさっぱりわからない。

どこの国で横寝かすら、だ。

布団の中で横寝を食つてこるコレですよ。

眠りに集中できなくなってしまつ。

耳をふさがせるまで意味がなく、ずっと耳鳴りのよう繼續していく。耳をふさがせるまで意味がなく、ずっと耳鳴りのよう繼續していく。

思い返せば今ほど頻繁ではないけれど、昔からこの変な声を聞いていたよつた氣もある。

でも、半覚醒状態と言うか、一度寝を決め込もうとしているこの僕の貴重な憩いのひと時を邪魔しないで欲しいなあ。

僕はまだ寝ていたいんだから、話しかけないでくれないかな……つて言つてもむづちの思つてゐることに反応してくれたためではない。どうせならガシンと目が覚めるよつた大声でも出してくればいいのに。

だから、僕は無駄な抵抗はせずに人生の半分をこれからも共に過ごすであつた布団さんと、横寝を食む努力を続けた。

毎度同じく、聞こえてくるのは唯一つだ。

内容は意味不明だけだ。

まあ何が尋ねられてるつて気もしないでもないんだけど、寝てると

きになに言われても、ねえ。

「どうせなら」う、いかにもなエロエロではんづふんな優しいおね
いさんの声とか、自分に正直になれない氣の強い幼馴染とかで。

心の琴線に触れまくりな、現実世界ではありえないお声を拝聴した
いものである。

それで、出来れば画像か更に出来る事なら動画付とか、もつと出来
る事なら触つたりとか触られたりとか、あーんな事やーーんな事を
実行可能だつたら言いつことないんだけども。

てな事を考えていると、いつの間にか聞こえなくなってるし。

まあいいや、それでは本格的に一度寝再開といきたい所だつたけど
も… どうもタイムリミットが迫つて來たよつで。

まつたく、神様と來たら変な方向に仕事熱心なようで、僕のほんの
小さな望みでさえも奪い去つていくんだよね。

まどろみの中でそんな事を考えていると、口元になにやら柔らかく
生暖かい感触が生まれ、そして離れていた。

「そろそろ目を覚ませ。朝餉の時間が無くなつてしまつぞ~。」

そんな声が耳朶を打つと同時に一気に開け放たれたカーテンの向こ
うから、僕の網膜を焼きつくさんとする光が、強烈に差し込んで來
た。

確かに目は覚めたけれど、魂の恋人であるマイお布団さんからこの

僕を引き剥がす」など、生半可なことでは出来はしないのである。

ああ、出来ないつたら出来ないのだ。

「馬鹿を言つておらやす」と、わいつと起きよ。遅刻して困るのはお主だけではないのだぞ?」

その声と共に、抱きしめた愛しいお布団をひは僕から引き離され、わざやかな野望はここに潰え去つてしまつたのであった。

ああ、わゆつならお布団さん。温もりをありがとづ。

「いい加減にせぬか。まつたくおぬしはこつまで経つても本当に寝坊助であるな。ええ? 宏一?」

そう言つて、火のついていない咥え煙草をピョージピョーと揺らし布団を小脇に抱えて仁王立ちするのは、我が姉上、野見山瞳。

僕にとって、唯一の肉親である。

微妙に変な喋り口調のは、習つてこる護身術が高じて嵌つてしまつた愛読書の時代小説による所が大きいらしい。

ああちなみに親達は、…えつと、もつとくなつて何年だつけ。僕が物心ついた頃には、もつ既に姉さんだけしかいなかつた。

残してくれたのはこの家と、形見にと身に付けている安っぽい手作りのペンダント。

わづと大きな紅い石がやけに仰々しいけれど、どう見ても何かの樹

脂を固めただけの代物です。

宝石とかだつたらひと財産な大きさだが、実の所一束三文だひつ。

事実、鑑定してもらいにその手のリサイクル店に行つたら、買取不可と事も無げに言われてしまいました。

売る気はそもそもなかつたけどさ。

親の形見と言う付加価値がある僕らにとってのみ、大事なものだ。

実際顔もろくに覚えてないだけに、今ひとつ実感がわかないと言つ
親不孝つぶり全開であるので、形見くらいは身に着けているのです。
で、そんな我が家の家事全般その他諸々を一手に請け負つているの
が、何を隠そづいの僕を叩き起こしてくださつた先ほどの姉上様で
ある。

既に自身の身支度は整え終えているようで、腰まであるはずの黒髪
は綺麗に纏められて後頭部でお団子になつて、つやつやの御髪がひ
と房だけゆうらじと垂れ下がつてゐる。

バリツとしたグレーのスーツを着込んだ、女性にしては高い180
cm近い長身を誇るその姿は、一流企業のオフィスで部下に叱咤激
励をとばして切り盛りしていくも不思議じゃないぐらいである。

その上から、フリルの付いたエプロンを着けていなければ。

「はよう着替えよ。おぬしが遅刻すると、私の所にまで態々イヤミ
を言ひに来る」苦労なやからが居るのだ

「はいはいすみませんどーも。おはようござります、つと」

勢いをつけ眠気を振り切つて身体を起こした僕の背後で、

「ま、それ 자체はどうと言ひJとは無いのだが。特に実害があるのでなし」

と言つて呑えっぱなしだったタバコに火をつけて紫煙を吐き出し、形の良いお尻をベッドの枕元へと下ろす。

ぎしりと軋んだ音を立てたベッドよりも、はるかに柔らかそうな双丘が、ちょうど僕の目線の高さに来て、視界の片隅でその容積と弾力を自己主張していくださる。

おかげをまで毎朝僕は大変である。何が、とは言ひがたいので言わないが。

親が居ない一人暮しは何かと無用心だからと習い始めたという、剣術だか柔術だかのお陰で引き締まっている細身の身体は、なんともよい感じの柳腰というか、凄まじい勢いのふくらみと言つか何と言うか。

つて、僕に姉萌え属性はありません。念のため。

ないつたらないです、ええ。

しかし、わざわざベッドに腰掛けて何をするのやうと思こきや、家事で少し荒れた指で僕の鼻をつまみ、弄び始めた。

「ひたひ」

「ほれ、田が覚めたか？毎晩毎晩遅うまで『ねじ子』とやらをしとるから寝起きが悪いのではないか？日常生活に支障をきたすようであるなら、私は『ふりぱいだ』とやらいとの契約を解除するのに躊躇せんぞ？」

それは困る、折角かなり高レベルまで育てた上に、つい最近レアものを拾つたばかりでよつやく面白くなってしまった所なの。」「

「申し訳ありませんでした、おねこちゃん。ちやんと起きあすから勘弁してください」

思いつきつ平伏してみた訳だが。

自力で回線引いて、なんて出来る甲斐性は無いし、ネカフェに入り浸れるほど的小遣いは貰つてないんだから仕方が無い。

バイトしようにも、田の前のお方が『別にかまわんが、それで勉学があるそかになるのであれば…わかってるであろうな？』とおっしゃるので、無理つー俺の脳のキャパシティはそんなに大きくないのであるからして。

とまあ、おかげさまで眠気には止めを刺せたわけだけども、迷惑と言いつつも毎日毎日たき起こしてくれる他、色々と世話を焼いてくれるのでいつも助かっていますが…もう少しあとお手柔らかにお願ひしたいものである。

「おはよっ！。ほれ、とつとと用意してメシを食え」

「……ふえーい。ありがと、姉さん」

のそのそと起き上がり、枕元に置いておいた形見のペンダントを首にかけ、未練たっぷりの態度で着替えを片手に部屋を出る。

さて、今日もめげずに頑張りう。

しつかし、同じ親から生まれたはずなのに、どうしてここまで寝起きの良し悪しに差が出るのかねえ。

まあ頭の出来も、容姿に関しても、段違いなんだが。

自分で思つた事にちよつぴり落ち込みつつ、交換したシーツやら枕カバーやらを抱えて洗濯機の置いてある洗面所に向かう姉さん。

実際にまめだよなあと感心する。

きっと僕一人で暮らしていたら、万年床になるのは火を見るよりも明らか過ぎるよなと思いながら、何とか討ち果たした眠気にさらに追い討ちをかけて墓穴に押し込むために、ガシガシと歯を磨き、口腔を洗い流すついでに顔を洗うんだが、今朝もまた僕の脣は鮮やかな紅に彩られていた。

「また…姉さんつてば」

時間の余裕がなくて顔を洗い忘れたりして、何度これで笑われた事か。

「洗顔を忘れなければ言いだけの事ではないか」

いくら姉弟でも、毎朝目覚めにキスは如何なものだろつと言つても聞く耳を持つてくれないのは勘弁して欲しい。日本の風習的に考えて。

口紅を丁寧に拭いとり、キッチリと糊の効いたシャツに袖を通して適當に身だしなみを整え、いざ朝飯が待つリビングへ。

空きつ腹を抱えてリビングのドアを開けると、ご飯を山盛りにしたお茶碗を手に、咥えたタバコの姉さんが待ち構えていた。

一応メシ前だから氣を使っているのか、咥えたタバコには火を灯していない。

テーブルには、いまどき朝ごはんにここまで気合を入れてきちんと献立を組む家庭が、どれだけ有るのだろうかと思えるほど料理が、整然と並んでいた。

「いただきまーす」

「つむ、美味しく食べてやつてくれ」

手を合わせるのももどかしく茶碗と箸に手を伸ばす僕に、姉さんが微笑みながら声を返してくれる。

食事の前後に戴きますと「馳走さまを言わないと、この笑顔が夜叉の表情に変わるのである。

他の生き物を糧とするのだから、感謝の気持ちは忘れてはいけないと躰けられてきたせいか、最早僕は習性と言つてもよいほどに自然と口から零れ出るのだ。

田の前に並ぶのは姉さん御手製のお惣菜である。

ほうれん草の胡麻和えにきゅうりの糠漬け、綺麗に焼き色ついた出汁巻き玉子と塩の効いた焼き鮭。

朱塗りの箸置きの隣には、軽く焙られた海苔が「さあ何処からでも食いやがれ」とこつているかの如く、僕の鼻腔を擦る香りを放つている。

ツヤツヤとした光沢が田にまぶしい、炊き立ての「」飯がこんもりと盛られた茶碗を片手に、見た目だけはそれなりに格好がついている、微妙にと言つにはいわざか濃い色合いのお味噌汁が、漆塗りのおわんの中にさあ飲めと鎮座しているのを、軽く溜息をついて視界から外す。

さて、それでは失礼していただくとします。

手始めに軽く焦げた鮭の切り身を大きめにほぐして口へと運び、飯を掻き込む。

近年主流の甘塩ではなく、ガツツリと塩の効いた飯の友である。起きて間もないはずの僕の五臓六腑が、待つてましたとばかりに活動を開始するのがわかる。

「きちんとよく噛んで食べよと何度も言わせる気だ？ 胃に悪い、消化に悪い、満腹感を得られるのに時間がかかると悪い事ずくめなのだぞ？」

ガツガツと食べる僕に、苦笑しながら毎度毎度の「」指摘を下されるお

ねこちゃん。

そんな事言われても、濃い日に味付けされたおかげで、炊き立てご飯とくれば、口一杯に頬張った後一気に嚥下する時の咽喉をグリグリと通つてゆく感触が伴わないと、舐さん納得しないでしょう？

かくゆう姉さんだつて、僕に負けないほどの勢いで食べてるくせに。

「ヒハ、コレはお主が中々起きぬせいでの時間が押しているからではないか。そんな事はいかがりやれとゆくつ食べ」

そんな器用な食べ方、誰に出来るといつのですか。それにほっぺたにご飯粒くつづけて言われても、説得力ない事この上ないです。

「「」駆走さまでしたっ！」

パンツと手を合わせて立ち上がるや、姉さんの声が背中を打つ。

「お粗末様。それはえうと、味噌汁の味はどうだった？今日ヒハとは中々の出来だったと思つたが。ああ、それと食器ぐらには自分で水につけてゆけ」

駆け出し始めて急停止、ヒターンして食器を重ねて流しの方へ。

「お味噌汁、もちよつと薄いほうがいいとゆつよー」

流しに食器を放り込み、それだけ言つて皿を拭して階段を駆け上がる。

何故だか知らないが、毎日毎日作っている味噌汁だけが、姉さんのネックである。

濃すぎたり薄かつたりで、どうにも味が安定しないのである。

他のおかずはそれこそ玄人跋の出来で、正直な所進路を誤ったんじやないかと思うくらいに美味しいのに。

まだまだ修行が足りぬか、と呟く姉さんの声を遠くに効きながら、今日の時間割を確認して教科書を揃える。

おっと、体育もあつたんだっけか。体操服も忘れずに、っと。

さて、今日も頑張って学校まで行くとしますかね。

平々凡々を地でゆく僕であるけれど、学校までの道程に関しては平々凡々ではすまないのである。

いや、笑い事じやなく、実際の所。

登校するだけなのに何を大げさなと思つかもしれないが、物心ついてこつち、登校する事に通常とは比較にならないほどの徒労と言つて苦労と言つかなんと言つたか。

とにかく登校時に関しては、誰に聞いても「お疲れ」と言つても「うるさい」だらつ事請け合いである。

忘れ物の無い事を確認しつつ玄関の扉を開き外へ出ると、朝の引き締まつた空気を時間に追われた人たちが忙しく揺らす時間帯であ

る……のだが。

道を行くのは親から貰つた一本の足で歩く人たちだけ。

たまに自転車で走る人が見受けられるくらいだが、それも徒步の人
に声をかけられ押して歩き始める。

道路を行く車はどれもこれも一様に停車し、ドライバー達は苦虫を
噛み潰したように苛立ちを隠さない人や、いつもの事と開き直つて
車に備え付けのテレビに興じていたり、果ては寝ている人までいる。
遠くに見える電車の高架の上では、ぱらぱらと人影の見える車両が
これもまた停車していた。

うん、今日もまたいつもアレが、雲の切れ間に見える太陽を遮る
よつこ、霞んで見える。もう見慣れてしまった、

様々な色を含んだ、オーロラと蜃氣楼とを足して一乗したような奇
妙な輝き。

僕らの住む場所とは遙かに違う、まったく別の世界を覗く事が出来
る、謎の現象。

空間干渉だの位相空間だと色々言われ、様々な名称が付けられて
いて世間一般では「掃天の銀窓」というのが一応の通り名だが、僕
らの間ではこう呼ばれていた。

空の向こう側を覗く穴、“天窓”と。

それにしてもここ数年の天窓の発生件数は異常である。

大体、発生時間帯が朝の時間だからといって、車両の走行禁止処置までに発展するなんて、アレが出始めたころには考えられなかつたというし。

「何を玄関口で保けてある。ほれ、忘れ物じゃ。無くて困るのはお主じやから、別に持つて行かんでも構わんがの？」

そんなことを考えてたら、誰の趣味だか、唐草模様の風呂敷に包まれた四角い箱が、僕の頭の上にポフツッと乗せられた。

フリフリエプロンを外した姉さんが、かつちりとした仕事モードになつて外に出てきたのである。

「あ、ありがと」

照れ隠し丸わかりの態度で、引っ越し手繰るようにして弁当箱を受け取り、学生カバン代わりのスポーツバッグに詰め込む。

そんな一部始終を二コ一コと見つめる姉さんがさらにつ、「ほれ、もう一つ忘れ物」と言つて、僕の頬に口付ける。

毎度毎度の事だけど、いつもながらに顔を真つ赤にして行つてしまふとだけ言い残して僕は玄関から駆け出した。

家を出て少し行つたところで、僕はここ数年日課のよくなつている一軒の家の二階の窓を伺うという行動をとつていた。

カーテンの向こう側は既に暗く、割と早く出でこるはずの僕よりも先に登校した事を物語っている。

ああ、今日もまた早く登校か。

部活やらなにやら色々と頑張ってるんだな、きっと。

そこは、小学校の集団登校、中学に入つても暫くの間は一緒に登校していた幼馴染の暮らす部屋なのである。

今思えば、一緒に登校していたころは朝起きる事に何の苦痛も感じてなかつたような気がする。

それが天窓の活動が頻繁になってきて暫くした頃から、布団から出ることが苦痛になつて、毎朝声をかけてくれていた近所の家の子に、迎えは要らないと言つちやつたんだ。

毎日毎日思い出す、心の重荷。

毎度背負いなおすのは勘弁してもらいたいトラウマなんだけど、今更関係修復つてのも何かね。

とまあ、いつもの如く負の思考の帰結に至つた僕は、学校へと駆け出した。

登校する僕の姿を見咎めた周囲の人たちが、あからさまに表情を変える。

朝の時間帯、同じ方向に進む事になるのだから、さぞかし嫌だらう

なあ。

同じ制服を着た連中なんて、見間違えの無い嫌悪の表情で足早に僕との距離を開けようとする。

まあ気持ちはわからなくも無いんだ。

何故ならば、一般的には太陽を隠すが如くに空高くに現れたりする事が多く、地表近くに現れることは比較的まれのはずの天窓。

それが、不思議な事に僕の行く先々で天窓が毎朝のよつに立ちふさがってくれるのだ。

まるで登校を阻止するかのよつ。

天窓は、見る分に関しては何も問題はなく、摩訶不思議な風景や現象を楽しみにしている好事家まで居る始末である。

だが、いざ程近くにあるとなると、コレがまた困った事に触れることも近寄る事も出来ないのだ。

正確に言えば、触れよつと思つて近づこうとするが、前に進めなくなるんだけども。感覚が掴めなかつたら、試しに石を天窓に向かつて投げたと考えてみてもらいたい。

あなたが投げた石は、天窓に近づくにつれ急速に速度を落とし、暫くの間その場に滯空したあと、放物線を描く事無く、真下に落ちる事になるだろうから。

ややあって、周囲が落胆の声と共にざわめき出す。虹をかき混ぜた

よつな靈がかかるた、煌く光を田の前に、僕は肩を落とした。

「またかよ、いい加減にして欲しこぜまつたく」

などと、聞こえるように囁かれる嫌味にも、もう慣れっこだ。

この時間帯、地表ギリギリに現れる天窓のせいで、車や電車はおろか、自転車での走行も禁止されているのである。

しかし、地表近くに現れるのなんて、世界的に見ても稀のはずなのに、そのじく稀な事が、嫌になるほど僕の周囲に起じてくれる。

コレのお陰で僕は寝起きが悪くなつたといつても過言ではない。実際幼馴染とも疎遠になつちやつたわけだし、「近所さんからは白い目で見られるしで、朝起きて外を出歩くのが嫌になるのもわかつて欲しいもんである。

僕のせいじゃないのに僕に責任追及の視線が注がれているのが感じられる。

決して狭いとはいえない通学路上の、そのど真ん中に異世界が浮かぶ。

シユールで中々楽しめる光景ではあるが、実生活に面倒をきたすのはいただけない。

とつあえず、しづひへの間の道は通行止めである。

しかし、重ねて言うが僕のせいじゃないはずなのに、周囲のじい意見は僕がこの道を通ったせいで、などと真しやかに語られております。

ああ、嫌な思い出が脳裏をよぎる。

僕のせいで遅刻しちゃうつって、泣いて謝ったんだよなあ…、あの子に。

心臓の鼓動が普段に増して耳を打つ。

周りから無言の重圧が襲うのを敏感に察してしまつ自分が憎い。

思わず胸元の形見のペンダントを服の上から握り締めて深呼吸をしてしまつ。

何故だか昔から、「レをすると落ち着くのだ。

それは兎も角、実際の所忙しい朝の時間帯にこんな障害物と仲良くなんとしてもいられないわけだけども。

太陽が昇りきる頃にはゆっくじと消えてゆくんだけど、それまでの間は迂回しないといけなくなる。

コレを嫌がらないのは通報で駆けつけでは観測するのが日課になっている研究家や、「覗き屋」と呼ばれる物見遊山な人たちぐらいである。

僕の通学路になつてゐる地域には、わざわざコレのために引っ越してきた研究家の人も居たりする。

今日もまた、既に顔見知りになつた研究家の人たちが、苦笑交じりに手を振つてくる。

また居るのか、と。

今でこそ、発生時間帯の飛行や走行が禁止されるようになつたため、事故がそつそつ起きる事はないが、初期の頃は突然前方に発生した天窓にぶつかり急停止、後続車両が追突して…と言つような被害が続発したそうである。

それを避けられるようになったのも、観測などの地道な研究の末に得られた研究家達の得た成果によるものだ。

以前この人たちに、毎度毎度発生現場に僕が居るからって事で、何らかの発生に起因する一因でも持つてんじやないかとか「冗談交じりに言われた事がある。

たまたま居合わせた姉さんが、「冗談じゃない」と研究科の人たちを叱責したおかげでモルモットになることは避けられたけれど。

もし僕が原因だとして…何か変な電波でも出しているんだろうか。

実の所、僕に何か原因が有つた方がよかつたかもです。そうすれば実際僕のせいだからごめんなさいといえるわけですし、文句言われても仕方ないよなーと思えるから。

そんな感じで研究家の人に向かつて会釈を返していると、背後から聞きた声がかけられた。

「おっ、やっぱり今日も居たか、宏一。お前追つかれてると楽でいいねえ」

「やつぱつってナンだよ

学校への迂回路を考えなきゃいけないって言ひのこ、やけに氣楽な
こことは隣のクラスの山本八馬。

小学校からの付き合いの、高校になるまでは僕ともつ一人の合わせて三人常に同じクラスだったという腐れ縁だ。

学校随一の変わり者で、変人といえば奴の事を描すところほどに有名だ、と言えば僕に比べてどれだけお氣楽さ加減に歯止めが利かないかわかつてもらえるだろうか。

「やっぱりだからやっぱりって言ひたまでも。お前が呪ると楽しい
ねえ」

「僕はこれっぽっちも楽しくないよ、まつたく」

同じ方向に御用の向きがある人からすれば、ここのお発言はムカつく事この上ない話なハズなのである。

だからして、僕の非難の籠つた言葉は、周囲の人々から賛同を受けてもいいくらいであるが、皆さんのは「お前が言つた」と物語つておられます。

引き攀りつつ振り返った先では、高校一年生としては平均値よりも若干低めな身長の僕よりも頭一つ半ちょい高い位置から、見下ろすように笑みを向けてくる友人の姿。

「しかし、毎日のように異世界を垣間見れるなんて覗き屋冥利に
湧くねえ。まあお」

「僕に同意を求めるでよ……」

「さきみうが頃くまこが、僕にとってはただの邪魔な障害物である。そもそもやういう趣味が無い僕としては、同意を求められても困ってしまう。」

せいぜい僕や周囲の人の困った表情を尻目に、朗らかに声高に「楽しい」と言ってのけることにつきに対して、苦笑とするくらいしか出来る事は無かった。

奴の「面白ければそれでよし」という行動原理には、女性受けする柔らかな面差しとは裏腹に、最近慣れたとは言え僕でも些か面食らう事が多いのである。

でもまあ、こんな風に気楽に接してくれるのは正直ありがたいんだけど。

実際こいつみたいなのは稀有な例で、殆んどは他所を歩きやがれオーラが天を突くかのように出てているのがわかるのだ。オーラなんか見えるはず無いのにね。

道を行く学生の数がかなり減ってきた時間帯に、よひやく僕は学校が見えるところまでたどり着いていた。

八馬はと云つて、あの後僕に向かつて、「じつくり見物してから登校すっから」と言つて、他の覗き屋連中に混ざつて、懐から最新型のコンパクトかつハイスペックなデジカメで撮影を始めてしまった。

連日遅刻がギリギリかのどちらかで、色々と文句を言われている身としては、付き合つても居られない。

奴はああ見えて、学業の方は優秀極まりなく、多少の出席日数など気にもしやがらないのだ。ムカツク。ひじょーにむかつく。

大回りした道は先ほどの道に比べ非常に細く、他にも現れていた天窓のおかげで大いに混み合い、おかげ様で遅刻ギリギリである。

予鈴が鳴り終わるまでに校門をくぐりさえすれば、とりあえず遅刻扱いからは逃れられる。

目標の学校正門まで、残り200m。現在障害となつたものは無し。

鳴り始めたチャイムがスタートの合図である。

いざ突貫!…と言つほどではないが、全力疾走を開始した。

周りには僕と同じように走るのも居れば、諦めているのかテレテレと歩く奴も居る。

何とかチャイムがなり終わる前に校門に駆け込み一息ついた僕の前に、幾つもの人影が立ちふさがる。

「野見山君、また遅刻寸前? 毎朝毎朝、一体何してるの?」

立ちふさがった中の一人、『風紀委員長』と書かれた腕章を付けた女子生徒が、バンダ一 片手に僕を見つめて立っていた。

「好きでギリギリなわけじゃないよ」

びつかつてこうと後ろで遅刻チケットをねてる、膝上20cm程度のミニに改造したスカートの娘の方が、よっぽどギリギリだと思ふけど。こりんな意味で。

などと、口には出さないで心の中でだけ言ひ返した僕たつたけれど、『風紀委員長』に野見山船と呼ばれた事に些か気落ちした。

遅刻しなくて済んだ事で何とか維持できていたモチベーションが駄々下がりである。

顔を会わせる度に、ギリギリこうやり取りになつりやつかなあ。

しょんぼりした僕に追い討ちをかけるように、上からトモジツヘリと視線を注ぎ、制服検査までしてくだせつてこる。

既製品そのままで、別にずり下げてズボンをはいてたりするわけでもないんだけども。

やけに僕にだけ厳しい気がしないでもないが、風紀委員のお仕事に熱心なんだと思っておいで。

とは言え、校則の範囲内のファッショニチャ もんをつける気はないらしく、自分でもそれなりに時流は追っているようである。

ラフに整えられた鈍く輝く銀色のショートカットの髪。

そしてそこから覗く形の良い細い顎に続くラインが愛らしく、咽喉

のラインを経て鎖骨に至る微妙な曲線などは、筆舌に頗くしがたい。

半袖のブラウスが包む凹凸の少ない胸の張り出しあは、その生地の白さと相まって眩しさが倍増している。姉さんと比べるとまさしく…
ゲフンゲフン。

もとい。

ブラウスの下でささやかに存在を誇示するそれは、その下の細い腰によりなんとか強調され、その常人よりも高い位置にある腰から伸びる、膝丈のプリーツスカートは、裾から伸びる細いが健康的な足を見事なまでに色めき立たせている。

とまあこんな感じで風紀委員長の癖に思わず風紀を乱してしまったくなるような風貌のこの女子生徒は、同じクラスの柊山梓という。

ただ普通と違うのは、その瞳の色が深い緑で、肌の色が日本人にはありえない白さを誇る事だ。

要するに、純日本風な名前にそぐわない外見のそのわけは、実はご両親が血統的には純然たる北欧だか東欧だとかで、夫婦揃つて帰化した後に生まれたためなのだ。

そういうわけで彼女はれっきとした日本人であり、日常会話は日本語のみなのである。

彼女はその容姿に加え、勉強に関しては八馬でさえ舌を巻くと言うほど文系理系を問わずに優秀な成績を残し、運動も並々ならぬ記録をたたき出し、あちこちの運動部からせめて助つ人にと呼ばれることが数知れず。特に剣道においてはとある大会で助つ人した部が全国

制霸を成し遂げる原動力となつたといつ、正に文武両道を体現していた。

かてて加えて品行方正、眉田秀麗ときてゐる。

先生方の覚えも良く、何処に出しても恥ずかしくない優等生の鑑と、校内はもちろんの事ながら、近隣の他校にまで信奉者が居ると言つた話だ。

そして、さつきの八馬と同じく小学生からの腐れ縁三人衆の一角を担つていた。

は若干縁薄いが、まあ、あとおまけであるが、僕の家の「近所さん」でもある。

「どーせ山本君と一緒に、アレでも見てたんでしょう？」

そつと顎で指示した空の彼方には、虹色に霞む、天の窓。

正直な所、僕は見たくもない。

「それは八馬だけだよ。僕はいい迷惑なんだつてば。毎日毎日邪魔くさいつたら」

まさか好んでアレを見たいがために、狙つて遭遇してるとでも思われてるんだろうか。

僕との会話と平行しての遅刻者チェックも漏れは無く、生徒手帳を掲示させてはすりすりとペンを走らせる。

顔を見ただけで、クラスから名前に出席番号まで書かれちゃってる常連さんまで居る。

僕以外でも居るんだね、そういう奴。

「まあいいけど。彼、[冗談抜きで先生に曰え付けられてるから、一緒に行動するの控えた方がいいわよ。ほーら、せっかく遅刻じゃないんだから、さつさと教室にこきなさい。もう本鈴鳴るわよ?」

そう言って僕を追いやると一通り書き込みを終えたのか、校門を閉めるため、見える範囲に遅刻者がいないかを確認しに門を出てゆく。

僕もそれを見送ってさつさと教室へ、と思つて歩き出した所を他の風紀委員になぜか行く手を阻まれる。

風紀委員の中でも一際ゴツイ体格の…なんて名前だったかは忘れたが、よく見かける男子委員が、やけに敵意むき出しの視線を吊きつけてくれていた。

名前、なんだつけかな。

確かに同じクラスだったような気もしなくも無い。

よくある名前だつたはず…まあ良いや、佐藤君(仮名)こいつ。

確かにそんな感じの名前だった、と思つ。

幸いと言つかなんと言つか、僕は学校で口クに人と接点を持たないので、これといって困らないのである。

運動部程度の体育会系な奴ならともかく、見ただけで格闘系とわかる体格の彼に、接点なんて欲しくないし。

何かにつけて気合いだ根性だ、なんと言われても僕は困る。

貧弱というキャンバスに脆弱と言つ絵の具で絵を描いて、華奢という額縁で飾つたら僕になると言つても過言ではないくらいなんだから。

しかし仲間意識が強いのかなんなのか、僕が柊山と長々と喋つていたのが気に入らなかつたのだろうか。

さすがにそろそろ教室に向かわないと授業に遅刻してしまって、どうしてくれるのか?と言おうとしたら、柊山が僕のすぐ傍を風のように通り過ぎ、とんでもない大声を張り上げた。

「そこおつー壁越えて遅刻誤魔化すなんて甘いわ、よつー！」

そう叫びつつ指差し、言い終わると同時に手にしたボールを投擲。

そして球の行方も見ずに同じ方向へ駆け出していく。

一周400mの陸上競技用トラックが確保された校庭を挟んだ向こう側で、塀を乗り越えていた生徒が、顔を見られないようにカバンを盾の様に使いながら死角に入ろうと駆け出し始めていた。

「馬鹿め。柊山さんの遅刻者追跡用インク球から逃がれられたのは、今まで一人もいないんだぞ」

僕の邪魔をしていた佐藤君（仮名）が、誇らしげに笑みを浮かべた時。

「あだつ！」

遠くの方から微かに聞こえた声で、さつきの球が本当に当たったんだな、と言つのが確認できた。

その数秒後、柊山が「確保ーつ！」と、声高らかに遅刻者を捕まえた勝ち闘を上げたのを、僕は上履きに履きかえるために下足場に向かい一つ、背中で聞いたのであった。

下駄箱から上履きを取り出していると、くそ重いはずの門がかなりの勢いでガラガラガラシャーンと盛大な音を立てて閉まったのが聞こえた。

「あんたたち、なにボケツと突っ立てんの？ さっさと教室に入りなさい」

これまた柊山の声が聞こえる。あの細腕で、よもよもああの校門をあんな勢いで閉めるものだ。

その昔、「剛力無双」と渾名されていた事を知るのは、小中と同じクラスだった八馬と僕ぐらいなものである。

佐藤君（仮名）が柊山に「言つてくれたら門締めるの手伝つたのに」とか言つてるのが聞こえる。

力仕事なら任せてくれ、つて奴か。

残念ながら、僕はもとより人の手を煩わせることなんかはつきり言つてないと思うぞ？体力仕事に関するの終山は。

まあ、彼女が荷物抱えてりや、お手伝いしますつ是非させてください、つて懇願する奴が大量に居るせいでのうそう全力を振るう機会が無いから知られてないんだろう。

美人つて得だねえ…下心みえみえな奴には厳しいけどな、彼女。

見た目に騙されて涙を呑む観る奴がまた増える、と。

まあ、今の僕には関係ないわけで、と。

昼休み。

誰もが待ちわびるであろう、憩いのひととき。

もうね、これの為だけに学校に来てるんじゃないかつて思えるね、実際。

さて、姉さん謹製のウマウマ弁当のじ開帳であります。

さあ喰うぞと、唐草模様の包みを机の上に乗せた時、教室の扉が盛大な勢いで大きく開け放たれた。

「っしゃ――――――――宏―――今日のはすづげーぞお！」

ざわめいていた教室が、一瞬しんと静まり返る。

が、それもつかの間、毎度の事だと皆わかっているのか、各自行動を再開しだした。

ああ、でも例の風紀委員の佐藤君（仮名）が、何か気に触ったのかして、ノシノシといっしに寄つて來た。

「……」

「…何？」

近寄つてきた佐藤君（仮名）。

でん、と僕の机に手を付いて。

何か言うのかと思つたら無言のまま。

僕に無言の圧力かけて、八馬をどうにかしろと言つてるのだろうか。でっかい声と騒音を立てて突入してきたのは確かに八馬で、このクラスでは一応僕が最も親しいだろう。

でもやつを大人しくさせる義務も責任も、というか能力なんざ僕には無い。

むしろ、出来る事なら大人しくさせたい物であるけれども。

そもそも僕に言いがかりをつけて何かメリットもあるんだろうか。

人様からの不条理な厭味に黙つてるのは朝の天窓関連だけで、他の事柄に關してはそれなりに言い返すよ？僕。

まあ実際僕に何の非も無い訳で、きょとんとした顔でじーっと田を見返していたら向こうから視線を外してなにやらぼそぼそと喋り始めた。

「お前が一番親しい、から。その、静かにするか、その、なんだ。自分の教室に帰るか言つてくれ」

クラスメイトだが、口クに口を利いたことも無い理由が判った気がした。

単に口下手と言つか、喋るの苦手なんだね。若干親近感。好きにはなれないだろうけど。

それはそれとして、彼の言い分はわからないでもないが、でも今は昼休みで、僕は奴の保護者でもなんでもない。

おまけに昼休みに教室で騒いぢや駄目とか言われても、誰が言つこと聞くんだろう。

「んだあ？この体育会系の馬鹿は」

佐藤君（仮名）に、八馬が話の腰を折りやがつてどばかりに睨みつける。

体格的には八馬に勝るとも劣らない、むしろ横幅と重量だけなら確実に勝利している佐藤君（仮名）だったが、どうにも状況的に分が悪いと見たのか、他の人に迷惑はかけないでくれと言い捨てて教室を出て行つた。カツ口悪。

つと、それはそれとしてだ。ハ馬は何を興奮して口に飛び込んできたのだろう。

「そんなに鼻息荒くして、どうしたのさ」

「どうせ天窓関係の事なんだろ?」「どうせ。まあ今の僕の興味は、目の前に置かれた四角い箱にしか注がれていないのですけれど。

「またぐ、話する勢いつてもんが失せるつてもんだぜ。なんなんだよアイツはよ。あー、つとだな、宏一。今日のアレだよ、天窓。まあ見てみるよ」

「別に見るのはいいけどさ、今頃登校なの?」

姉さんの作った弁当に箸を伸ばしながら、適当にハ馬と話を合わせる。

「ああ、混じりつ氣無しの大遅刻つて奴さ。だが俺は後悔なんぞ微塵もしていねえ。それに見合つものも得たしな!」

いつもなら、もうちょっとと早め、せめて一時間くらいには登校してきてたと思ったが、そこまで氣を引くような何かがあつたのだろうか。

「まあいいから見てみるつて。メシなんぞ後でも食えるだろ」

「どうやら予想通り、撮った映像を見せびらかしたいようである。

「何がどう凄いって言ひのれ」

正直な所、僕は天窓に関してはそこいらの覗き屋連中よりも見まくつてるからね。好きで見てるわけじゃないけど。

確かに、地球上にあるだらう極限環境を数倍凄まじくしたよつた景色が垣間見てるんだけども、見慣れた僕にそつまでして見せたがるほどのものが撮れたんだろうか。

ちゅくちゅくテレビでやつててる天窓特集の映像レベルなら、僕にとって日常茶飯事なんだけども。

「まあいいからいいから。ひとつ、そんな顔すんなよ、メシ喰つてていいからさ。別に喰いながらでも見れるだろ？」

根が正直な僕の表情の変化に気がついたのか、意見をえて手にしたでデジカメを操作する。

そうして映し出された映像だったが、僕にとってはよく見る風景であつたため、特に感慨は無かつた。

「まあ見てなつて。もうチヨイ先だ」

正直失望した…と言つかなんと言つか。

いつも通りのアチラ側の風景にしか見えない。

恐らくは深い深い森の奥なのだらう。

日の光が僅かに差し込んでいる事で、何とか垣間だと云ひ事がわかると言つ薄暗さだ。

なんてことは無い、いつもの向こう側の風景。

でもまあ映像的には綺麗に写っていて、まあ素人が撮つたにしてはそう悪くないんじゃないかなって感じです。

あからさまに落胆を示した僕の表情に気がついたのか、八馬が僕の肩に手を乗せて言つ。

「うからだよ、あせんなつて」

そう言つたとたんに、そこに映し出された映像が徐々にその視点を前方へと移動させ始めたのだ。

「びーよ、すげえだろ？が

ゆっくりと風景が画面の外へと流れゆく。

その速度が段々と速くなり、ついには眩暈を覚えるほどの速度になつていた。

こんなのはさすがの僕も初めてだ。

いつもはずつと同じ場所が映し出されるだけで、景色が動く事なんて見た覚えがない。

その衝撃は、恐らくは「飯を口に頬張つてなければあんぐりと間抜けに大口を開けて呑けていたである程である。

事実、僕は「飯の咀嚼を忘れてしまっていた。

「ちよつとお前が行つてすぐさ。俺もこんな事初めてだつたからよ、いつもなら適当な所で切り上げてガツ口に行くんだけどよ、結局消えるまで見ちまつてたよ」

興奮が甦ってきたのかして、意気揚々と語るハ馬。

「確かに凄い…けど」

映つた景色自体はそう驚くほどものじやないんじやないか？と問おうとした僕に、先を読んだハ馬が顔を近づけてニヤリと笑い、言つ。

「まあま、こんなもんかって顔してられるのはいいまでも。来るぞ食事を続けようとしていた僕の肩を押さえつけようとして、観賞の継続を促す。

「わかつたよ、最後まで見ればいいんだら？でも、そんなに驚くような…」

そこまでで、言葉が続かなかつた。

絶句。

前言撤回。

これぞまさしく驚愕と言つて良まると書つものだ。

深い深い森を搔き分けるようにして進む光景の先に、一点の光が見えたと思つた次の瞬間、光が爆発するように溢れ、煌く水面を映し

出した。

清冽な水を湛えた鏡のよつな湖を、深い緑の森が包む。そして、『彼女』はその湖面に居た。

その映像が衝撃と言う形で僕を固めたのを尻目に、八馬は嬉々として喋りだした。

「な？な？ 翅翼人だぜ？ すげーだろ？ こんなのがさすがのお前も初めてだろ？ 当然俺だって初めてさ。そりゃーちつとも映つてたのは見たことあるけどよ」

背中から伸びる、美しい翼が目に入る。

背中から肩越しに伸びる翼が一対、腰の辺りから斜め下に広がるよう一対の、計4枚の翼が。

美しい容姿と相まって、誰もが天使と口にするのも仕方がないところである。まあ、マスコミ関係やらは宗教関係に配慮してか、公的には天使と呼ばずに翅翼人と呼ばれていて、八馬らみたいな自称“通”な「覗き屋」たちは、その呼称を好んで使っていた。

「ちょっと黙つて…」

自慢げに話す八馬を遮つて、小さなデジカメの画面に齧りつき、まさに田を畠の様にして凝視する。

これは、なんて言つんだろう。田にした瞬間、心臓を驚撃みにされたような感じ。

なんなんだろ？、ずっと前にも「こんなことがあったよつた気がある。

…ずっと前？それっていつ？

額から滲み出した汗が、頬を伝う。

心臓の鼓動が、他の音が耳に入らなくなる程に大きく響き、耳朵を打つ。

それで居て、周りの奴らの衣擦れさえも聞き分けられそうな感覚。

不思議なことに、画面に見入る僕の『後ろで』ニヤニヤ笑うハ馬が見えた。

「！」まで近くで見れることがなんぞ、そつそつ無いどこかきつと今日が始めてだぜ？一緒に見てた連中も驚きまくつてたぜ？・どうよ、天窓遭遇回数が異常な回数のお前さんでもこんなのは…ってどうした宏一」

後ろでしゃべくるハ馬の声が、まるで耳元で大声を張り上げるよう聞こえる。

なのに、僕の頭の中には入ってこない。

僕の心は、目の前の画面に、画面に映る映像に釘付けになってしまっていた。

そう、「御使い」と称されている天窓の向い側の住人。

とは言え天窓で見ることが出来るのは「へへへ稀だ。

しかもこんなに近くで、なんて。

僕ほど天窓との遭遇回数が多くても、いつまでも間近にお田にかかつたことは無かつたくらいにレアなのだ。

八馬のテンションも上がる訳だ。

煌めく湖面に、光の飛沫を振りまき踊る、その姿。瘦身のようでは、その姿は美しいと言つ言葉が裸足で逃げ出すくらいの黄金率で、見るものを釘付けにする。

何よりも、その腰を超える長さの豊かな金髪を割って伸びる、常とは違つ2対の翼。

しかもその姿。その身に薄縄の衣だけを纏つた姿は扇情的ではあつたが、裸足の爪先だけを水面に付け、波紋が広がる湖面で一心不乱に舞踊り、天を仰ぐ。

何かに祈りを捧げてゐるよつて見える様は神々しくもあつた。まさしく御使い、天使と呼ぶにふさわしい。

こんななのを見てしまつて良いのかと言ひ気持ちが生まれるほどだ。

そして、その画面の中の女性がこひらを向いた。

たまたまこひらを向いたんだろうと、普通なら思ひださうけれど、感じたんだ。

その画面の中の女性が、『今』僕の視線に気付いたんじゃないかな

て。

映像を見せられてから、僕は何度も脳内で反芻していた。落ち着かない心を静めるために、服の下に隠れたペンダントを思わず握り締める。

気持ち的には何時間もそつしていなかったような気がしたけれど、実際に数十分といったところだったんだろう。

頭頂部にぶち当たった、硬く平べったい物体が僕を現実へと引き戻したから。

「まったく…今日も遅刻、ギリギリの上に、授業が始まろうかと言つのにまだ弁当箱を広げたままとは。情けないにも程がある。コレで弁当を残してしたりしたら、後で折檻じやつたがの」

そして再び『ゴスツ』と叩きつけられたのは、僕にとってはお馴染みの、出席簿の角つこの感触であった。痛い。

頭を押さえて見上げた先には、見慣れた巨大な双丘と、こちらは学校でしか見ることが無い、電子タバコをくわえた口元。

そしてその右手には、先程僕を一度までも襲ったやけにゴツイ装丁の出席簿が、その材質の強度限界を引き出された痕跡を残して、収まっていた。

僕の頭頂部を強襲したのは誰であろう、我が姉上であった。

姉さんは僕の通う学校の先生で、歴史を教えている。

武家政権の成り立ちから戦国時代、江戸末期から明治維新にかけての講釈には、かなりの熱が入ると評判である。

で、現状はと言えば、昼休みが過ぎ去り、もう既に本鈴も鳴り終えてハ馬も自分のクラスへと帰つてしまつていた。

にもかかわらず、暢気にボーッとしていた僕は、授業を行うためにやつてきた姉さんによう、容赦無い攻撃が加えられたのである。

慌てて弁当箱を仕舞いながら周囲に目をやると、佐藤君（仮名）がニヤニヤ笑つてやがつた。

ムカツク。

しかし、もうちょっと手加減して欲しいものです。姉弟とは言え、学校じや教師と生徒ですよ。

体罰云々で問題になつちやつたりしたらいひするんだ。

そんな僕の膨れつ面に、一ココともせずに姉さんは言つ。

「心配せずとも『姉弟同士のじやれあい』の一言で済むから。それよりも学校では先生と呼べと何度も言わせる。ほれ、ちちつちと支度せぬか

やけに矛盾をはらんだ言葉を言い終えると、家では身に着けることの無い白衣を翻し、颯爽と教壇へと戻り出欠をとり始めた。

姉さんの授業はわかりやすく、時折冗談を織り交ぜては進めてゆく。

古い歴史の事を、順を追つて語るだけでなく、その裏側にある当時の疑惑なども引き合いに出すから、理解度が深まるのも当然と言えば当然で、男女問わず生徒に人気もある。

そんな姉さんの授業が終わると、次は今日一番嫌な授業である体育だ。

僕にとっては楽しい授業から一気にやる気が萎える教科に突入である。

「おい宏一。さつやと着替えよつぜ？」

隣と合同授業の体育は、女子が隣のクラス、男子はこのクラスで着替える事になる。

なのでハ馬がここに着替えに来る事になるのだが…。

「頼むからそのカメラを携えたままつてのは止めてくれ。如何にも怪しいぞ?」

「別に撮つてないから良いじゃないか。もし盗まれたりしたら俺の今日の感動が消え失せるほど落ち込む事になっちゃうんだからよ」

なら盗まれないよつてもつて帰れよ。とは思つたが、体育だけは授業をサボる訳にはいかないのである。

何せ体育の時間は、サボつた場合補習が必須となつてゐる。しかもサボつた時間以上の運動を課せられるのだ。

他の教科は試験で取り返せるハ馬でも、無理してでも出る程である。

「どうあたま着替えよつぱ。遅れると面倒だしさ」

そういう間にも、他の連中はさつわと着替えて校庭へと急いでいた。

「わつだね、冗談抜きで急がなきや」

もう残っているのは僕とハ馬、そして…佐藤君（仮名）へりこである。

嫌な奴が残ったもんだ。

太い両腕を組んで、佐藤君（仮名）が僕を睨みつけてくる。係わり合ってになりたくないのこ、なんだつてひつひつ介事はわざわざやってくるんだろう。

「おー」

「…何?」

「お前、柊山とどういつ関係だ?」

体操服に着替え終えたところだ、奴が僕に声をかけてきた。

そんなことを聞こえていたよつて思つただら。

「柊山つてウチのクラスの?」

八馬の問いかけに、囁らざも僕と佐藤君（仮名）が同時に頷く。

「はつはーん。てめえ、柊山に惚れてるな？」

直球ストレートの八馬の言葉に、彼の顔色は綺麗に赤く染まつていった。

「当たりみたいだね、凄いやハ馬」

「…わからんお前が不思議でたまらんわ」

外人のよくやるジエスチャーのように、八馬が肩を竦めて軽く両手を挙げ、僕の事を鈍感だと揶揄する。

「そつ！そんな事はどうだつていいんだよ！俺が聞いてる事にそつと答える！」

照れ隠しなのか、やけに声高に迫つてくる。

そんな時、ガラリと教室の扉が開いた。

「いやはや、私としたことが面白ない。出席簿を教室に忘れるとはな

「誰にでもミスはありますよ、私が体育の先生に渡しておきますから…ってまだ居たの？」

入ってきたのは姉さんと、柊山の一人であつた。

「はて。もう体育の授業が始まるのではないか？さつさと行かんと

遅刻扱いになるだ？」「

「せ、あなた達さつと出なさこよ。あ、出席簿つと」

教卓の上にまつと置かれていたのを、柊山が手に取り脇に挟む。

「では、お任せする。またウチに顔出しな、梓嬢ちゃん」

「嬢ちゃんは止めて下さよー、瞳先生」

「いやかに笑いながらの会話に、僕たちも気が抜けてしまった。

「…ここつか

「だな」

八馬を促して教室を出ようとする僕だったが、佐藤君（仮名）は納得いくつていなか仏頂面のままである。

ぶつぶつと文句を言いつてこのりのだけは聞いえるが、内容まで聞き取つてあげる義理は無い。

「ほれ、何をしておる。さつさと行かんか。身体を動かすのが億劫な気持ちはわからんでもないが、こうして大人數で運動をする事など、社会に出ると中々機会すら得られないのだぞ」

僕は得たいとは思わないんだけど、なんて言い返したら、いやと言つぽど運動する機会をくれそうなので言わないでおく。

僕らがちやんと校庭に向かうのを確認する為なのかして、僕らを見

送る姉さんとその横に並ぶ柊山に視線を向けながら教室の出口に向かおうとしたら、前を行く八馬の背中にぶつかってしまった。

「…おい、宏一。なんだありや

「なんだありやじやないよ、急に止まらないでよ…って何？それ

「うそ、こんな時間に？」

柊山が、驚きを隠さずに声を震わせるのも当然。

「かつ、カメラカメラ！ 教室に置いてこなくてよかつたぜ！ これも日頃の行いが良いからだな、うん。神様ありがとうー！」

大慌てで体操服のポケットからデジカメを取り出しレンズを向ける八馬。

そう。

教室の出口。扉を開いた向こう側に、虹色のきらめきを瞬かせるモノが。

僕らが天窓と呼んでいるモノが、そこには浮かんでいた。

2・遭遇

カメラを手に、ぐるりと全周囲から撮る為、八馬は天窓に近づいていた。

「ふうん？ いつもと違うな

たずがにフリークリしぐ、常と違うのはすぐわかつたりしい。

普段は現れた時から消える時まで、その大きさが変わることは無い。だがこの天窓は、僕の目の前で光を放ちながら、じわりじわりと大きさを広げているように見えた。

「綺麗…」

柊山が、ポツリと呟いた。

綺麗、か。

本当に、僕もそう思う。

天窓 자체は嫌になるくらい何度も見ていているけれど、こうして発現初期からじつくりと見ることなんて滅多にあることじゃない。

しかも屋内で、なんて。

そういうしていると、ちょうど二三程度の大きさになつたといひで、膨張が止まつた。

「なんでえ、ちいせえな」

「でも、こつものより色が綺麗よね」

ハ馬がカメラを覗いたまま不満げに咳くのを受けて、柊山がその放つ色を賞賛する。

確かに小さい。

人一倍見る機会が多い僕でさえこんなサイズは初めてだ。

いつもは最低でも道路いっぱいに広がるのだから。

だけど、その表面に浮かぶ色彩は、普段の淡く渦巻く虹色とは違い、飛沫のような燐光を伴って、まるで万華鏡のよつよつキャラキャラと輝きを発していた。

「むーって、どんな景色かなーっと」

ハ馬がデジカメ片手に近寄ると同時に、天窓が徐々に澄んでくる。

しかしハ馬つてば、仮にも教師が居る教室内で、次の授業にも向かわないで何を興奮してるんだか。

そろそろ姉さんが、馬鹿の行動を止めてくれる頃合じゃないかな、つと視線を振るが。

あれ？

見間違いでなければ、教卓の傍で姉さんが、目を見開いて立ち竦んでいるように見える。

どんな状況でも顔色一つ変えないって感じの人なのに、やけに荒い呼吸で、何か張り詰めているように感じられた。

「ちょっと、姉さん？どうしたの？」

「今いいところなんだから、邪魔すんなって。くうー、発現初期からの連續した映像なんて中々ないぞお」

あんまりにも意外な姉さんの様子に、どうかしたのかと駆け寄るつとするとが馬鹿八馬が撮影優先とばかりに行く手を塞ぐ。

「ちょ…八馬、邪魔！姉さんつ？どうしたの？」

押しのけてでも進もうとする僕を、わざとなのかたまたまなのか、八馬が邪魔をしてくる。

「姉さんの様子がおかしいんだって、ちょっとどうしてよ、八馬

だが聞いたやいねえ、のめりこみ過ぎだら。

頭一つ大きい、意外にがつちりした八馬との体格差が、これほどの物だとは考えてもみなかつた。

「……いい加減にしろ。いけ、野見山」

「へ？あ、ありがと」

八馬の頭を掴んで、なんと佐藤君（仮名）が助けてくれたのである。

「瞳先生、どうしたんです？大丈夫ですか？」

そういひしているうちに、柊山が姉さんの様子がいつもと違う事に気付いてくれていた。

いつもの教室に、普段ならありえない天窓が現れるなんていふ異常な光景の中、僕は姉さんの傍へとたどり着いた。

「姉さん、大丈夫？どうしたの？」

身じろぎ一つしないまま、天窓を睨みつけている姉さんに、縋りつくようにして声をかけた。

姉さんが反応する前に、八馬の声が背後から響いた。

「なんじゃこりゃあああ

「なんだよ、もつつー！」

いい加減にしろよと思いながら、振り向いた先で。

天窓から、まるで洪水のような光の奔流が溢れ出し、目が焼ける程の凄まじい煌めきが炸裂した。

真っ白な閃光で辺りが満たされる中、僕の意識はそこで途切れた。

寝ちゃってたみたいだ…頭が痛い…。

心臓が鼓動を打つたびに、脳が血流で圧迫されているよひがんがんと疼く。

それに、耳元で何かが叫んでいるようで、喧しい。

誰だ？五月蠅いよ。

姉さんだつたら、絶対こんな起こし方しないんだけどなあ。

姉さん…？そうだ！姉さんは？

一気に覚醒した僕は、飛び起きるよひにして立ち上がり、周囲を見回した。

そこは紛れも無く教室で、ただいつもと違うのは、机や椅子が天窓のあつた場所を中心に壁まで吹き飛ばされてひん曲がっていたのと、僕以外の全員が、ぶつ倒れて床に横たわっている点だらう。

「ちょっと、みんなどうしたの？何が起こったの？」

僕の声に応える人は居らず。

まあ、どうしたものこうしたも、あの天窓のせいにこうなったんだ違うけども、今までアレが直接原因で集団意識不明とかが起こったなんて聞いたことが無かつたから、どういう事かさっぱりわからない。

つて、ソレよりも姉さんは？

姉さんにしがみ付いてたはずなのに、僕の傍らには柊山が倒れ伏していただけだつたんだ。

柊山を抱き起こして軽くゆすって声をかけてみても、起きる気配はない。

八馬と佐藤君（仮名）を蹴飛ばしても、うんともすんとも言わない。どうしようかと周りを確認しても、教室内には僕と柊山、八馬と… 佐藤君（仮名）しかいないため、どうにも出来ない。

「姉さん…何処行っちゃつたんだよ」

途方に暮れる僕だけれど、視界の隅に感じた違和感が、そんな場合じゃないと告げてくれた。

ありえないサイズの巨大な眼。

ふと視線を上げた先の窓の外、僕の視界に飛び込んできたのは、ソレはもう巨大な何かの眼が、教室の窓からこちらを覗き込んでいる姿であった。

「なんだよそれ…」

それだけ呟いただけで、僕は絶句した。

その一因は、巨体に似合わぬ素早い動きで一回後ろに飛び退ったその姿。

簡単に僕をひとりのみに出来るサイズの口を持つ、神話かファンタジー小説から抜け出してきたような、翼の生えた巨大なトカゲだったのだ。

そして、そいつがあからさまに「ひらへの敵意を示し、威嚇するよう」に牙を剥いて咆哮したからである。

「やれやれ…まさかと思つたが、よもやこんな事態になるとはの」

「ねつ、姉さん？」

恐慌に陥りそうになつた僕の背後で、落ち着いた声が響き、僕は振り向いた。

そこにはいつもと変わらない姉さんが、白衣に両手を突っ込んだまま、咥えタバコを燻らせていた。

「姉さん、ど、ど、ど、どうなつてゐるの？」アレは何？ 一体どうなつてゐるの？」

「まあ落ち着け。心配せずとも今のままなら向こうひらへの敵意を示すにも出来ぬ」

そう姉さんが言い終わる前に、件の巨大トカゲが突進で得た勢いそのままに、窓に頭をぶつけてきた。

が、窓ガラスはビクともしない。

近くの道路をダンプカーが通つた程度でも、軽い振動が伝わるのに、

だ。

「の？ 心配いらんじゃろ？」

「わあい、丈夫な窓ガラス…っていうか、窓に届いてない？」

巨大トカゲの突進は、窓ガラスに触れることがなく、急速に速度を落としある一定の距離でぴたりと止まった。

「放つておけばそのうちこぬるじゃろ。さて…宏一、ちょっと指を出せ」

呆然としている僕に、タバコを摘まんで細く長く紫煙を吐き出した姉さんは、何を考えているのかそんな事をいつ。

「指を出せって…あんなの相手に指出してなんの役に立つって言つのさ」

そつ言いつつも、「冗談を言つては見えない姉さんに従つて、僕は人差し指を窓の怪物に向けた。

「やつちではない。今は放つておけばよい。とりあえずこいつちゅ。ちょっと我慢せいよ？」

床に倒れ付している3人を顎で指し示すと、僕の手を取り自分の口元へともつていき、柔らかな唇で包み込むや指の腹を噛み切つてくれたのだ。

「痛つ！」

「我慢せこと言つたであらうが。しつかりせい、男の子!」

痛いものは痛いです、と心の中で反論する。

姉さんは、僕の指を咥えたまま傷口を吸い、そして柔らかく舐めあげて、よひやく口を離した。

そして自分の指を口に咥え、僕の血で濡らせたかと思うと倒れ伏している柊山の傍らに跪き、その指先を彼女の唇に含ませたのだ。

窓の外の、何度も突進してくる巨太トカゲを気にしつつ、姉さんの不思議な行動を見守る。

ゆっくりと姉さんが指を離すと、それまで身じろぎすらしなかった柊山が、苦しそうに身体をくねらせて薄く目を開いた。

「う……ん……」——ちやん?

懐かしい呼ばれ方に一瞬体が震えたが、気を取り直して呼びかける。

「大丈夫?どこか痛いとこりとか無い?」

言いながら、ついでにペチペチとほっぺたを叩いてやると、意識がハツキリしてきたのか、どこか遠くを見ていたような目が、はつきりと僕を見つめだした。

「何?何があったの?って、なによあれええええ!」

目覚めたと思つたら、窓の向こうに迫る巨大な口を見るや、再び意識を失つてしまっていた。

「おい、柊山ーおいつてば！」

焦つて彼女の頬を叩いたり、身体をゆすったりしていると、八馬と佐藤君（仮名）にも同じように処置を施した姉さんが、一人を引き摺つて僕の傍らに戻ってきた。

口に僕の血を含んだままのためか、口を開かずに僕を顎で促し教室を出るよじに指示をくれた。

力無くぐつたりとしている柊山を抱え教室の扉を開くと、そこにはいつもの通り廊下があつた。

が、廊下に出て左右に首を振ると、見事なほどにいつもどおりの廊下は数メートル先で途切れ、その先は鬱蒼とした暗い森が広がり、僕の度肝を抜いてくれた。

「な…」

またしても絶句してしまった僕の横を、姉さんが男一人を引き摺つて通り過ぎる。

廊下の途切れた所まで行くと、姉さんが手をかざして僕を促した。

姉さんがやるよじに、僕も森の木々に手を伸ばす。

すると、ある種の抵抗があつて少し進むと、それ以上は何をやっても進まなくなつたのである。

「コレって、天窓と同じ…」

言いながら姉さんを見ると、その口からまるで霧吹きのよつに僕の血で赤く染まつた唾液を噴き出した。

その瞬間、まるで頭を突っ込んだ空のドラム缶を、ハンマーでぶん殴られたような衝撃が、当たりに響き渡つた。

その直後、背後から盛大な破碎音と共に巨大な顔が飛び出してきたのだ。

ギロリとこちらに狙いを定めるその爛々と光る瞳は、怒りと興奮で満ち満ちていた。

僕の血が、天窓を、触れることもかなわないあの位相空間と何と言つか、よくわからないものを消し去つたというのだろうか。

「説明は後じや。ほれ、ゆくぞ」

なんだか判らない説明に困惑しながらも姉さんにについて森へと駆け出し後ろを振り返つて見れば、橢円形に抉り取つたような校舎の一部分だけが、こんもりとした森を搔き分ける鎮座していた。

その校舎の窓に首を突っ込み、廊下にまで顔を出した巨大生物はどうも自身の頭部に生えている角が引っかかつたせいで、抜けだせない状態に陥つていた。

僕らが巣穴から逃げ出した小動物エサにしか見えていないのが、鼻息も荒くこちらを威嚇してどうにか抜け出そうともがいて暴れまわっている。

「さて、Jの辺りでよいのか」

「な、何が？もつと離れない」と、あそこから、抜け出して、きたら、
すぐ、追いつかれ、ちゃうよ」

人一人背負っているおかげで、体格が良いとはいえない僕は、既に
息も絶え絶えに答えるのがやっとだった。

だけど、それぞれが柊山一人分はあるはずの一一人を引き摺っている
姉さんは、息も切らさず汗一つ書いていない。

足を止めたここは、別に隠れるいい場所があるわけでもない。

それに人を背負っていたのもあって足場の良い所ばかりを選んで歩
いてきたため、奴が本気になつて駆け出してくれば、あつという間
に追いつかれてしまつても不思議じやない、開けた場所だ。

「別に逃げんでもよい。奴が追いかけてきたくなるよつしてお
るしな」

そう言つて一人を下ろし、ペチペカとではなく綺麗に弧を描いた平
手打ちを、スペパンと両者の頬にお見舞いしたのだ。

姉さんが本当にこれ以上逃げる気が無いと理解した僕は、その場に
へたり込んだ。

実の所体力が限界だったのだ、情けない事に。

「う…」

姉さんの気合注入により、一人が薄っすらと田を開く。

それはもう見事に手の平の痕が付いた頬を押さえながらであつたが。

「痛つてえ…って、なんだ？ 一体なんで外に居るんだ？ ああ、おい野見山…」めえ柊山さんに何しゃがった

柊山を背負つたままへたり込んでいる僕を見るやいなや飛び起きて詰め寄つてきた佐藤君（仮名）の動きが、ビタリと止まる。

見開いた田で、しなやかな指を添えられた自身の腕を見る佐藤君（仮名）。

彼の肘を細く滑らかな手が握つてゐる。

ただそれだけで、彼はまるで身動き出来ないよつになつてしまつていたのだ。

「まあ落ち着け、山田。先ず話を聞くといふのは大切な事だと思わんか？」

「ああ、山田君つて言つうんだ。

「めえ、今までずっと佐藤君（仮名）で。

で、その佐藤君（仮名）改め山田君は、肘を取つた姉さんの問いかけに口をパクパクさせるだけだった。

が、しかし。姉さんはそれを了承と取つたのか、そつと手を離した。

「素直な生徒は評価に値するぞ」

そうじつてニコリと笑う。

冷や汗をダラダラ流して放心したようにしゃがみこんだ山田君をよそに、八馬は目覚めたとたんに状況を理解したのかして、酷く冷静であつた。

「見たところ、じこには学校でもなく、周りに生えている木は到底日本の中とは思えない。そして、あそこで騒いでるデカブツは、どう見ても天窓でたまに見るタイプのバケモンだ。となると、じこは天窓から見えていた世界だ、と言つ結論になるわけだが」

おお、理路整然と状況を整理して結論を出しやがった。

しかしその後に続く言葉が、他人をしてコイツを変人と呼ばせる所以なのだろう。

「何故に俺の『デジカメは』こういつ大事な時に電池切れを起こしてくれるんだ。神様の馬鹿」

現状どういう事態か、本当に把握できてるんだろうか。

…まあいいんだけど。

「その様子なら大丈夫そつよの」

男連中は放つておいても大丈夫と見たのか、苦笑して僕の肩に手を乗せる姉さん。

「あ、うん。柊山も起しちゃね」

流石にヤシラと回じよつと引っ叩かれるのは見ぬことびなかつたので、膝立ちになり横抱きにして軽く揺すつて見る。

「ん……ちやん……」

仲の良かつた頃に彼女が呼んでいた僕の名が、若干苦しげな声で囁かれ、薄つすらと口が開いた。

「ふむ。いろいろ問題なさそうじやな」

「うん、そうみたいだね。よかつた」

ホッとした僕の正面に回った姉さんが、彼女の顔を覗きこみでそのまま僕を真正面から見据える。

じつと無言で瞳を見つめられ、どうしたのかと尋ねようとするが、一言。ボソリと呟いてふいと視線を外された。

「緩んだか」

「何が?」

「……それで、ではあやつの処理をせねばならん訳だが。宏一」

僕の疑問を遮つて、若干哀しげな顔でそつまつと思つたら、いきなり、その、なんだ。

「ね、姉さん?」

何?と思つた次の瞬間には、いつもの姉さんが、いつものよつて穩やかな笑みを浮かべて。

ゆつくりと僕の唇に、その柔らかい唇が重ねられたんだ。

一瞬のよつな、何時間も経つたよつな、恍惚とした時間が僕の脳髄を溶かした。

僕に姉萌え属性は無い…と思いたいが、姉さんはやっぱり弟萌えだつたのか?

「な、な、な、なななな

触れた唇が開き、更に艶かしい感触の、熱いねつとりとしたモノが、僕の中へ進入を図ろうとしている最中、僕の膝の上でまさに今、完全に目を覚ました柊山が、特等席状態で僕ら一人を見上げて打ち震えていた。

「何やつてんのよアンタあわあああー

黄金の左。

超高校生級の身体能力を誇る柊山の渾身の一撃がアッパー・カットのよつに僕のアゴ田掛けて飛んだ。

どう見ても直撃です、短い間のお付き合いでしたがありがとひづれいました。

「まあ落ち着け梓嬢ちゃん

バケモノに喰われる前に、柊山に叩きのめされるのかと思つてしましましたが、姉さんの手があの凄まじい一撃を難なく受け止めてくださったので、難を逃れることができました。

持つべきは姉上様です。

殴られるような原因作ったのも姉さんだけだね。

「え？ 何これ。え、何がどうなってるの？ってあれ何？」

がばっと身体を起こした柊山が、辺りを見回し現状の把握に…って、今それどころじゃないから。

「説明はまた後でな。とりあえず宏一、嬢ちゃんを連れてどこぞに隠れておれ」

頷き返し、柊山の手を引き駆け出す。

「え？ だつてあのおつきこ動物つて言つか恐竜？ ていうか、あれって何？ なんなの？」

「いいから！」

とりあえず田に付いた大木の陰に滑り込むと、薄情なハ馬が以外にも放心したままの山田君を連れて、もう既に先客として隠れていた。

まあ、盾代わりに居ないよりはマシだろう。

「…なんか今不届きな事を考えなかつたか？ つて、宏一つ！ 先生

はどひしたんだよ？」「

「わかんないよ、柊山連れて隠れてるって」

心配なのは僕だって同じだ。

いや、それどいつもかきっと世界中の誰よりも、だ。

気になつた僕らは、大木の陰からそつと覗き見ることにした。

あのバケモノに姉さんがやられてしまつシーンを見る事になるかもしれないなかつたのに、何故だか僕には一種の安心感があつたのも確かだ。

見れば校舎の残骸に頭を突っ込んだバケモノは、コンクリート製の教室の重さをモノともせずに、首輪のよつにぶら下げながら、こちらに向かって巨体を揺らして近づいてきていた。

「ねえ、あれって本物なの？嘘でしょ？」

柊山の震える声が、耳朵を打つ。

僕だつて信じらん無いんだから、聞かないで欲しい。

でも、本物なんだろうな。

夢でも無いと思つ。

なんたつて、ついさつき触れた唇の感触が、同時に口腔に広がったいつも吸つてる姉さんのタバコの匂いと共に、恐ろしげほどの生々

しぐ思ひ出されるか、

どごどんと近づいてくるバケモノ もうデラゴンでいいや
は、明らかな意思を持つて僕らを襲おうとしていた。

どう見ても本能に従つて食欲を満たすのを最優先にしています、といつた感じなんだが、どこか違つ。

僕らの世界の生き物にはありえない、十文字に刻まれた虹彩を持つ瞳に知性の光を伺わせる輝きを見せて、僕らを睨みつける。

裾を風にたなびかせた白衣のポケットに両手を突っ込んで、いつものように咥えタバコでピンと背筋を伸ばして立つている姉さん。

姉さんがやられたら、間違いなくこちらに向かつてくるだろうなど、そう考えただけで正直な所僕は逃げ出したい衝動で一杯だった。

だけど、肩を抱いて震えている柊山と身を挺してくれている姉さんの手前、後ろに下がる事は出来なかつた。

何より、姉さんは隠れていふと言つただけで、逃げろとは言つていないんだから。

まあ、足がすくんで逃げ出そつても身動きできなかつたと思つけれど。

で、さつきから放心状態の山田君がようやく息を吹き返したみたいで、何を血迷つたか割り込んできぐださりやがつた。

「ひ、柊山さん。安心してください。」この山田、命に代えましても

……

お守りします、と続けたかつたんだろ「うけだ。

「じーちゃん」

「うひうひの瞳で僕を見上げて本日3回目の懐かしい呼びかけに、僕も自然と落ち着いた気持ちになれた。

力は人一倍強くても、やっぱり女の子だなあと思ったのは失礼だろうか。

「柊山…。きっと大丈夫だから」

「ね？」と重ねて言った僕の言葉に、彼女の瞳の堤防は決壊してしまった。

山田君は、軽く無視された自分の一世一代の台詞に憮然としてたけど、知ったこっちゃない。

巨大なコンクリート製のネックレスをしたままのドランゴンが、姉さんの目の前にまで迫ってきていたから。

「ふう…。久しいのぉ、これをするのも、さて、宏ーーしつかり嬢ちゃんを守つておれよー。」

「うわや、姉さんの雰囲気が一変した。

口元を拭う様なしぐれと共に、僕に背を向けた姉さんは、どう見てもこいつもの姉さんなんだけど、長い付き合いから言わせてもうらえば、

まったく違つ、何か別のものに変わったような雰囲気をまとつた、姉さんだつた。

腹にまで響く雄たけびをあげる、異形の生物、ドラゴン。

先ほどまでは違い、まるでそれは威嚇の為と叫びよりも、恐れ慄いてあげる、悲鳴のように聞こえた。

「ふん、今更尻尾を巻いて逃げる氣か？そのよつな都合のことなど、許してやるわけがなかろつー！」

姉さんがそう言つた途端、白衣を残してその姿が僕の視界から焼き消える。

そして激しい衝撃音が聞こえたかと思つと、あの巨体が大きく揺れた。

目にも止まらぬ素早さで、姉さんが蹴りや突きを繰り出しているのだと判つたのは、何十トンもありそうなドラゴンが、聞くに堪えない情けない鳴き声をあげてその場に崩れ落ちてからだつた。

圧倒的で、一方的な暴力の奔流。

ドラゴンは、逃げ出す暇も、反撃に転じる機会も得られぬまま、大地に横たわる事になつたのだ…。

地面に捨て置かれた白衣を再び纏い、そのポケットから取り出したタバコに火をつけ、美味しそうに空に向けて煙を吐き出す。

「…まあ、いれぐらに痛めつけたおけば、我らに手を出す間も失せるである」「

およそ戦車でも持つてこなければ相手も出来なにようなバケモノを相手に、このセリフである。

つーか、手を出すも何も、次の機会があるんだらうかつてくらいい死に掛けになつてゐる気がしないでもない。

どれくらいかつていうと、恐る恐る木の陰から出てきた僕らの目には、当然倒れたドラゴンが目に入るわけで。

硬そうなウロコを持つていてもかかわらず、あちこちが裂け、骨やら体液やらその他いろいろな何かが身体から飛び出していた。

もう、なんと言つてよいや。

問題は、それでも「トイツ」がまだ死にきつていないつて事だけでも、まあ時間の問題だらう。

しかしながら、実際見ていた僕らが言うのもなんだか、どこの誰が身長こそ日本人女性の平均値をかなり上回つていているとは言え、全体的にほつそりとした体格の姉さんが巨大生物を倒したなどと信じるだらうか。

街を歩けばその容貌から結構な数の男達が振り返り、お供をしている僕を憎らしそうに睨みつける。

そんな姉さんが、およそ自分とかけ離れたサイズの巨獣を素手で倒せるだなんて。

おまけに返り血の一滴も浴びていない。

呆然とした僕らを尻目に、姉さんは「キキと身体を捻り、ぶつくさとなにやら咳いている。

「ふん… 久々だと力の加減がわからんな」

力の加減をしていたつもりでアレですか。

八馬の馬鹿が、大声を上げて姉さんを賞賛し、その勢いのまま瀕死のドラゴンの観察を始めた。

危ない時に真っ先に隠れていたくせに。

まあ、とんでもない事が大好きな奴にとつては、これ以上ない素敵さ加減なのだろう。

跳ね回るようにして肉塊となりかけている襲撃者をチエックしていくハ馬をよそに、僕は姉さんに尋ねた。

真っ直ぐに目を見て、
だ。

「何がどうなつたら」こんな事が出来るのや」

「あ——、これはじやな

「趣味が高じて置いた何とか言つ武術のおかげだと聞つのは却下だからね」

「何とかではない、捨刀流と言ひながら…ではなくて、だ。あー」

頬をこりこりと搔きながら苦笑にする。胸満々だったようだ。
どこの誰がそんな言い訳信じるんだよ。

「じゃあ、実は私は某国の『そこばくべ』とか言つ奴だったのじゃ

「じゃあって何だよ、じゃあって。嘘つくなんて、姉ちゃんしつか
いよー」「

簡単には誤魔化せないと察したのか、姉さんは「ふぬ」と呟つてタ
バコを携帯灰皿に放り込み、豊かな胸の前で腕を組んで長考に入っ
た。

風の音と、ドリームの今際のつめを唄。

それに似合わないハ馬の嬉しそうな声だけが、僕らの沈黙を包んで
いた。

「実はの、私はおぬしを守るために遣わされた、某国戦士なのじ
や」「

「で、僕はその国の王子様なワケ?だから、ナニコリのまことにから
ネタみたいな事を。」

「やうは言つても宏一よ。ビリ説明した所で、信憑性に欠けると思つたじやがの」

組んでいた腕を越しにせつ、ふんぞり返るみづにて背骨をノキノキ鳴らす。

ふんぞり返つたせいで強調された胸がその巨大さをアピールする。ついでに鳴らした首からの音は、ひどい肩凝りでも引き起こしていくせいなのだろうか…じやなくて、だ。

どう見ても姉さん、何か知つて隠してゐるだろ。

多分だけ。

いや、もつと社比で400%くらいの確率で知つてゐるじやないだろうか。

この世界がどうこうといふで、ここにビリして僕らがいるハメになつてゐるのかも。

説明を要求する…つて感じで断固とした態度を取つてゐる僕だつたけれど、他の連中はより混乱していたわけで。

「J—ちゃんつー。」

柊山が、がしつーっと僕にじがみつこってきたのである。

「…最近聞かれなかつた呼び方で、である。

僕も混乱しそうです。

「何がどうなつてゐるの? 瞳先生何であんなに強いつの? ジジビ? あれなに?」

興奮からか混乱からか、気になつた事柄を僕に向けて投げつけてくる。

「いや、終止。僕に聞かれても…」

「そうなの? だって山田君が『こういうのは野見山が慣れてるんじやないか』って」

そういう終止の背後で、うんうんと頷く山田君。

それは間違つた認識です。

つーか山田君、天窓遭遇率が高いからつて、僕がその中の事とか諸々にまで通じてるわけないじゃん。

「それを言つならハ馬の方が散々観察しまくつて、少なくとも僕よりは詳しいよ。下手な研究者よりも実際に天窓見る機会多かつたはずだし」

「… それもそうね」

顎に人差し指を当て、小首を傾げる。

うむ、むつむつや可愛いい。

つて、姉さん。話が逸れて助かった、つて顔して何無関係決め込んでるんだよ。

仕切りなおしだ。

「説明して、姉さん。何あんな事が出来るのか。ここがどうこうといひで、なんで姉さんはそんなに平気でいられるのか」

僕は真正面から、嘘うそまかしを許さない態度で、姉さんと伸び向かれ立った。

まだんまりかばぐらかすのではと、持久戦も覚悟してた僕だが、案外あっさりと質問の答えは告げられた。

「仕方ないの。まあ、いずれ話そうとは思つておったし、いついう状況になつた今、隠してもよいことはあるまい…。質問の答えじゃが、ここがどうこうといろかと云つのはお半ばももうわかつておるじやん。例のアレから見えておる世界じや」

一斉に、元やつぱまつと得心する。

僕だけでなく、ここにいる全員がわかっている。

理解したくなかったり、やうじやなかつたら良くなど心の片隅で思つてはいただらうけれど。

「何故平氣でいられるか、と云つのは単純な話、昔、ここに住んでおつたからの」

「……はい？」

先の答えとは違つて、流石にこれにまよつとついて行けなかつた。

「それって、どういふことなんですか？」

柊山もワケがわからないといった風で、姉さんに詰め寄つている。山田君に至つては、聞こえなかつた事にしようとでもしているかのように、空を眺めて平静を保とうと努力していた。

僕は、それが何を意味しているのかを、心の中で何度も何度も反芻して、認めたくない考えに行き着いてしまつていた。

そう。

僕と姉さんは、ここからいつもの日常の世界へと渡つた異邦人だといふ事。

そして、何故だか知らないが、再びこの地に戻つてきたのだといつわけだ。

それも、間違ひなく無関係な3人を巻き込んで。

そんな僕らの頭上では、元の世界にはありえない、大小一つの太陽が、何事もなかつたかのように世界を照らしていた。

日が翳り、辺りが夕闇に染まつてゆく。

どこに行くにしても、暗くては危険も大きいと言う事で、元の世界から一緒に跳ばされて来た、未だ息のあるドラゴンの首が突っ込まれたままの教室に潜り込み、僕らは見知らぬ世界での一夜を過ごす事となつた。

砕けた椅子や机の残骸の木の部分を拾い集め、姉さんのライターで火をつけ、焚き火を起こして迫り来る闇を防ぐ。

姉さんは、辺りを見回つて来ると言い残して、森の中に消えていった。

こうなると心細いどころではないが、横たわっている死にかけのドラゴンが逆に僕らを襲う程度の獣達よけになるという事らしく、いろんな意味で板ばさみの状況の中、誰も口を開かなかつた。

能天気なハ馬でさえ、だ。

「…帰れないのかな」

突然ポソリと、柊山が今にも泣き出しそうな表情を浮かべ、僕に視線を向けてきた。

そんな事、僕にわかるはずがない。

今のところ戻る術どころか、明日を生き抜く事すら危ぶまれている僕らとしては、帰れる帰れないに係わらず、とりあえず死なない程度に状況を把握して対策を練らないといけない。

ハ馬は、といえば。デジカメの電源が切れてしまつたと同時に、あいつ自身の電池まで切れたかのように大人しくなつてしまつていた。

「ちくしょー。電池…」

電源さえあれば、そもそも珍しくも面白い映像が山ほど取れるだろうし、生きて帰れれば、どこに出しても引っ張りだこになる事請け合いだら。

あくまでも、生きて帰れればの話だが。

「先生、どこまで行つたんだろうな」

沈黙を守つていた山田君が、焚き火の炎を見つめながら、心細そつに言つ。

言われて見れば、もう少一時間はゆうこ過ぎてゐる。

「ねえ、瞳先生に何があつたんぢや」

「まさかだろ。こんなデカぶつ相手にして掠り傷一つ無かつたんだぜ？」

心配する柊山をよそに、八馬は電源の切れたデジカメを抱え込んで、ありえないと言つ張る。

確かに僕も心配なのは確かだ。

だけど、姉さんに何かあるとは思わない。

むしろ、僕らに何かありそうで嫌なのだが。

再び無言の静寂が辺りを包む。

時折、どこか遠くから何かの遠吠えのような鳴き声がかすかに聞こえたりすると、膝を抱えた柊山のがビクリと震える。

彼女の瞳は、今にも零れ落ちそうなほどに涙で潤んでいた。

そんな彼女に、僕はいても立ってもいられなくなつて、その白くなるほどに握り締められた手に、自分の手を重ねた。

「柊山…。きっと、大丈夫だから」

ね？と重ねて言つ僕の言葉に、かえつて彼女の瞳の堤防は決壊してしまつた。

溢れ出した涙を拭う彼女に、何を血迷つたか山田君が横から割り込んできた。

「あ、安心してください、柊山さん。この山田、命に代えましてもお守りしますから」

「…」

うつむくの瞳で僕を見つめて、本日何度目かの懐かしい呼びかけに、僕も自然と優しい気持ちになれた気がした。

ここに毎日毎朝、殺伐とした視線ばかり浴びてたから、余計にだ。

山田君は、自分の一世一代のセリフが無視された事に、愕然として

いたが。

「あーちゃん、大丈夫だからね」

久しぶりに僕の口から紡ぎ出されたこの呼び名に、柊山はくしゃくしゃの笑顔で応えてくれた。

「…やつとその呼び方してくれた」

泣き笑いの顔が、心に痛い。

ずっと幼馴染だったのに、いつから壁を作つてたんだらう、僕たちは。

いや、僕が、か。

「けつ！見せ付けてくれるねえ」

ハ馬が半ば笑いながら憎まれ口を叩いてくれる。

今はその対応が凄く嬉しい。

下手に囃し立てられるよつは、山田君も落ち込まなくて済むだらうし。

落ち着いて、と柊山…あーちゃん、の頭を優しく撫でてあげる。

「ん…」

気持ちよさ気に笑みを浮かべるのを見て、僕は今の状況を一瞬でも

忘れる事が出来た気がした。

しかし、折角和んだと言つのと、突然かけられた声に全員硬直した。

「お楽しみのところスマンが、移動じゃ。用意せよ」

「はい？」

誰も気がつかないいうちに、僕の背後で姉さんがやけに不機嫌そうな顔つきで「立派していただのだ。

見たこともない、奇妙な棘のあるスイカほどの大きさの果物？のような物を両脇に抱えたまま。

普段は綺麗に巻いて、高く結い上げている髪を解き、その長い毛を一本、先程持つて帰つてきた果物のような物に巻きつける。
ひゅつ、っと風がなるような音立てて姉さんの手が一瞬消えたかと思つと、地面に置かれていたソレは、ものの見事に櫛形に切りわけられていた。

「結構硬いのにねえ。凄いわ、瞳先生」

「俺もやつてみてえ。先生髪一本くださー」

「断る。やりたければ自前の毛でせよ」

さすがにそれほど長い毛を持つ者は、姉さん以外に誰もいない。

残るもう一つも同じように切り裂くと、姉さんは再び髪を綺麗にまとめてしまった。

「や、遠慮しておらず、さあ食べよ。出来るだけ早く移動したい」

僕らがスイカのような形に切られた変な果物を恐る恐る口に運ぶ中、姉さんは辺りの瓦礫を掘り起こし、使えそうなものを見つけては、同じく掘り出したデイバッグに詰めていった。

「で、何があったの？姉さん」

教室に残っていた使えそうなものを詰め込んだデイバッグを背負い、僕らは姉さんに伴われて教室だったものからさよならする事になった。

別にこんな真夜中に移動しなくても、朝になつてからでいいじゃないかと、僕に限らず皆もそう言いたげな顔をしていた。

「少々気になる事があるの。ああ、別に残つて居たいのならば、居つてもよいぞ？私は知らぬが」

言つて、サムアップした親指で背後をくいくいと指す。

振り返つた先には、姉さんが倒したドラゴンの太い首。

の、やうにその先。

壊れた窓から焚き火の炎に照らされてぼんやりと見えるのは……当然首から向こうの胴体部分だけだ。まさか……傷跡が塞がつてゐる！？

「そんな…あれだけの大怪我が?」

教室に守られていた首周辺には傷が付いていなかつたので判らなかつたが、そのほかの部分についていた傷跡が、殆んどなくなつていた。

これにはさすがに全員が田を見張つた。

「ていうか、今の今まで死に掛けで…。やつを触つた時にやもう冷たくなつて、もう死んでるもんだとばっかり」

「それは死にかけた時にいやつ等が行つ、超回復の眠りじや。あれくらいで死んでおつては、この世界で生き延びられぬ。ほれ、ゆくぞ」

「ちゅうか、トドメ刺しひけば良いのに…」

それなら朝までいられるじゃないかとぶつぶつ言ひつ。

ハ馬、結構酷いな、お前。

「別にトドメを刺しても構わんかつたが…オヌシ、全部喰えたのかの?」

「は?」

「トドメを刺してしまえば」やつが発しておつた「氣」が消える。喰つてしまわねば、死肉を漁る獣達が山と寄つて来ておつたぞ?」

「それはさすがに……」

「うん、無理ね。だいたい、簡単ヒストリーメモとか書ひの無い」

そんな会話をしながら外に出る姉さんたちに続いて、僕も元の世界の残り番が漂う教室から外に出る。

その時ちゅうぶんの瞳が開き、じつにギロツと向けられた。
そこには怒りや恐れなどの感情はなく、ただ淡々と生を喜ぶ輝きだけがあった。

「せ、先生、痛めつけられたのを恨んで襲いかかっては可能性は？」

ちよつといじつた山田君が、姉さんに駆け寄りまたボソボソとそう聞いた。

「…まあ、後々私より強くなつたらありつるやも知れんが、今のところ大丈夫であろう」

姉さんの言葉が判るのか、ドゴンは低く唸るように咽喉を鳴らして眼球だけを動かして僕らを順番に見つめ、そして再びわっきの眼に付くためか、ゆっくりと目を閉じて死んだように動かなくなつた。

動かなくなつたドゴンに別れを告げ、何故こんな事になつたのだろうかと思いつつも誰も言葉にできないまま、見知らぬ世界への一歩を刻み始めた。

人の背丈など軽く凌駕する草花や、見上げても穂先が何処まで伸びているのかわからない樹木。

岩の壁だと思っていたら樹の幹だった、なんてこいつのは当たり前にあつた。

姉さんに先導されて何とか歩いているが、柊山やハ馬は無黙口を叩いている体力がよくも続くものだと感心してしまう。

「わっあのドリゴンや…まだ直りきつなかつたのかじり」

「見た感じ怪我は消えてえたけどな」

「だな…」

山田君は元々無口なだけなのか、相槌を打つ程度にしか喋らない。

まあ、こんな状況でよく話をするだけの気力があるもんだと思つが、何か話していないとやってられないのも事実だひつ。

星や月明かりなんてぐるぐる届かない、僕らの視界一杯に広がる、暗く深い森。

しかも、どんな生き物が居て、どこに行けば安全なのか、とにかく皆田見当が付かない。

唯一、この世界の事を知つてこるだらう姉さんは多くを語らない。

聞けば答えてくれるかもしぬいが、知つてしまふと逆に何も出来なくなるかもしぬい。

さつきのあれだけ大きなドラゴンですら、「あの程度は、日本の街中にいる野良犬程度のもの」らしいから。

怖すぎる。

そんなのが跳梁跋扈している森に足を踏み入れていると云つ事実が、僕らの足を重くしていた。

皆が持つ木の枝の断面が、火を灯したようにほのかな光を発し、足元を照らす。

何しろ手を繋いだところでその手が見えないくらいに暗いため、姉さんに歩けないと文句を言つたらその辺に生えていた木の枝を手折つて手渡してきたのだ。

本音を言えば、教室の所に戻りたかったんだが。

「『星の小枝』と、昔は呼んでおつた。太陽には遠く及ばず、月にも敵わぬ弱い光故にな。昔はそういうモノだと思つて深くは考えなんだが、アレじゃな。この樹の樹液が何かが空気に触ると発光するのか、それとも…」

手折った途端に薄明かりを発した木の枝を配りながらぶつぶつ言つていた姉さんには、皆の発する空気が読めなかつたのだろう。

そんな姉さんは、時折こちらを振り返りつつ、先頭に立つて道を開拓している。

手にした木の枝が、まるで切れ味鋭い鉈のように、前進を阻む雑木

やう向やうを切り裂いてい。

も、こうして歩き続けて何時間経ったのかも判らない。

未だ歩けている事に、自分を褒めてあげたいくらいである。

まあ、元々ハ馬はスポーツ万能で天窓を追いかけるために鍛えているらしいし、山田君はいかにも体育会系だ。

柊山にいたっては、無駄に体力が有り余っているために、僕の背負つていたディバッグまで持つてもらつてる始末だ。

だが、その鬼のような体力も、栄養補給が伴つてこそである。

元の世界での昼食以降、食べた物といえば、スイカによく似た果物っぽい何かだけ。

それ以外には何も口にしていないのだ。

下手に生水なんて飲めないし、その辺に生えている物も、姉さんに聞かなければ判らない。

野生動物を捕らえるにいたっては、下手するとこちらが捕食対象だ。

下手に動けば命が幾らあつても足りなくなるだらつ。

だから、姉さんに進言したのは、間違っていたとは思わない。

ただ、間が悪かつただけさ。

「…あの、姉さん？ そろそろ何か…」

「…」

何か食べ物探さないかと進言しようとした僕を制し、手にした星の小枝を地面に突き刺すと、同じように明かりを消すよこと手振りで指示された。

何があるのか知らないが、この世界で姉さんの言つことを見かなければ生き永らえるのは難しい僕たちとしては、従うほかに無かった。

暗いの怖すぎ。

姉さんは無言で辺りの気配を探つてゐるようだつた。

聞こえてくるのは風の音と、虫の音と、何かが周りでうごめく気配…つて！ なんと、無数の光る眼が僕らのまわりをぐるりと囲んでいたのだ。

「なに…アレ？」

真っ暗すぎてもよくわからないが、光る眼を持つ何かが一斉にこちらを襲つべく、集結してゐるのは間違いない。

「…静かにしておれ。喧しい」

静かにしても騒がしくとも、恐らくは周囲を十重二十重に取り囲まれている状態はそのままなわけで、僕らは微動だにできず、姉さんの次の言葉を待つていた。

「……来おったか、存外早かつたの」

舌打ちと共に吐き出したその弦きに耳を澄ませてみると、樹々のざわめき混じつてかすかに聞こえてくる音があった。

姉さんの言葉を勘繰れば、僕らを追うものなのだろうか。

だがこう暗くては何も出来やしない、と思つた時、まばゆい光を発する何かが突如として現れ、暗闇を切り裂いた。

「カラードリウス……また厄介なモノを引き連れて来おったわ

姉さんの弦きが聞こえる。

だがソレを確認しようと、満たされた輝きが暗闇に慣れていた僕らの眼を焼き、周囲の常闇の森を照らす。

周りが何も見えない中、電子ライターの作動音がかちりと響き、姉さんが嗜むタバコの匂いが漂ってきた。

「カラード…何?」

聞いても答えは返らない。

ただ、僕らの周りにいたであろう何か達は、輝きが合図だったかのようにギチギチとした音を上げながら迫つてくる。

その足音が迫る方向に、さらに距離越しでさえ明るく見えるほどどの門きが巻き起つた。

今度は大氣を割るような轟音とともに、まるで髪が逆立つよつなりちりとした肌触りの空気をみながら。

さすがにこの展開は誰もついていけないようで、目が慣れてさえ、上を見上げたくないと思っているのが過半数だった。

少數意見をお持ちの人物は推して知るべし。

「でつけえ…鳥？が、ひのふのみの… 5羽か」

八馬だけが空を見上げ、呆然と呴いていた。

姉さんは平然とタバコを燻らしながらも、辺りを油断なく探つてゐるようだ。

柊山も山田君も、結構いつもどおりのよつて見える。

見える気がする。

多分もう、事態のインフレで多少の事では驚かなくなつてるのかもしない。

僕があしつこちびりそつたのは内緒だが。

嫌々ながらも頭上を見上げれば、眼に入るのは空を覆う巨大な樹木の、それだけでも大木といつて差し支えない大きさの枝々と、その隙間を縫つようにゆつたりと飛ぶ、巨大な翼。

白いのが4羽と、それらを圧倒する大きさの紅いのが一羽。

先程閃光が走った方に眼をやると、焼け爛れた蟹とも虫ともつかないような奇妙な節足動物が折り重なるようにして、燻りながらその屍を晒していた。

ゆっくりと高度を下げる巨鳥が今の光を放つたのならば、僕らは九死に一生を得たわけである。

エサの取り合いでなければ、の話だが。

暫くの間上空で旋回を続けていた巨鳥たちであつたが、紅い鳥が一際高く鳴くや、一斉に翼を畳んで手近な枝にその羽を休めた。

まるで取り囲むように樹木に降り立つ巨鳥たちをよくよく見れば、その背には、まるで戦士の魂をフロプトの元に送り届ける使命を持つ、ヴァルキリヤのような美しさを持った、純白の翼を持つ者達が居た。

「天使…」

柊山が呟く。

思わず口から出てしまつのも宣べなるかな。

彼女ら…いや、彼らか?は、元の世界で御使ないと呼ばれるに相応しい美しさを備えていた。

そして鳥の背から降りるや手にした槍を掲げ、その黄金色の髪だけを風に棚引かせ、まるで微動だにしなくなつた。

そして残る一羽、他を圧倒する巨大さを持つ赤い鳥は、僕らを守る

ようにして生えるそれなりに大きな周囲の木々を小枝のようにへし折りながら、田の前に着地した。

その巨大さは、予想以上に圧倒的だった。

空を飛ぶジャンボジェットが田の前に降りて来たと思つてくれれば、実感できるかもしれない。

その紅い田鳥が、長い首を曲げて僕らを覗き込むように見下ろしてくれる。

果たして、その頭部に人影が現れた。

未だ続く上空高くで輝く光源が、その姿を浮かび上がらせ、シルエットで僕らに見せ付ける。

黄金率もかくやと言つぽじの優美なラインを見せ付ける肉体に、蜂蜜色の巻き毛。

その背に伸びる、白い“一対の”翼。

最早羨ましいところ起らいないほどに見事な造型だった。

僕らを彼女たちはどうしたいのか。

保護でもしてくれるのか、それとも連行しに来たのか、どっちもいいからこの物騒な場所からひととと移動させてもらいたいもんである。

腹減ったし。

横では姉さんが、「……さて、不思議と殺氣は感じぬが。どちらせよ多勢に無勢、こちらは貧弱な者達のみ。私と宏一だけならば、囮みを破つて逃げられぬ事もないが……益々持つて厄介であるな」と物騒な事を呴いていた。

そんな姉さんの独り言と、何を言つて居るのか判らない綺麗な声が僕の耳朵を打つたのとは、ほぼ同時だった、はずだ。

誰の声だ?と思つたとたん、田の前の鳥が先程とはまるで違う、焦つているかのような短く甲高い鳴き声をあげた。

それにつられて視線を上にやると。

白い翼を開いた、銀色の瞳を持つ端整な顔立ちを持つ女性が、僕に向かつて落下して来る所であった。

その美麗さに一瞬心を奪われた僕は、どう対処すれば良いのか判らないまま、何か柔らかいものに押しつぶされ、何故だか幸せな痛みの中で意識が遠のくのを理解していた。

「あ、姉さん。ソレ美味しい？」

「自分で確かめよ」

ぐつ、つと僕の口に掛けてしまはれる、奇妙な螢光色の何か。

恐る恐る齧ると、ぶつりとした歯ごたえの後に僅かな苦味とそれを包む酸味を含んだ甘みが広がる。

それ自体は不味くはないが、味付けが薄すぎてなんとも馴染めない味だった。

「ほんと、もうちょっと味付けに気を使えばいいのにね」

僕の横で、平然とぱくついている柊山。

結構タフだねえ、正直意外です。

八馬はと言つて、「イイツの神経はナイロンザイルで出来ているとの世間の評判どおり、味も見た目もまるで無視して、快調に咀嚼能力を發揮しております。

「味はともかく、量だけは満足した」

そつと置いて、膨れた腹をぽんぽんと叩く。

なんて調理人に失礼な奴だ。

山田君は、状況が良く飲み込めていないようで、未だに茫然自失中。

それでも手にした肉に齧り付いては飲み下しているあたり、それまでの空腹さ加減がわかるつといつものだ。

かく言う僕は、先に言つたよつて口に合わない」といの上ないので、食傷氣味です。

「姉さんが作つてくれたよかつたのに…」

「無理を言つ。下手をすれば、我らが食卓に乗つていたかもしけんのだぞ?」

……嫌な事言つなあ。

仕方ないので、味わうのは放棄して、胃袋を満たすことにだけ専念する。

で、だ。

今現在の状況はといいますと、これがまたなんといつか。

姉さん曰く、「良いふうに取れば、客人扱い。軟禁とも言つが」といつた感じで、牢屋に放り込まれなかつたのが不思議、だそつな。

お食事を提供されてそれなりの扱いをしてもらえてるつてのが、どうにも胡散臭いというのが皆の総意であった。

実際、なぜ連れてこられたかが判らない。

怪しい旅人に一宿一飯を恵むのが趣味つてワケでもないだろうしね。

ただ捕らえるだけなら、あんな状態で目が覚めるはずがない。

ちなみにあんな状態つて言つのは、あまり口に出すのがはばかられるので姉さんたちには言つていない。

どんな風だったかと言つと…

何か柔らかいものに押しつぶされて氣を失った僕が目を覚ましたのは、磨き抜かれた石の壁を持つ、綺麗な部屋の寝具の上でした。

それだけならまだ何とか状況的に納得はいく…と思い込めたなんだけど、横に綺麗な見す知らずのおねいさんが添い寝してくれていたのに、思わず大声を上げてベッドから飛び降りて、壁際で逃げ出しありました。

流石に素っ裸の、ソレも美貌の女性が横に寝てたら驚くさ、マトモな日本の高校生ならば。

しかも背中に翼が生えてたら、ねえ。

僕の悲鳴を聞きつけたのか、外から扉を叩く音が聞こえたけども、そのおねいさんが一言叱責したら、すぐ収まった。

僕をじっと見つめて、何かを話しかけてくるんだけども、さっぱり判らない。

おまけに、僕も素っ裸。

壁に張り付いてる場合じゃないんだけども、どうしようもない。

流石にこのままじゃ拙いので、壁に掛かっていた、やけにふわふわした薄手の毛布のようなものを拝借して体に巻きつけて取り合えず自分のお粗末な物を隠したんだが、それを見たおねいさんがやけに嬉しそうな顔をしたのはなんでだろ？

で、コレで一安心と思つたんだけど、あああ、失敗。

僕だけ隠しても意味がないんだよ。

こんな綺麗なおねいさんの裸ならじつくり見ておきたい所だけれど、実際目の前にいたら眼のやり場に困るとは、何と言つ現実。

と、そこで眼に入ったのが、おねいさんの胸元できらりと光る紅い石。

それって僕の形見のペンダントでは？？と思ひ自分の胸元を思わず探る。

あつた。

こんなへんてこな紅い石とよく似たのもあるもんなんだなあと思わずまじまじと見つめて確かめた僕だったが、お互い裸なのを思い出して再び慌てて後ろを向いた。

あっちを向いたりこっちを向いたり、一人で視線をさ迷わせてあた

ふたと挙動不振な僕の行動の理由が判つてもらえたのか、おねいさんはにこりと笑つて自分が背負つ綺麗な白い羽で、自分を包み込んだ。

これでビリ~といった顔で、こちらに向き直る。

いや、その、素っ裸よりも逆に、その、あの。

鼻血出そうです。

とりあえず腰に厚めに布を巻いて、現状を再確認することに勤める。先ずは姉さんたちの状況を知りたい所だが、出来る事といえば田の前のこのおねいさんに尋ねる事ぐらい。

でも他の4人はどうなったのか知らないか、と聞いても、そもそも言葉が通じないのかして、首を傾げるだけ。

僕が天井を見上げてこれからどうなるのかなと途方に暮れていると、おねいさんがベッドサイドに置かれていた透明なベルを振り、透き通つた硬質な音色を響かせ人を呼んだ。

ほんのわずかな沈黙のあと扉がノックされて、恐らくは側仕えの人なんだろう、落ち着いた雰囲気を纏わせたとした女性が入ってきた。すらりとした長身で、肩までの黒髪をゆるいウェーブで揃えた、姉さんよりも若干年上といった感じだろう。

いわゆるメイドさんなんだろつか。

おねいさんは、僕にはわからない言葉で一言二言喋り、その人に何

らかの指示を出したようだつた。

メイドっぽいおねーさんはソレを聞くとゆっくつとお辞儀をして即座に退室、今度は何がカゴを持ってすぐに戻ってきた。

手にしていたカゴには、僕の着ていた学生服と、なにやら白い薄綿のよつな衣。

僕の服は当然すぐ判つたけれど、もう一方は、何だろつかと数瞬悩んだ。

もしやどちらかを選べとか?とも思つたがそれは取り越し苦労で、おねーさんの物であつた様だ。

服を手渡されて、いつもの様に「あ、すいません」と頭を下げた時に、メイドのおねーさんの手が伸び、僕の頭を柔らかく胸元に抱え込んだ。

何事が起つたかかなりの時間理解できなかつたが、何をされているか判つたとたんに抜け出そと力を込めるど、メイドのおねーさんは僕をあつさりと開放し、につこりと微笑んだ。

おねいさんの方を見ても、同じようにつこつと微笑むだけだし、そつぱりわけが判らない。

とつあえずせつと服を着よつて、手伝われよつくなるのをジースチャーで向とかお断りして、部屋の隅つじで「おねーさん」と身に着けた。よつやく、どうとかよつとかおねいさんを真正面から見れるわけだが、そこで僕はよつやく気がついた。

昼飯を味わう事も忘れて没頭してしまった、あの映像に『』ついていた、あのときの女性だ、と。

だけど、あの時と違つて、金髪の髪は、なにやら白い羽を模した冠のようなもので纏められ、襟足だけが覗いている。

綺麗な金髪なのに、もつたいない……じゃなくて。衣を纏つていてさえ、十二分に刺激的すぎる。

再び田のやりビーナに困っていたら、また苦笑して背中の羽で自分の体を覆つてくれた。

しかし、僕だけ他の4人と別に分けられてるのはなんだろつか。

首を捻つても答えなんて出てこない。

もしかしたら他の4人も似たような接待を受けていたりして。

八馬はきっと喜ぶだろ、男としては極めて正直なやつだし。

山田君の反応は知らん。正直どうでもいい。

でも、姉さんと柊山が色男な翅翼人に接待されてる図を想像したら、気分が悪くなつたので止めた。

着替えを終え、さつきまで腰に巻いていた借りた毛布を壁の出っ張りにかけようとしたら、おねいさんが後ろからやんわりと首を振り、僕の手から取つて僕の肩にかけてくれました。

…ああ、これって毛布じゃなくて、マントなんだ。正直僕には似合わないよな、と思っていたら、手招きしつつ彼女は部屋を出た。

続いて部屋を出た僕が見た光景は、ちょっと想像を超えていた。

扉をくぐったら普通そこにあるであろう廊下といつもののが、ここにはまったく存在しなかつたのである。

部屋の前に、2mほど突き出したステージのよつたものがあるだけで、あとは上も下も幅数百メートルは有りうかと言つ吹き抜けなのだ。

はるか彼方でかすんで見える羽ばたきは、おやじいこの住人なのだろう。

そりゃまあ、空を飛べるんだから、別に不自由は無いんだろうけど、飛べない僕にどうしようと？

天井は様々な色の半透明な何かに覆われ、空を拝むことは出来ない。

下は、とこうと……恐る恐る、這い蹲つて覗いてみれば、はるかな下方にどうやら水か何かが流れているような音が響いてくる。

巨大建造物の吹き抜けの、その最下層に河を作ってるのか…？

ともかく落ちたら死ねますか、これは。

驚く僕をよそに、先程のメイドさんと顔をくつつけ、なにやら無言で佇んでいるおねいさん。

やけに絵になる光景に、僕は声をかけるのも躊躇われた。

間違つても落ちないようになつたまま後ろにすり下がる。あまりの高さに股間が縮み上がつたままだし不恰好この上ないが、落つこみゆりました。

と、ずり下がつた足が何かに当たる。

自分の股間越しに覗き込めば、麗しい脚が2セット。

ちゅうと見とれでいるが、片方がこちらに向き直り近づいてくる、と思つたら突然僕を上から抱き抱えて。

そのままで中に放り出してくださいました。

恭しく頭を下げる美女メイドさんの姿が逆さまになつて遠ざかるのを視界の片隅に入れたまま、自分の状況を正しく認識したくない脳が、意識を放り出しそうになるのを無理やり押さえ込んだ。

せめて僕を放り投げたおねえさんに一言ぐらご文句言つてやりたかつたし。

「せめて何か声かけてからにしろ―――つて、一緒に落ちてる―――！―――しかも翼、体に巻いたまま―――！？」

落下とともに速度が上がる中、その体に巻いた翼を広げて飛んでください助けてくださいと叫んでみたものの、伝わらないのか、聞こえないのか一向にその気配がうかがえない。

正直もう駄目だと覚悟した。

もう、眼を瞑つて神様でも仏様でも悪魔でも邪神でも何でもいいから助けてくれ、と祈るばかりだ。

まあ今まで神様に祈った事は皆無なので、利益なんてある訳がないんだが。

と、馬鹿なことを考えて恐怖を紛らわせていたら、いきなりがくんと身体に衝撃がかかった。

恐る恐る眼を開くと、背後から僕に抱きついたおねいさんが真っ白な翼を広げ、ゆつたりと滑空していた。

意外な力強さで僕を支え、空中を舞う。

慣れてしまえば案外怖くない。

しばらく空中散歩としゃれ込むのも良いな、と思いまやすぐに速度を落とし始めて、他よりもひときわ大きめの扉の前にある、岩のステージに降り立つた。

さつきの部屋よりも大きなステージが設けられたそこには、両脇に槍を携えた屈強の警備員っぽい翅翼人が立ち、僕らを出迎えた。

大仰に、槍の石突きつて言うのかな？尻の部分でステージを叩き、何かを叫んで重そうな扉を片手で押し開く。

開いた先は、今度こそ予想の範疇だった。

豪奢な装飾で飾られた、だだっ広い広間の真ん中に、これでもかといつほどの大さのテーブルが、ずどんと鎮座している。

そして、そのテーブルには、何故だか威風堂々とタバコを咥えて紫煙を吐き出している姉さんと、あちこちきょろきょろ見回している柊山、手当たりしだいに部屋の中を見て回っている八馬に、居心地悪そうに縮こまっている、山田君の姿があった。

姉さん以外は、こちらの人と同じよつな、ひらひらの衣に着替えていた。

体格のいい八馬と山田君はもちろん、柊山も中々お似合いである。

ちりぢりと田だけを動かして、拳動不審な山田君。

どうも、田のやり場に困っているようで、顔が真っ赤だ。

部屋の隅で待機している人達に何か声をかけたおねいさんは、僕を姉さんと柊山の間に空けてあつた椅子へと導いて座らせ、自分はテーブルを挟んで反対側に座る。

少し遅れて八馬が席に着くとすぐに、僕らが入ってきた扉とは反対側にある、ほんの少しばかり小さめの扉がゆっくりと開かれ、大量の料理が配膳され始め、今に至っているのである。

至つているのであるが…。

「何怒つてゐるの？」

「別に怒つてないわよ」

あんまりにも僕を見る眼がきつこので一言静ねたら、間髪いれずに
帰ってきた言葉がこれ。

なによその変な格好、と言しながら、がぶりとこう擬音がぴったり
くる勢いで何かの肉の塊に食らこづく。

このマントがお氣に召さないから。

それにしても、もうチラシト女の方っぽく食べてもううえないもんだ
らうか。

ねえ、と反対側に座る姉さんに振ったが、「ん? 何がじや?」と一
瞥も無じていつものみづ元氣よべ、詰め込むよづして食べてい
る。

いや、良いんだけどね、健啖家なのは。

そんな食欲で、よくもまあその体型が維持できるよ、二人とも。

ああ、対してお向かいの席に座るおねいさん、実に優雅にお食べで
すこと。

手掴みで肉をひきつ取つて口に運んでいたり、である。

まあ、西洋式でもないこの食卓のマナー、何を持つて正しくのかが
わからぬこの構わないことは思つたですが、どうこう文化なんだろ
う。

「で? お楽しみだったのか?」

二人に挟まれて居場所が無い状態な僕に、八馬が骨を咥えたまま、
柊山越しにこじらに小声で話しかけてくる。

僕の左右で、一瞬ピタリと動きが止まるお一方。

まあすぐ再起動したけれど。

何にもありませんでした、といつて信用してもらえるんだろうか。

まあ、お互に素っ裸を見たし見られはしたわけだから、何にも無かつたとはいえないのかもしれないんだけども。

その時の光景を思い出し、思わず頬が緩む。

いかんいかん、ここがどういうところで、何がどうなってるのかもよく判つてない状況なんだから、ちょっと落ち着け、僕。

先ず現状を把握する事が肝心なんだから、何をするにしても。

とは言え、言葉も通じないんじゃ、元の世界に返る方法知りませんか?と尋ねることも困難だし。

とりあえず八馬の質問に、「んなわけあるか」とだけ答え、食事を再開する。

が、やはりビビり口に合わない。

もうチョット塩味が効いてたら、まだ食べれなくも無いんだけどなあ

当たり障りの無ことひりで、何かの果物を手にして、匂いをかいでみる。

甘い香りがして、これならこなると口にした。

「酸っぱーー」

シャリリとした歯いたえは心地良いが、味はとこうと何とか食べられないではない、と言いつくらっこに酸味がきつかった。

「どう見ても野生種だから。いつも食べているような果物とは、一緒にせぬがいい。アレらは農家の方々の、努力の結晶なのじゃから」

特に日本の栽培種の糖度は世界一、らしい。

もつああらめた。

仕方なく味付けの薄い、食材不明の料理を本格的に手をつけ始めた所で、姉さんが口元をねぐつて、正面に座るおねこさんに向直り、こう言った。

「わい、やうやう話したいものじゃが。おぬし、話をなんと言ひまか?

？」

いや、日本語通じなかつたよ？

そつ横から伝えたよつとした僕を遮つたのは、正面に座るおねこさん の口から漏れ出した、どこからどつ聞いても立派な日本語であった。

「私は……そうですね、アウル……とお呼びください」

そう言って、問いかけた姉さんではなく、僕に向かってこうと微笑んだ。

えらく流暢な日本語です。

ええもう、出鱈田な日本語が流布してゐる昨今、ここまで正調日本語が喋れるなんて、見習いたいくらいです。

しかし、僕ら何にもいいことも悪いこともしないつもりなんだけど、一体どういう扱いになつてゐるんだろうか。

一田僕を見て恋に落ちてしまった、何て調子のいい話は有り得ないとして、だ。

そのあたりキッチンと教えてもらいたいもんである。

その点を聞こうと思つて口を開きかけたんだけど、先に言葉を発したのは姉さんだった。

「では、アウルとして覚えておこひ。それで、我らをここに連れ込んだのは、ただの人助けではなかう?」

「ちよっと、姉さん」

そりやあ、確かに何か裏がありまくりだとは思つけど、とつあえず礼くらいは言つておかない?実際に助かつてゐるんだし。

「宏一は暫く黙つておれ。私はあやつに聞いておるのだ。納得いけ

「ひやくべはなま」

いつもの姉さんらしくない。

常日頃、僕に向かつて「礼儀は人が人として生きるために育まれた、文化の一つじや」と、礼を失することを厳しく諫めてるのに。

険悪な雰囲気を纏わりつかせた姉さんに、ほかの三人もチョットとびつてる。

こんな姉さんを見るの、僕だって久しぶりだもんなん。

「別に私どもには、隠し立てするようなことは、一切有りはしませんよ?」

心外だと、穏やかな表情のままにそう告げる、おねいわ……アウルさん。

こういう人、怒らせると怖いんじゃないかな。

無言で見つめあう美女二人。

冬の北風のような無表情さで姉さん対応してると、対照的に春の日差しのような笑顔で受け止めるアウルさんを見比べるだけしか出来ないへタレな僕は、どうしようかと他の三人に視線を送った。

うん、みんな他人のふりしないでくれないかな。

下手に係わるとどうぱつちりが来そだからね、気持ちはわからないこともないけれど。

八馬は興味津々な顔をしつつ、山田君はわれ関せずとばかりに一人とも一切口を挟む気はないらしく、黙々と口を動かしている。

柊山だけは、若干不機嫌そうに眉根を寄せて、椅子の背もたれに体重をかけるようにして大きく背をそらし、姉さん達を伺うのみだ。

まあ、端から首突っ込んで、嫌な結果になりそうだし、ソレが正解かも。

僕もそつちのお仲間に、と思って位置を少しずつずらして つて、柊山。

なに押し返すんだよ。

「…なんだよ、もう」

「アンタなんか、あの美人な天使といぢやついてればいいのよ!」つて言わても、連れ込まれた時、僕氣絶してたわけで。

好きでアウルさんと一緒にになつたわけでもないんだけれど?

ああ、そういうえば。

「あの、ちょっとお聞きしたいんですけど」

「はい、なんでしょう」

「宏一。話の邪魔をするでない、後にせい」

恐る恐る右手を小さく差し上げて、疑問を尋ねようとした僕に、対照的なお言葉が飛んできた。

「え、いやあの。僕、気絶してここに運び込まれたわけですよね？何かがぶち当たった所までは記憶にあるんですけど、あの、何がぶつかったのか、知りたくて……」

先ずは最初に接触した時点からの疑問をと想い、そう呟いた途端、何故か沈黙が……。

姉さんと柊山は、ぶすっとれて明後田の方を向いてしまった。

八馬は嬉しそうな顔して笑つてゐるだけだし、山田君なんかはやけに悔しそうな顔して「何でアイツばっかり」なんて、訳のわかんないことをぶつぶつと言ひ出した。

正面に向を直ると、アウルさんが頬を染めて、俯いて……照れてる？

「あ、ああの。もしかして落ちてきたのって

「はい、私です。やつとお会いできたのが嬉しくて、はしたない所をお見せしてしまいました」

と熱い吐息なんて吐いちゃつてくれたりしてなんの事やう。

するつてーと、あの、柔らかいものは……。

その、姉さんに勝るとも劣らない、脅威の驚異な胸団を誇る、アレですか？

男の夢、れぬに。

ご馳走様でした、ありがとうございます、当たつた感触しか記憶に残つてないのが残念ですが。

思わず頬が緩むのが自分でもわかる。僕の照れてるのが楽しいのか、アウルさんもニコニコ顔だ。

ふとアウルさんと視線が合つて、お互に赤くなつてしまつたりした所に。

「お、ふつー

思わず僕の口から飛び出た苦悶の吐息。

さ、左右から、脇腹に肘の一撃がクリーンヒット……なんで？

「そのことほむつ良い。で？何ゆえ我らをここに連れてまいつたのか、と尋ねておるのじやがの？」

テーブルに突つ伏するほどの一撃を僕に見舞つた事に關してはノーノメントのまま、一向に追及の手綱を緩める氣のない姉さんが、先ほど質問を繰り返す。

「それでしたら、先程の答えから理解いただけるかと」

れつきの答へつて言つと、やつと会えた、つて奴？

「あの、それって一体どうこう」

問いただそうとする僕を制して、姉さんが続ける。

「それも含めて、じゃ。オヌシ、我らを、宏一をどうする気じゃ？
事と次第によつては、私は宏一に仇成す者を、全力で排除する事に
躊躇う気はないぞ？」

姉さんの全力……あのドラゴンを吹つ飛ばしたりぶん殴つたり蹴り
飛ばしたり。

アレを対人に用いたら、跡形もなくなつちゃうんじやないだろ？

ソレはちょっと止めいただきたい。

姉さんを人殺しにする気なんて、僕には毛頭ないし。

いくら僕を守るためだとか言われても、だ。

「ねえ、野見山君。ちょっと瞳先生に尋ねて貰つてくれないかな」

緊迫しまくの状況の中、柊山が僕の肩をつんづんと突付き、なに
やら聞いてくれといつてきた。

「何を？」

「何をつて…帰り方知らないか、つて事に決まつてゐじゃない

ああ、そりゃ確かに。いや、僕だつて最初に聞いつけとしてたんだけ
どね？」

「ソレくらい判るだろ、普通」

「別に帰れなくつても、俺は構わないんだがなあ」

山田君と八馬がなんぞ言つてるが、軽く無視しておひづ。

さて、聞かないといけないのは確かなんだけど、今の雰囲気に割り込んでいく根性は、僕はない。

命が惜しいですから、ええ。

しかしながら、横で「お願い光線」を放つてゐる終山の後押しを受けて、引き下がれるはずもない。

「あ、あのぉ、ちょっと質問があるんですけど……」

「あ、今度は何かしら?」

「後にせことじやうじやうが、まったく

「う、想定じおつの反応。姉さん、ちょっと落着いてね。

アウルさんが酷いことする気なら、もつとつて落着いてねば。
多分。

珍しく不機嫌さをあらわにしてゐる姉さんの嫌な気配を真横に感じながら、チョットアビクビクしながら聞いてみる。

「あの、えっと、僕らの世界に帰る方法って、知らないですか?」

意を決して尋ねた僕。

でも帰ってきたのは、予想外の方角からの、野太い声だった。

「帰らせるわけにはいかぬな！」

僕らが入って来た扉がいつの間にか開かれていて、さつきアウルさんと一緒に居たメイドのおねーさんを従えた、筋骨隆々のおじさんがそこに踏ん反り返つて立っていた。

年の頃は五十歳くらいかな？短く刈られている金髪はところどころくすんでいて、とても美しいとはいえないが、纏う雰囲気やその体格から、美丈夫と言う言葉がこれほど似合つおっさんを見たことがなかった。

壯年の凄みといつを含めれば、ダンティーといつて憚らない外観である。「いやましい。

「えつと…どうぞま？」

「お父様！それにファナーまで…」

僕の素朴な疑問の呴きは、アウルさんの声で即解決した。

「あの女性はファナーさんといつか。また美人さんが増えたのは嬉しいが、おっさんは要らんな。しかし……似てないなー」

八馬のそのまんまな感想にみな頷く。まあ僕も激しく同意するが。

だがそれより何より、この人も日本語で会話してくれている。

「他の者が居るのだ。父と呼ぶでない」

「……申し訳ありません、アル・イラーフ」

叱咤され礼を行うアウルさんを片手を擧げるだけで応え、鷹揚にアウルさんに近寄り、彼女の横の席に腰を下ろした。そして值踏みするかのように僕に無遠慮な視線をぶつけてきたんだ。

どう対応していいのやら判らず、そのまま固まっていると、アル・イラーフと呼ばれたアウルさんの父上は口を開いた。

「このよつな者がそうなのか……。ふむ、これといって、何か違うところ訳ではないのだな」

ふふん、と猛禽のような笑みを浮かべ、今度は八馬、終山、山田君と視線をすりはじめてゆく。

すると、眉を顰めてなにやらアウルさんに耳打ちし、そして、姉さんへと向き直った。

アウルさんはとこつと、その耳打ちにゆづくつと、小さく頷いたまま、視線を伏せて黙りこくってしまった。

どうしたのや、ひ。

しかし、このオッサン……今度は姉さんをじろじろ見て、なに考えてるんだろう。

つて、姉さん、いつの間にまたタバコを。

「姉さん、タバコ幾つ持ってるの？」

「備え有れば、憂い無しじや」

そういつて開いた白衣の懐には、カートン買いしたタバコが、左右に一包みずつ納まっていたりする。

しかし、およばれというか、野垂れ死ぬかも知れなかつたのをこうして招いてもらつて、お世話してもらつてゐる立場なんだしねえ。

「喫煙していいか位は聞いたの？灰皿は…携帯してるか

「つむ。そもそもしゃつらが喫煙と言つ習慣を理解できるか怪しいのでな。だいたいこちらの都合も聞かぬ奴らに、譲歩する気は微塵もない」

だけだと問う返さうとするも、聞く前に姉さんとの会話は打ち切られた。

他でもない、姉さん自身によつて。

「我らはおぬしらに、何の恩も義理も無い。このよつな扱いを受け る謂れもない。早々に立ち去らせてもらいたい！」

立ち上がり一気に言い切つて、咥えっぱなしのタバコを思いつきり吸い、紫煙を吐き出した。

「……その気性、覚えがあるが 気のせいか。彼奴ならば、このよつな場所まで易々と連れてこられよつはずが無い」

何を一人で納得してゐるんだか。アル・なんだつたつけか…、もうオツサンでいいや。

アウルさんには悪いけど、姉さんと同じく僕もこの人あんまり好きになれそうもないし。

「お父さ……アル・イラーフ。それは一体？」

どういう意味なのか、と尋ねるアウルさんに、若いお前は知らぬか、と呆れたように咳き、昔の話だと前置きして話し始めた。

えっと、僕らの件は放置ですか？

その昔、この世界には翅膀人たち マラーアイカつて自分たちの事を呼んでるらしい に、まつろわぬ者達…敵対勢力がいたんだって。

その人たちとは、アル・シャイターヌっていう部族で、決して交わるうとしなかつたんだとか。

総じて野蛮な人たちで、何かといふとおっさん達の部族に抗争を仕掛けってきたらしい。

そんな一つの部族にとつて、散発的な諍いは日常茶飯事だったらしいんだけど、広い世界に散らばっていたために、長い間全面的な抗争に発展する事はなかつたんだけど、でも、ついにその時がやつてきた。

翔翼人たちが、今いるこの場所に移り住んできたが為に。

向こうはまったく突然に襲い掛かつてきただといふ。

そして終には、双方の戦力が、それこそ部族が潰えるまでの戦いになつたのだと。

完全な絶対王政国家として纏まつていたおっさん達に対して、相手は何人かの有力者が共同統治している、國家というよりも寄り合いで所帯。

そんな体制の違ひのせいか、個々人の能力差による局地的な敗北はあれど、集団として戦闘においては、完全にその人たちを凌駕し、圧倒していたんだそうな。

でも、その中に、彼らをして圧倒的な戦力差が無ければ戦闘を避けよとの指示が出されるほどの強者が居たんだって。

その名もアスタイルティート。

血に塗れた漆黒の甲冑を好んで纏う、冷酷な戦士。

相手の部族の長の一人で、色々と逸話も伝わっているらしく、難しい顔をしながらオッサンは続けた。

女の身でありながら、たつた一人で数万の軍勢の中を駆け抜けたとか、翔翼人が使役する戦闘用の巨大生物を、素手で打ち倒したとかいう個人的な武勇に留まらず、逸話に関しても、凄まじいものがあった。

いわく、その唇は倒した敵の鮮血で彩られている。

いわく、相対する者がその『えられた苦痛で苦しむのを見て微笑む。そんな戦闘狂的な言い伝えに加えて、その姿を変化させ、敵陣に密かに侵入し、その陣の糧食に火をかけ継戦能力を失わせるなどとう、荒ぶる戦い方からは想像も出来ないような姦計也要し、甚大な被害をもたらしたという、蛮勇のかなんなのか、評価のし難い人物像であった。

勇猛で残忍な敵の将として常に畏怖の対象でありながら、その戦いぶりから今でも敵ながら天晴れと、賞賛を惜しまない人もいるんだけ。

そして名づけられた二つの名は「艶血公主」。

しかし、その最期は誰も知らず、最後の最後まで抵抗した後、何処とも知れず姿を消したんだとか。

誰かが首級をあげたとも、自決したとも伝えられていない唯一の有力な武人で、いつか逆襲の機会を見つけて、攻めてくるんじゃないか、なんて噂が流れていたほどだつたらしい。

それ故に、他にも多くの強敵が居たにも拘らず、その人が殊更大きく扱われているんだと、そうこぼした。

しかし、何でそんな人が、ウチの姉さんに関係有るような事を？

ソレってかなーり昔の話じゃないの？ウチの姉さん、まだそんなお

年じゃないんですけれど。

「私の名は、野見山瞳だ。それ以外に名は持たぬ。変な言いがかりは止してもらいたいものだがな」

ふん、と、気圧されもせずにそつ答える姉さん。

あー、なんかいつも通りな姉さんに戻ってきたっぽい。

その反応に、オッサンは更に視線を強めて睨みつけてきた。

そんな威圧もどこ噴く風とばかりに、再び紫煙を天井に向けて吐き出す。

だけど、他の三人はそれほど尋常な態度ではいられなかつた。

がたがたと、癪のような震えとともに、真っ青な顔をして、今にも倒れそうになつてテーブルに突つ伏している。

かく言う僕も、冷や汗というか脂汗が出捲りだ。

にらみ合つてる一人は動きそうにないから、とりあえず僕が三人の様子を見るしかないのか…。

「ねえみんな、大丈夫？」

どう見ても大丈夫じゃないんだけど、とりあえずこいついう聞き方しか出来ない。

「あ、あんまり、大丈夫じゃねえ。つか、お前は何で平氣なんだ」

「「」一ちやあん……、私、もつ駄田ええ」

八馬も終山も、一様に「ぶるぶると振るえて今にもぶつ倒れそつだ。

「ぐ、食いすぎたせい……な訳ないよなあ。つえ、出できやひ」

「ちりも青い顔をして口元を押さえる山田君。

今にも食べた物をテーブルの上に返却しそうである。

「ちよ、ちよっと山田君。ほんとに大丈夫?」

かなりの量を食った山田君である。

今この場でリバースなんてしたらどれほど広範囲に被害が広がるだろうか。

ただでさえ険悪な雰囲気になつてゐつてのこ、これ以上ぢつにかなつたら……どうなるんだろう。

「……ち、ちよとどんな状況になるか試してみたい気もあるなあ。吐いてみる?」

「お前なあ……うえつぶ」

「ちよつと静かにして……」

僕と同様の事を考え山田君に突つ込みに入る八馬はもう暫く持ちそうだが、終山の方はもう限界っぽい。出しても大丈夫っぽいのは…

「う… ハハ。

「あの花瓶でも持つてこようつか？」

「……勘弁して」

涙田で訴えりれると弱いなあ。

とうあえず、背中でも摩つてあげるか。

……「わ、この服、生地薄つ。

「今まで薄いとは…… 気分悪くしてくれてあつがとう、おっせん。

さて、冗談はともかく、だ。

柔らかな柊山の肢体に興奮してゐる場合ぢやない。

山田惣の視線が、それだけで僕を睨み殺せそうな勢いになつてゐるし。

元氣だつたら僕をぶちのめしてくれてたやつ。

そう思つとちよこと脂汗が滲んでくる。

なんて思つてたり何故か不思議なことに、さすつたお陰かなんのか、田をぱちくつさせて柊山は一気に元氣になつた。

「あ、ありがと。すこしく楽になつたわ」

今の体調の激変は一体なんだつたのだろうかと不思議がる柊山。

「背中に元気になる経絡秘孔もある、とか？」

「漫画の読み手」

ちょっととした冗談だったのだが、けんもなげにあしらわれてしまった。

元気になつたとたん、不機嫌なのが戻どおり。

一体どうした。

氣を取り直して他の一人にも声をかけてみる。

「お前らもさすがにやつつか？」

「だ、断固として断る。男に触られる趣味はこれっぽっちもない！」

震えながら、やつかりよりも真つ青になつた顔で言われてもなあ、ハ
馬。

とりあえず抵抗する余力も無いのか、僕の手を振り払えない山田君の方を、心を込めて、じっくりねつとりとさせつて差し上げました。

俗に言う嫌がらせという奴です。

気持ち悪い真似しないでくれ！ そういうて元気に跳ね起きました、

山田君。

「つと。こきなり楽になつたけど、何でなんだ？」

僕が知るか。

「ねえ、山本君も匕首にかしてあげたら？」

「八馬まで治るかどうかなんて知らないよ？」

でもまあ、別に減るものなんでもないし、つて事で背中をさわってあげた。

「お前なんだに手当してしまはなくとも、自分でどうにか出来た」と力説しまくっています。

人の行為を無碍にする奴だなあ。

「感謝する心がないと、彼女出来ないわよ? 山本君」

「う、う、う、うるせえっ! 言こ寄つてくる奴はコマンド語るわい! 断つてゐんだよ! 大体巨大なお世話だ!」

いや、世話する気なんて今使い果たしました。

まあ、此処から出のこせよに何にせよ、元氣で居てもうわないと。

男を担ぐ趣味は僕も八馬も無いからさ。

んがしかし、そんなのんびりした事は言ひてられなくなってしまった

た。

「ラスールっ！」やつ等を拘束せい。」

おっさんのがいきなり叫びだして何かを呼んだのだ。

いきなりなんなんだよ、とは八馬の言葉。

まったく年取ると気が短くなるわ、何考へてるんだかわからなくな
るわ、いい加減にしてもらいたい。

こつちは状況の把握もしたいし、ちやんと話をする気満々なんだか
ら、会話して欲しいよね。

そんな僕の考えを消しとばすように、オッサンの声を受けて、大扉
から数十の屈強な男の翅翼人たちが押し入ってきた。

どの人もこの人も筋骨隆々、全身どこからでもかかつて来い状態な、
戦闘準備万端な男たちでした。

縦長の盾で身体の前面を覆い隠し、手にした短槍で威圧するように、
テーブルについたままの僕を含め五人全員を半円状に取り囲む。

そんな中、アウルさんが一人オッサンに食つて掛かっている。

「お父様！私に一任してくださいと書いていたではありませんか！」

「田目的モノが田の前にあるのだ。躊躇していて、指の隙間をすり
抜けられてはたまらぬ」

ですが、と追いすがるアウルさん。

何を任せていたんだろうか、ってのは気になるけど、この人数相手にはにつけもさつちも行きません。

「こいつも押さえとおけ。多少手荒でも構わぬ」

追いすがるアウルさんの顔も見ずに、部下に拘束の指示を出しやがった。

どんな親だ。

「お父様っ！あいつ、お前たち、放しなさい。ラスールが、アメシャ・スペンズたる私に触れるでない！離しなさい！」

「父と呼ぶなと申しておらうがー！」

振り向かずとも、顔を打つ。

…やつぱつこのオッサン、嫌い。

実の娘をそんな風に扱うなんて。

でも、こじまとして僕らを捕まえて、彼らに向のメリットがあるんだから。

穏便に話をする気はない時点で、僕らの身が危ないのだけは理解できるけれど、逃げ出すつて言つてもなあ。

どう考へても、普通に無理っぽいよ。

「やはり交渉決裂かの。宏一、お暇させてもらひや」

「へ？いや、確かにかなりヤバいけど、姉さん、この人たち、めつちや強そうだよ？」

交渉決裂っていうか、口クに会話をもしてなかつた気がしなくも無いけども。

まるつきつ無表情にそういう姉さんに、僕はなんと言つていいやら言葉に詰まつてしまい、取り留めのない表面上の意見しかいえなかつた。

あー、まあ姉さんだけならビリビリかなりそうだけど。

「先の力程度では、ここは抜けられんか。宏一」

僕を呼んだかと思つと、姉さんは返事も待たずに唇を押し付けてきた。

ねつとりとした舌が僕の唇を割つて口腔を弄る。

突然の行為に抗おうとした僕の両手は、姉さんの細い指先で後ろ手に拘束されてしまつていて。

片手で僕の両手を摘むようにして持つているだけなのに、どうせつても動かない。

周囲の状況を考えると場違いな事この上ない。

長身の美女が、低身長の美少年を押さえつけて接吻、などとこゝ。

しかも姉弟と言ひづ首徳的な。

などと、若干錯乱氣味の思考をしてると、突然やわらかい感触に歓喜していた唇に、痛みが走った。

「痛つー!..?」

「それほどまことに痛くはなかろう、大げさな

つて言われても、いたいものは痛いんですけど。

痛みの元に拘束から解かれた手をやれば、真っ赤に流れる僕の血潮。

姉さんが、僕の唇を噛み切つたのだと理解したのは、目の前の秀麗な唇の端から、血に染まつた細い舌がチロリと覗いたからだ。

しかし、それ以上に。

「姉さんの歯…そんなに尖つてたつナ?」

「氣のせこじや

いやいやこやこや。

さつき手掴みでメシ食つてたとき大口開けてたけび、そんな歯じやなかつたから、絶対。

犬歯…糸切り歯とも呼ばれる歯が、それだけが異様に長く、細く、

伸びていたから。

「何をしていいか…早く、そ奴等を…」

なにやら焦った声でオッサンが叫ぶ。

部下がこいつに来ないのは、アンタが自分で娘の拘束をしろって言つたせいで、未だに拘束しきれていない為だ。

アウルさんは細身の身体で、押さえつけよつとする凶漢たちに抗つている。

流石に上司の娘だからか、手荒でも構わないと言っていたにもかかわらず、男達はおつかなびっくりの対応である。

しかし、多勢に無勢なのが見てわかる。

結局彼女は取り押さえられてしまっていた。

見ていると、床に押し付けられているアウルさんの下にファナーさんが近寄り、押さえつけられたアウルさんの首筋に触れなにやら咳くと、アウルさんはかくりと力無く崩れ落ちてしまった。

それを機に、こちらに向かいだすラスールと呼ばれた男達。

やばいって。このままじゃあんなオッサンの思つ通りに事が運ばれる。

嫌だなあ。

んな事を考へてると、姉さんが僕の手を引つ張りながら囁く。

「心配はこりぬ。まあ見ておれ」

そしてその次の瞬間、「うへ」と。

この大広間に溢れる、すさまじい気配。

暴風でも吹いたのかと思つほどどの、体感を伴つ何かが、姉さんの全身から噴出するように、発され始めた。

「ちこつ。まさか本当に奴なのか？ラスール達よつー先ずはあやつかりじやー。」

命令を受け、矛先を変えて一斉に僕らに向かってくるマッシュチャコな男たち。

生理的に嫌だ。

何故か結構悠長な思考をしてしまつてゐる僕だが、自分でも何故こんなにのんびりしていられるのか判らない。

姉さんがいるから、かも知れません、ええ。

「わい。宏一、咄と一つ所にまとまつて居る様にな」

それだけ言つと、姉さんはゆっくり歩き出した。

まるで、散歩にでも行くみたいな足取りにも見えるほどに、いつもどおりの姉さんだった。

だけどその歩みには、駆け寄つてきていた翅膀人の男達が足を止めるほどの何かがあった。

彼らは一様に困惑を隠せないまま、姉さんを遠巻きに取り囲んだ。

アレだけの体格差と人数ならば、有無を言わせずに取り押さえられそうなものなのに。

アウルさんは違つて、手加減なんてしなくて良いんだから。

そして姉さんがコツリと堅い靴音を鳴らして、立ち止まる。

一瞬の沈黙。

その直後、姉さんの足元の石の床が、抉られるように砕けた。

姉さんが戦いを開始したのだと気付いた時には、既に僕ら非力な四人に近い場所に居た者たちが吹き飛ばされていた。

手にした剣を悉く、遠くに弾き飛ばされて。

「なんと……これほどとは」

目を見開いて驚愕する、おっさん。

踏み出した一步は石の固い床を砕き、やうに倍はあるつかと思われる体重の翅膀人の戦士を一撃の下に倒させた。

凄まじい跳躍で壁を蹴り、床を跳ね、高い天井すら足場と化し縦横

無刃に相手を翻弄してはつち倒していく。

そんな光景を田の町たりにして、八馬達は田にもとまらぬ姉さんの獅子奮迅にやんやの喝采を浴びせていた。

正直な所、姉さんが趣味で習っていた武術とやらが何かは聞いてないんですが、馬鹿力とスピードに技が伴つことになれば、どんな事になるか。

突き出された剣を掻い潜り、跳ね上げた腕で相手の手にした剣の束を捻り、奪い取っては投げ捨て、剣の主であった者を勢いを殺さぬままに弾く。

掴んだ相手の力をそのままに、いや、更に勢いを乗せ、投げ捨てるよつにして別の奴にぶち当てる。

さつきまで僕らが料理を貪っていた巨大なテーブルを、片手で持ち上げて放り投げる所まで行くと、もう好きにしてくださいって感じでした。

さきのドラゴン相手の時よりも、力もスピードも増しているように見える。

見える…。

「凄いや姉さん…」

「宏一、先生が見えるのか?」

「え? なんで?」

八面六臂に戦う姉さんの姿を、僕の目は余す所なく脳裏に刻んでいた。

だが、八馬は残像すら見えないと呟つ。

山田君は、もうやつてらんねえと呆れていた。

彼は体育会系故に腕には自信があつたみたいで、それだから尚更、付いていけない氣分になつてゐるんだろう。

柊山に至つては、音しか聞こえない、と。

「周りで瞳先生が動きまわつて、の人たちを吹き飛ばしてゐるんだろつな、つて言つのはなんとなく」

だそつな。まあ事実、その動き回つてるのは姉さんな訳で。

多勢に無勢かと思われていた戦闘も、あつといつ間に終わりを告げた。

残されたのは、呆然とこの状況を見ていた僕達と、おっさん。

そして、意識を失つたアウルさんを抱き、こんな騒動が目の前で起つているにもかかあわらず、微動だにしないファンさんだけだった。

「ふむ。やつと調子が戻ってきたか」

そう言つて、またいつの間に火をつけたのか、タバコをふかりとふ

かす姉さんがいつの間にか横に立っていた。

も、なんでもありなのか、姉さんは。

「ほれ、お主は来ぬのか？ 我らは一向に傷ついておらんじ、拘束もされておらんぞ？」

そう言つて、ニヤリと、悪戯をした僕を見つけた時のような笑みを浮かべる。

怖い。

「……仕方あるまい、貴様はこのワシが仕留めてくれる」

言いながら、腰に下げていた剣を抜き放つ。

そして、その剣は、おっさんとの氣合の昂びと共に、その刀身から灼熱の劫火を生み出した。

「ほら。 これはまた厄介な

姉さんの言つとおり、あんなので襲い掛かれたら厄介どこの騒ぎじゃない。

何をどうしたらあんな真似事が出来るんだらつか。

轟々と炎を上げる焰の剣なんて、出鱈田にも程がある。

じつじつと近付いてくるおっさん。

あんなの、反則だ。

刃を避けても、炎が剣の周囲に渦巻くように飛び散るよつと舞つていふ。

火傷は必至じゃないか。

ソレが証拠に、結構離れてこる此処ですら、肌がじつじつと焼けてくる。

と悟つたが、この部屋の気温がどんびると急上昇中テス。

何ですか傍のおひやんは平氣なんだろ？と思つてゐる。

「今なひま、まだ櫛便に済ませてしまつても良いくぞ？」

そう言つて一ヤこと笑う。

ガチムチのおひやんがそんな事を口にするとい、とても嫌な想像が果てし無く出来てしまつんだが。

「熱烈歓迎だわづいや、じつあるへ宏一」

「心の底から遠慮をせんでいただきまわ

〔冗談じやない、アウルさんに言われるなら末だしちゃ、おひやんをいつ詫われたんなら、全力で拒否します。

「では、積極的に逃げさせてもひおひ。ほれ、手当してやれ。」

応全員死なせてはおりぬ

そつ言つて、手近に転がっていたマツチヨな人を、つま先で引っ掛け、おっさんに向けて蹴り飛ばす。

その隙に、と駆け出した僕だつたけど…ああ、駄目。

柊山達が、状況について来れてなくて立ちんぼ状態だよ。

「世話の焼ける生徒じやの」

いや、彼らが「く普通なだけだと思います。

八馬が普通かつて言づのにはちょっと疑問があるけれど。

折角作つた隙が、無駄になっちゃつたか。

〇ターンして三人を拾いに戻る姉さんに、ついてゆく。

振り出しに戻る、かと思ひきや。

「逃げなさいつー早くつー」

声に振り返れば、ア威尔さんを抱えていたファナーさんが、おっさんにすがり付いて僕らを先に行かせようとしてくれた。

「……礼は言わぬぞ?」

「構いません。さあ、早くつー」

そのファナーさんの声を聞いた途端、僕の身体が宙に浮いた。

姉さんが放り投げたんだと気付いたのは、八馬と山田君を脇に抱え、出口へと駆け出した姉さんの背中に、柊山と一緒におぶさるよつて落した時だった。

「え？ ちょ、ちょっと姉さん？」

慌てた僕の耳に、「しつかり掴まつておれよ、梓ちゃんを落とさぬよ」にな「と聞こえたのは僕倆だつただろう。

僕らを抱えたまま大扉を蹴りで粉碎し、そのままの勢いで、ステージを蹴つた。

背後から聞こえるおっさんの怒号が、まるで遙かに霞んでみえる地の底から、僕らを呼んでいるよっこえた。

「生きてるって、素晴らしい」

「何を今更」

ハ馬が言つて、なんでも嘘つぽく聞こえるから不思議だ。

「……よくまあ全員がバラバラにならなかつたもんだ。あの激流で

呆然と呟く山田君に、僕も相槌をうつ。

ほんとによくまあ回りじて流れ着けられたもんだ。

「それにしても、ほんと、よく逃げられたわね」

身体に纏わりつく薄綿の衣を搾りながら、溜息と共に安堵の言葉を吐く柊山。その点については激しく同意する。

「まあ、ねえ。姉さんのおかげっぽいけども」

「ほい? ほいとはまた心外な。完璧確實文句無しに、私のおかげ、であるづつ。」

河の激流でアップにしていた髪が解けてしまつたらしく、ハンカチでポニー テールに纏めている姉さんが鼻高々と言つてくれる。まあ確かに事實そうなんですけど。

穏便に済まなかつた原因も、姉さんにありそつた気がしなくもない

です。

そう。

あの後、空中に飛び出した僕らは、引力に引かれてまっさかさまに落ちていきました。

翼もない僕らが、アウルさんに抱えてもらつたときのように、飛べるわけがない。

周囲に舞う、幾人かの翼持つ人たちが、何事かと言つ表情で、僕たちを見送つてる中を、だ。

まさに加速度的に落下速度を上げていったんだよね。

轟々と、空気を押しのけて落ちてゆく最中、姉さんの声が耳に届いたんだ。

「……ふむ。宏一、ちょっと我慢せい」

はい？いや、こんな状態でなにを？と思いつきや、終山を抱え込んで背中にしがみついてる僕を、体を捻つた反動で引き離し、何をするのかと思つたら、思いつきり僕を踏み台にしてくださいました。

いやまあ、後になつてみれば、足場にされたつて事だつたんだけどね。

僕を蹴つた反動で手近な壁面にまで跳躍。

壁に衝突する寸前で、ぐるりと体を捻つて壁をけり、方向を変える。

そして反対側の壁に激突しそうになつてゐた僕と柊山にランデブーして、また壁を蹴る。

必死でしがみついた僕と柊山、そして脇に抱えたハ馬と山田君とをそのままにそんなことをやつてのけてくれたのである。

ソレを何度も繰り返して、なんとか底に流れる河の水面に、死ななくて済む程度の勢いで盛大に水しぶきを上げることが出来た。

底に流れていた河は、想像していたよりも遙かに流れが速く、着水した衝撃もあって、僕は姉さんから手を離してしまつていて、が、慌てる間もなく、何かが僕の手に絡まつてきた。

つて何でもいいからちょっと勘弁してください――。

そんな感じで何とか生きてた……つか、なんで生きてられたんだろうか。

平然としている姉さんを除く4人が全員、広々とした河原にへたりこんで荒く息をしているが、僕らは取り合えず、生きていたことへの感謝を言葉にしていた。

一人元気な姉さんが、一つに纏めた長い髪を風に棚引かせて、さつきまで僕らがいた場所を見つめている。

大分流されたみたいで、あの岩山が、小さくかすんで見えていた。

巨大な山地のふもとに鎮座したソレは、元は巨大な一枚岩だったのだろう。

その岩のど真ん中に細く裂かれたように切れ目が入っていた。

そこが、さっきまで居た吹き抜けなんだろうとはわかる。

あの広さがある裂け目なんだとしたら、あの岩の大きさは如何程のものか。

ざつと、縦横数キロは有るんじゃないだろうか。

そんな観察をしながら、何とか動けるようになつた僕らは、川岸に居ると見つかりやすいだろうからと、とりあえず森の中に移動する事にした。

うねり揺ぐれた根が、僕らの行く手を阻むのだが、何しろ樹がでかすぎて、乗り越えるなんてレベルじゃない。

下手すればロックライミングだ。

まあ、姉さんが居るから何とでもなるわけだが。

しかしもう、森と言つよつも、巨大過ぎる樹木のせいか、渓谷の底に居るような感じがする。

見上げても、樹の先っぽなんて靈んで見えやしない。

その中でもひときわ巨大な樹の根元に出来た洞を、仮の宿にする事にした。

樹といつても、幹の周りは人が抱えられるレベルじゃなくて、ちょっとしたビルよりも太く、東京タワーよりもはるかに高い。

そんな樹の洞だからして、かなりの広さがあるわけで、中々に快適です。

葉っぱも巨大で、しかも産毛が生えたふわふわの感触がこれまた何ともいえません。

寝床はこれでオッケー。

一夜を過ごす準備が整った所で、興味津々のはいつでもどこでも何にでも、のハ馬が口を開いた。

「これって、どれくらいの樹齢なんだろ? なあ

唯一この世界を知る姉さんからの答えはそっけないものだったけど。

「さあの。少なくとも、数千年は越えておらつ。はっきりした所はわからん。ここは四季も雨季も無いのでな」

樹木の年齢は年輪を見れば判る。

大体の樹木は、春になると肥大成長を行い、幹が太くなる。

そして夏にはそれがゆっくりになるため、その成長差が色の濃淡となつて輪状に見えるのだ。

が、四季も無ければ雨季も無いと言つ事は、年輪の出来る要素がな

い。

まあ、この太さだったら、樹齢一萬年とか言われても納得するけれど。

姉さんいわく、「星は暑い地域は常に暑く、寒い地域は常に寒い。

それは空に浮かぶ「一つの太陽のせいでもあるらしい。」

「私もこの世界を離れてから学んで理解できたのだがな。

そもそもこの星の自転軸自体、殆んど傾いては居らぬのじや。

そして一つの太陽は常に中天を通り我らを照らす。

まあ、安定した気候だと考えれば悪い事ばかりではないが

それは、その地に根付く事が出来れば、長く住み着けるといふことなんだろ?」

「そつか、だから年輪が出来ないのね」

「正確には年輪ではのうて、成長輪と言ひたいのがの

桜山が姉の補足に頷く。

なるほど、それじゃあ切り株見て大体の樹齢を調べるってのも使えない手なわけだ。

「アメリカにや、推定樹齢2200年で直径113cmちよいつて樹が

あれ? あ?

それを参考にしたらいだ? と、ハ馬。

「えっと、一メートル割る200年で年間500だつたら…

「…ああ、取り合えず見えたといひにある一番でつけのまじれだ?
?」

言われてさよるさよると見回す僕らに、姉さんが指差し指さげてくる。
「あれじゃな。直径2mほど、高さで3mほどの小さな…とこつた所かの」

指差す先には直径2mほど、高さで3mほどの小さな…とこつても僕ら的には十分にでかい木なんだけど。

その木の向いに姉さんの囁き樹があった。

「あれ、木だったんだ。どう見ても壁にしか見えないんだけど…」

「こちまんくせんねん…育ちも重つたりって感じねえ

「出でだな

「…うーーーカメラがあればなあー。」

口々感心するやう呆れるやう。

「まあ、アレよつでかい樹もひいて…むへ。」

そんな時、姉さんが不意に何かを見つけたのかして視線が突然鋭くなつた。

深い森を睨みつける姉さんに、僕らは追手かと思い身体を強張らせた。

しかし姉さんは「心配は要らぬ。待つておれ」と一言だけ告げて、駆け出していくた。

姉さんが心配なのも若干あつたが、主に僕らに危険が及ばない事を祈っている中、姉さんは戻ってきた。

時間にして数十分といった所だったけれど、何時間にも感じられた。

「待たせたか?さて、メシじゃ」

そういう姉さんは、ざつと体長5~6mはありそうな、八本足で額から三角形の板のような角が生えた、馬のよつた生き物を引き摺つていた。

じゅうじゅうと、肉の焼ける匂いがあたりに立ち込める。

「いい匂いだね」

「肉としてはかなり美味しい部類に入る。滅多におらぬ故、狩れたのは運がよかつたの」

あの後、引き摺ってきた馬もどきを食べるため、捌く事になつた。

大きさが大きさなため、捌くのも一苦労かと思われたが。

「どうせ全部は食いきれぬ」

そういう姉さんにより、一番美味しい部分を抉り取つて食べる事になった。

柊山などは、田の前で生皮を剥ぐのを見なくて済むので歓迎していたが、まあそのなんだ。

その方が逆にグロかつたわけだが。

歩き通しで疲れきった僕らがへばつて横になっている中、姉さんがその辺に転がっている木の枝を集めて火を熾し、肉を焼き始めた。

焚き火の煙は森の木の枝や葉が散らしてくれるし、田の高い今時間なら上空からではこの程度の炎は見つからないだろう。

それに対して、口づしていると夢でも見てているんじゃないかと思えてしまつ。

それくらい現実感が無いように感じている僕がいる。

炎に焙られ脳を垂らす、枝を突き刺した肉を見つめている姉さんを眺めていると、僕の視線に気がついたのか姉さんが声をかけてきた。

「どうした宏一。ボーッとしおつて」

そつこつて手招きする姉さんと、どうりで立ち上がりて傍に近寄つた。

「うん、ちょっとね。こんな事があつて、頭の中が混乱してるので感じかな」

姉さんの横にしゃがみこみ、踊る炎に小枝を放り込んだ。

パキ、と音を立てるのを耳にしながら、こちらに来てからずっとと思つていたことを口にした。

「ねえ、色々聞きたい事があるんだけど」

「…判つておる。まあ待て、私とてまだ頭の中が整理できていないのだ」

視線を動かそうともしないで、姉さんはそれだけ言つて口を開けした。

「でも、僕なんてもつと何がなんだかわからないんだ。

姉さんがあんなに、強いつて言つのを通り越してるくらい強いのか。

なんであのあつさんと僕らを捕まえようとするのとか、それこ…」

そこ今まで言つて、口もれる。一番ワケが判らない事だつたから。

「あの、アウルと言つ奴のことか」

「…うん」

僕に面識などあるはずがない。

だけど、向こうは昔から僕を知っている様なことを呟つ。

何をどうしたらいいのか、わざぱり判らない。

それに、このままじゃのたれ死んでしまうだけだと思つてしまつのは、僕が心配性なせいだけじゃないと思つ。

「どれもコレも、奴らの手から完全に逃げ切れてからの話ぢや。や

心配するな、私が皆を守る」

「でも、いつもいつも僕らを守つて戦える訳じやないでしょ、ひへきだつて……」

「どうにかなつたである。

今こいつしてちやんと一人も欠けずに無事ではないか

「確かに姉さんのおかげだね、うけど……」

危つく飛び降り自殺になる所だったじゃないか、実際の所。

「……車は止まれない、と言つ奴じやな。

お主もこれを見訓に、ちゃんと前を見て走るよつて

僕としては、てっきりアソコの構造を知つてて、びつに出来るもんだと思っていたんだ。

見通しの悪い所をカソで走っちゃ駄目だよね？

「だいたい、あんなに颯爽と駆け出すんだもん。

あの先がどうなってるか知つて……いえ、とても素敵な好判断だつたと思つよ。

うん、アレくらい突飛な行動に出ないと、きつと迫つ手を振り切れ無いんじゃないかなあ

「……何か棘があるので

「氣のせいです」

とりあえず、その肉突き刺した枝は振り下ろさないで。

お願ひします。

「まあよからう。ほれ、焼けたぞ」

「いただきまーす」

こんな状況でも、お腹は減るし、いただきまーすは言つたりやうんだね、僕つてば。

まあ、その辺は他の皆も変わらないみたいだけど。

焼けた、の一言でみんな飛び起きて焚き火の傍にわらわらと寄ってきた。

「腹が減つては戦が出来ん、ハリーのはじめの時代も変わらんねーつと。

「こんなとんでもない」と今現在我が身に降りかかるつてのと、途中下車なんて事になつたら眼もあてらんねえ」

「前向きねえ。あ、美味し」

「おひつよ。俺はな、喰えにするにはちょっと変かもしれんがな。

死ぬときは、自分がどう死ぬか、キッチリ確かめて逝きたいって思つてゐるんだ」

ちやんと、死に様を確かめたいんだ。

そつ言つて、焼けた肉にがぶつと齧り付く。

ま、そこまで覚悟してゐんなら、ある意味天晴れかも。

ただの変なことマニアじやなかつたんだね。

「死ぬとか馬鹿な事言つてないで、元の世界に変える方法考えなさいよ。

「こんな所…うーん、慣れれば自然いっぽいで良いかもしねないけど

……

こちらも焼けた肉にかぶりついている終山が、眉間に皺を寄せて悩んでいた。

「けど、なに?」

「なんでもないわよ、馬鹿」

促しただけの僕に、剥れた顔を向けてくる。何なんだ。

「おとめいじる、と言つものを、もつチャコシト理解せよとこつのは
お主にはまだ卑いのかの? 宏一」

苦笑しながら僕に囁く姉さん。

別に早からうが遅からうが良いけど、この世界から帰ると、乙女心と何がどう関係あるんだろう。

「……ほんとに馬鹿

一人無言で黙々と肉を食つてゐる山田君、ビリしてそこで僕を睨むのぞ。

なんなんだよ、もう。

心当たりのない事に、若干ふてくされつつ、ただ焼いただけの肉を
ほおぼる。

美味しい。

「しつかり食つて、しつかり眠れ。

明日もちよつとばかり強行軍となるからの」

なんなら私が背負つてやつても良いぞ?と笑つ。

子ども扱いはしないでよ。

ちやんと自分の足で歩くわ。

わざわざみたいな出鱈目の状況じゃなければ、ね。

「何処か行く所であるの?..」

素朴な疑問である。

こんなところでアテがあるほうが不思議だし。

本当は元の世界にすぐ戻れたらよかつたんだけど、どうすればいいのかもわからない。

「無ければ」のような事は言わぬ。

まあ、あまり期待は出来んがの…」

若干悲しそうな顔をしたような気がしたが、ほんの一瞬の事で、しかもすぐに明後日の方向を向いてくれたので、見間違いかもしれない。

取り合えず命の危険は去ったのに、落ち込んでる、って事は無いよなあ、姉さんに限つて。

まあ、ともあれ今の状況が多少でもマシになるなんなら、ちやんとついていきますよ。

一回死にやうな田にあつたひ、結構開き直れるもんだよね。

無言で佇むだけの姉さんの中が、アテと血のはかなり細い糸の
よつこ感じられた。

「あの、姉さん？」

やけに寂しそうにしてくる姉さんに、恐る恐る声をかねつとした
「」

「封の切れであつたタバコが濡れてしまつて、無じじや」

そつりか！

確かにヘビースモーカーを通り越してチヨーンスマーカーとも言え
るから、ある意味生命線なのかもしれないが。

あの激流の中でタバコが駄目なのはしょうがないんですね。

命があつただけめつカモンだと思つただけどなあ。

「封の切れていないものも、多少濡つてあるな……」

やつこしてよんぼりしてゐのをみると、かよつと可憐へ見えた。

食事を終えるともう陽が傾きを増していた。

深い森だけに、一気に辺りが暗くなり、殆ど夜のよつこになってしまった

つていた。

そのせいなのか、昼の行軍が祟ったのか、みんなは既にお休みモードに移行していた。

そんな中、僕は姉さんの姿が無い事に気がついた。

前みたいに周辺を探索に、とこうなら何か一言ぐらじ告げてゆくだろうから、洞の外で休んでるのかなと思い、外に顔を出し姉の名を呼んでみた。

すると、予想外に小さな声が、かなり高い位置にある枝の先から聞こえてきた。

「何じゃ？一応我らは彼奴らの搜索対象なのじやから、声は控えめにせい」

言われながら、姉の下へと行こうと壁のような樹の肌に指をかけようとする。

「よじ登らんでも、ほれそいに

と言われ見回せば、人の胴回り以上あろうかと言ひ薦みたいな植物が螺旋状に上へと伸びていたのだ。確かに、幾ら手がかりは山ほどあるとは言え樹をよじ登るよりは遙かにラクチンであった。

姉さんのこる枝…と言つても、根元付近はそれだけでも軽く自動車の2~3台は並びそうな太さがあつた。

姉さんはその枝の先のほうで膝を抱えてその上にアゴを乗せ、呴え

タバコで紫煙を燻らせて遠くを見つめていた。

そんな姉さんがとてもなく優げに見え、僕は向も言こ出せずに黙つて傍に近づき、横にそっと腰を下ろした。

その横顔を覗き込むと、静かな表情で何かを考え込んでいるようであつた。

そして僕は姉さんの視線を追い、遙か彼方に田をやつた。

河原でも見えた、あの逃げ出してきた山が、夕日に照りされて赤く染まつてゐるのが樹の隙間から伺つことが出来た。
どれくらいこのままだつただろうか。

空の色が深い浅葱色に染まり始め、星が疎らに瞬き始めたころ、姉さんがつこと指差し口を開いた。

「よひ見てみ。那の向いの側、山と接している部分、平らになつておるじやねいつへあそこへ、小さな湖があるの、ぢや」

だいぶ翳りの濃くなつてきたが、指差す先にある山はその背後にある山並の色合へから浮かび上がるようになつて見えていた。

だけど、その向いの側に湖があるのかどうかまでは、見るひとせ由来なかつた。

「湖…ぢやああの水路の水は、その湖から、あの山をへりみて、水を導いてるんだ」

僕の答えに姉さんはふつと笑みを浮かべて続けた。

「……あの場所には、やの昔、湖から流れ落ちる、秀麗な滝があったのじゃ」

「やの昔……今でも滝、あつたじやない」

落ちる途中で見た山内部の光景には、吹き抜けの半ばぼくら大量の水を吐き出す滝もあった。

「ソレは違つモノ。あの昔はな、あやつりがビリビリから運んで来おつたのじゃ」

「よくわからんこよ……あんなでかこの、びりやつて運ぶのや。そもそも姉さんはどこまで知つてゐの？」

僕の言葉に、姉さんはちらりと横田で一ひきを見つめ、空を見上げて呟いた。

「それを話さうと思えば、全て話す事になる。長くなるぞ？」

「……こいよ、教えて」

僕は、姉さんの言葉を噛締めるよつとして、次の言葉を待った。

「あれに話したな？私はお主を守るための戦士じゃ、と」

「瞳先生、ソレ冗談じゃなかつたんですか？」

突然の背後からの声に僕は驚き振り向いた。

そこには柊山を先頭に、他の一人も勢ぞろいしていた。

姉さんはわかつていたようであるが。

八馬は「何をいまさら」って笑つてゐる。

これまでの姉さんの戦いつぱりを見ていて嘘だと想つほりがおかしいと言つて。

「…で、実際のところ、どうなんですか？」

「私は基本的に『冗談が好かぬ』

話の腰を折られたのであるが、まつたく意に介さず「姉さんは応え
る。

『冗談が嫌いなのもよく知つてますよ。

ええ、実際のところ。

『冗談と思えないことは、しまくりですけども。

でも、僕を守るための戦士だって言つことは、そつか。

じゃあ、僕の姉さんって言つのは、ただその方が都合が良かつたから、そういうことにしただけなのだろうか。

もしそうなら僕は一人の肉親も居ないことになる。

ちゅつと涙が出来た。

「勘違いしているよ。じやから言つておくが、私とお主は、生物学的にも法的にも完全無欠の兄弟であるぞ?」

僕の顔色の変化でも見て取ったのか、姉さんが苦笑交じりにそう口にする。

「え、ソレって……。じゃあ野見山君もこの世界の人だったの?」

僕以上に驚いて、柊山がこっちを見つめる。

「然り。中々の理解力じやの、花丸を授けよ!」

いや、理解力云々の問題じゃない気もしないでもない。

普通そう簡単に信じないんじやないだろ? つか。

「ふふん、俺なんて初っ端からつすづがついてたぞ」

僕の内心を逆なでするように胸を張るハ馬。

その横でやつぱりお前が原因なんじやないかって目で僕を見る山田君が、微妙に怖い。

「じゃあ、賢いハ馬君に質問。どうして僕らが狙われてるのか、判る?」

「……んなもんはアレだ。えー、とだな。あー……。先生お願いします」

なんじやセリヤ。

「その辺つは私も推測でしかわからぬ。

それでも構わんのならば……」

「構いません、ちゃんと知つておきたいし……その、色々と」

「JにょJにょと謹尾が聞き取れなー。」

ちやことと驟ひつよ、終止。

「五月蠅いわよ、Jの鈍感男ー。」

なんなんだよ、一体。

だから山田君もなんで僕を睨むのぞ。

「まあよからいへ。

これは、おぬしがJの世界で生まれて、暫くたつた頃の話じや。

しかしおぬし、Jの世界で生まれたなどといわれて、よく動搖せぬ
な

「動搖してゐる暇がないからだよ

不貞腐れた僕の答えにぐぐぐと笑つて、姉さんは話し始めた。

その昔、この世界で姉さんを含む僕らの一族は、過酷な自然と共に、波乱に満ちた、それでも平和な生活を営んでいたんだって。

ソレが、何時しか現れたあの、マラードイカと自称する一族に、脅かされ始めたんだ。

それでも、姉さんたちは、無駄な争いを好まなかつたし、定住する事も無い生活をする、所謂遊牧民的な暮らしだつたから、他の土地に移動してやり過ごしてたんだって。

一人一人の戦闘能力は、姉さんに見られるように、恐ろしい膂力を有したその部族のほうが優勢だつたんだ。

その為に、時折起きる遭遇戦のような散発的な戦いでは、口クに被害を受けることが無く、返り討ちにあわせる事が多かつた。

その事もあって、彼らをどうこうする気は、姉さんたち一族には無く、係わっこなければ、こちらから手を出す気は無かつた。

だけど、相手の方が、自分たちばかりが被害を受けることに、躊躇んでいたらしい。

「聞いた話じやがの、中には我等が背後から襲いかかつたせいでのろぼろに負けたと報告する奴らが多かつたそうじや」

ありえん、と一刀両断する。

「正面から戦つてこそその勝利じや。」

命を奪う以上、ソレでなくては申し訳がたたぬ。

そりである。

あー、そり言われば、そりきの肉、あの馬みたいな鹿……鹿みたいな馬？まあどうでもいいけど、そりに付いていた傷跡を見るに、狩る時もどりやうて真正面から倒してたよりである。

で、話の続きだ。そんな中、とひとひ奴らとの戦闘が本格化する事態が起きた。

そりとも言っていた、聖地を荒らされた、という奴だ。

「我らは旅をして定住する地を持たなんだ。しかしの、一族がある一定の期間に一度、集う地があつたのじや」

「それが、聖地なんですか？」

柊山の声に頷く姉さん。

その瞳が、懐かしげに潤んでるように見えるのは、氣のせいだろりか。

「そして、その日がやつてきた。

「一つの太陽が重なり、一つになる時、我らはそりに集うて宴を始めたのじや」

一族が「」の地に辿り着いたと云えられる、初源の地である聖なる山。

その中腹にある湖から流れ出る滝から続く、清らかな川の河原で、一族が集い、飲み、食い、唄い、踊る。

そして、一いつに太陽が分かたれるまで宴は続き、最後の日に人々が持ち寄った先祖への供え物を一族の代表者が滝の裏側に築かれた小さな小さな社に納めに行き、宴は終わるのだ。

「その日も、我らは懐かしい顔を見、互いに挨拶を交わし、宴の夜に突入して行つた。

そして、あくる朝……

日が昇り、一つになつていた太陽が、一いつに別れようと始めた頃。酔いに任せて踊り明かし、そのまま眠りについていた人々が日に照らされて目を覚まし、今度は手に手に供え物を持ち、供物を捧げに行く者に手渡していくた。

その代表者は、小さな腕を一杯に広げて籠を持ち、皆が持ち寄った物を集め終えると、立派とは言えない身体でそれを一人で捧げに行くのだ。

「それは、前の宴の後、最初に生まれた男の子の仕事なのじゃ」

「もしかしてその男の子が……」

「うむ、それがおぬしじやつた。

まだ小さくての、もう、抱きしめても抱きしめても飽き足りぬほど
の可愛がじやつた……なんじゃ山本、その田は」

「え、いや、その。先生のそんな顔、初めて見ましたから」

「さあ、八馬が答える。

そんな顔って……、頬が赤くなつて、嬉しそうに微笑んでるのなに
が珍しいんだが。

「そんな顔、瞳先生学校じやした」と無いからじやないですか？」

私は昔からよく一緒に居たから記憶にあるけど

……なるほど。

あの顔は、僕だけの特権であつたわけだ。

あー、その山田君、「先生…可憐だ」って、君は終山狙いじやな
かつたのかと。

「さあちこしても、かなり無理田だ。諦めろ」

八馬の一言で、山田君…泣かなくても。

終山は終山で、「山田君つて、誰か好きな人居たんだ?」とか言い
出している。

山田君、地面この字書き始めちゃった。

そんな山田君を放つておいて、姉さんは話を続けた。

「ふむ。で、じゃな。

我等はお主を送り出した。

川に沿つて遡つてゆけば、子供の足でも十分にたどり着くことが出来るし、

無論、危険なことなど無いよつ、影から見守る役目の人間の者がついてゆく故、

誰も心配はせぬ。そしてその時の守護者が……

「瞳先生だったんですね？」

あとを継いだ松山の言葉にて、ようわかったの、と相好を崩す。

話の流れ的にそつなんだろうなーと思つて、と頬を搔く松山。

「私は、宏一に氣づかれぬように、樹木を伝つて後をつけてしまつた。

無論、宏一を狙う肉食獣共を、追つ払つことも忘れはせんかった。

神事ゆえ、殺生も禁じられておりたし、何より宏一に氣づかれては意味が無い。

ゆえに、かなり時間がかかつてしまつた。

そして、何匹目の獣を追いつめていたとき、それは起つたの

「じゃ

姉さんの表情が、一転して苦渋に歪む。

どれほどのことが起きたんだろうか。

僕らは口も挟めずに、話の続きを聞き入った。

「突然日が翳り、周囲が闇に沈んだのじゃ。

まるで太陽が消えさせたかのようにな。

私は何事が起こったのかと天を仰いだ。

そう、アレが我等の頭上に現れたのじゃ

小さな僕が居たであろう聖地の頭上に、巨大な、そう、巨大といつても足りないほどの大さの、あの、マラードイカ達の居城たる岩山が、空中に現れたんだそうな。

「私は慌てた。あんなものが宙に浮かぶなど、考えられん故に、当然そこに落ちてくるとな。

幸い、供物はとうの昔に納め終わっている頃じゃった。姿を見せることは、もう禁忌ではなかつた

大急ぎで社へと向かい、一仕事終えた開放感からか能天気に滝つぼで水遊びをしていた僕を搔つ攫つように搔き抱いて山を降り、一族のみんなのところに戻つたんだって。

そして、皆と共に、アレが何なのかも、何がどうなっているのかも判らないまま、呆然と見守るしかなかった。

でもその岩が現れすぐ、空を例の田鳥たちが舞いだし、姉さんたち皆を襲い始めたらしい。

幸い一族が全員居たお陰もあって、部族ごとに別れて敵の田を逸らし、上手く逃げることが出来たためそのときは大した被害は出なかつたという事だけれど、聖地の安否が気になつて、あまり遠くには逃げ出さなかつた。

そして、次の日の朝、一族の皆は見る羽田になる。

聖なる山の、その社があつた辺りを押しつぶして、鎮座してしまつた田畠の姿を。

「あの田畠は、我等の聖なる河さえも堰きとめてしまつた。

我等が激昂するのも仕方なくは無いか？」

うんうんと頷く一人。山田君はまだの字かいてる。

まあ、そりゃそうだとは思ひ。

僕だって、大事な思い出のある海岸なんかが、いつの間にか開発されて、コンクリートに固められて無機質な岸壁になつていたら悲しいもの。

それが、一族の聖地で、しかもみんなの目の前でと来れば、その思いの丈は如何程のものだろう。

どこの一神教の信者達のように、奪還に向かつても不思議じゃない。

「そして、我等の戦は始まつたのじゃ」

聖地を奪つた奴らに、一族の怒りをぶつける為に。

しかし、やはり、空からの攻撃に対して、対抗する術が口クに無かつたのは致命的だつたらし。

いくらその膂力を駆使して投擲しても、それ以上の高さに上がられてしまえば、一方的だ。

上から数を頼りに物を落とされるだけでも、こひらの被害は増えてゆく。

使役した獣や、剣や槍で武装するマラーアイカたちと違い、身体一つで立ち向かう事を至上としていた姉さんたちには、歯噛みして撤退する他なかつた。

武器を使わないのは、一族の伝統といつか、心意氣なんだそうな。

それは、これまでの姉さんの戦いを見ても判る。

使つたのは、精々その場にあつた巨大テーブルくらい。

「人生は戦いじゃ。寸鉄帯びておらぬ身で生まれ出るのだ。

死に行くときも、そうでなければならぬ

話を聞くついで、僕は段々と感情移入していくのだ。

そんなヤシラのせいでその部族が滅びるなんて、納得がいかないと
思い、姉さんにふと口にした。

「信条なんて捨てて、敵の武器を奪ってでも生き残れる道を探せば
よかつたのに」と。

「そのような意見も、一族の中から出でた。

しかしながら、屈強な戦士ほど、その信条を守り通したいといへ、強い
思いがあつたのじゃ。

我等の力は、奴らの武器よりも強い、とな。

事実、一騎打ちでは、我等に並ぶものはいへわざかじやつた
その言葉は、一騎打けじやなければ不覚を取る、と言ひことを伝えていた。

「じゃがの。どうあがいても、個人戦闘が得意な我らにとって、

集団戦にはおのずと限界が来るのは必然。

我等は、彼我の数に圧倒的な差があるところとすり、

怒りに日がくらんで見えなんだのじゃ

そして、一族は、日に日に追い詰められていった。

所々では、戦士の勇猛さによる局所的な勝利は得られていたんだけど、

全体的な視点で見れば、確実に負け戦の道をまつじぐらだつたんだそうだ。

「何せ、奴らは我等が撃つて出た後の陣を、それも戦いに向いておらぬ、

女子供や年寄りすら手にかけたのじゃ。幾ら我等が強くとも、戦を終えて戻った村が、火に焼かれていたのでは、勢いもなくなるとこうものじや」

そして、いつしか戦いは一方的な掃討戦へと移行していった。

姉さんの部族は、僅かに残つた他部族の非戦闘員を率いて、逃げ延びる為の道を切り開いていた。

そして、やつと腰を落ち着けられる辺境の地にたどり着き、細々と暮らし始めたんだそうだ。

土地は痩せ、獲物となるような生き物も口クに居ない、氷の河と、果てしない氷土。

田を転じれば、厚い氷に覆われた、極寒の海。

ただ生きるだけでも、苦労どころの騒ぎではない土地で、一握りだけになつた一族は、日々の生活を取り戻していく。

容赦ない殺戮と、無念の炎とを記憶に残したま。

「我等は戦つた。戦つて、戦つて、戦い抜いてそこにたどり着いた。

力及ばず聖地を取り返せなかつたならなかつた我らは、

失意に埋もれつつも日々の生活を取り戻していったのじゃ」

しかし、数を減らしすぎた部族にとつて、いつか訪れる終焉を先延ばしにするだけの行為だった。

そして、姉さんは、生き残っていた長老に呼ばれ、告げられただそ
うな。

「我等は最早この地を終の棲家と決めた。我らは最早消えゆく定め。
だが、血だけは残そう」

そうして、僕と、姉さんが、選ばれた。

姉さんは無論、反対したそうだ。

自分たちの生き様を見せ付けて逝くのだといって、引かなかつたと
言つ。

しかし、一族の力を最も色濃く引いた娘として生まれた姉さんは、
僕を守つて血を残せと。

我等の生きた証を残す為、その強き力と想いとで、この地を離れ、生き延びよと。

それは、これから死にゆく我等よりも辛い道のりとなるだろヘ。

しかし、それでも、誰かを生かすために、死すのならば、我等は喜んで逝く、と。

だから、生きてくれと、一族の皆に懇願されたんだといつ。

そんな生き残っていた人達の思いを、姉さんは血の涙を流して受け入れたんだつて…。

「……そして、おぬしと共に、私は一族最後の地を後にした。

最早この世界では血を残すのはうる容易い」とではないと、皆判つておつた故にな

一族に伝わる、禁断の秘宝にして秘法。

祖が、この世界にやつて來た、始原の地に降り立つた、秘術。

それを用いて、僕ら一人は跳んだのだといつ。

今僕らが帰りたいと願つてやまないでいる、あの世界へと。

姉さんが語り終えたあと、しばらく僕らは何も声を出すことが出来なかつた。

何といえばいいのやらわからなかつたから。

しんみりとした沈黙が続く中、突然姉さんの表情が切り替わった。

そう、戦いに挑む際の厳しい表情に。

それを見て、みんな一様に息を飲んだのだ。

手で僕らに伏せるように指示し、辺りを探る。

耳を澄ませば、僕にもかすかに聞こえる、風を切る音。

「カラードリウス…もう此処まで来おつたか」

記憶にあるあの丘鳥の羽ばたきに間違いない、執拗に僕らを探しているんだろう。

これだけ暗くなつたのに飛んでいるという事は、鳥だから夜は苦手だという元の世界の常識は、じいじや捨ててかかつた方が良いみたいだ。

「いった、な。…そろそろ下に降りるとするか」

気配が遠のき、十分距離が離れたところで緊張を解いた姉さんは、続きを焚き火を囲んで、と言つて僕らに元の洞まで降りるように促した。

二つの太陽の片方は既に沈み、残るもう一方がわずかに顔を出している。

じきに沈みきり、街灯なんて望むべくもないこの地は、星明りだけ

の暗闇に染まる事だわい。

ジャックと豆の木に出てきたツルは、『こんな感じだったのかもしれないなと思しながら固い足場によりやくたどり着く。

姉さんは僕らがおつかなびつゝじょにして薦を下るのを楽し
そうに笑いながら、すたすたと一人歩いて降りる。

下を見ないよし、『氣を紛らわせるよしに、姉さんに一つ『眞』がつい
たことを質問してみた。

「ねえ姉さん。もしかすると、今向かおうとしてるのって一族の人
たちの……」

「つむ、その集落じや」

そうか、もしかしたらもう一回その秘術を使って帰れるかもしけな
い。

そう思つといひよつとだけ氣が楽になつた。

洞に戻り、焚き火を中心に車座になるよしに寝床を整える…のが段
取りのはずだつたんだが。

「何してるのや、八馬」

「何つてお前、寝床をだな」

…やけにふわふわな柔らかい葉っぱを横幅で3m。

そんなに集めて作って、何人寝る気だ。

「こんな異郷の地で心細いだろう女性たちを慰めるために決まって
るだろ?」

却下だ。

「痛てつ！痛いつて宏ーーつて山田もなに一緒になつて殴つてんだ
よー。」

初めて山田君と意見が会つた気がする。

一人でハ馬を着ていた服で縛りつけ、一人が見えない位置に放り出
しておいた。

これで柊山と姉さんにはハ馬の魔の手は届かない。

まあ、届いた所で伸ばした手が粉碎されるとは思つが。

その夜は、これから道程やらこの世界での危険な生き物なんかを
レクチャーしたりしてふけていった。

「辺りを見回つてくる。今のところ近場に危険な獣やらはおらぬが、
一応な

この世界についての概略を語り終えてすぐ、姉さんがそう言って夜
の哨戒に出るのを、僕らは不安げに見送った。

「さて、男は男同士。朝まで語り明かそひじやないか、山本君」

「…朝も早いらしいし、ひとつと寝るか」

さつきの言動があるが故に、肩を抱いてハ馬の不埒な行いをあらかじめ防いでおこなつと言つ山田君である。

何とか引き剥がそつとするハ馬の姿は端で見ている分には面白いけど、男の中に僕も含まれてるんだろうか。

楽しそうに笑いながら、柊山は冗談交じりに「えー、私一人？」と言い出すしで、山田君はじどりもどりで答えていた。

「え、いやあの。そつは言つても柊山さん。さすがに男連中がすぐ傍で寝るといふのは…」

やつぱり、山田君の意見も至極当たり前のことで。

実際柊山が誰かとただ傍で寝るだけだと言われても、アレだしな。

「まあまあ。柊山は洞の奥でさ、俺らは入り口近くで寝るつて事で。なあ、宏一」

「それくらいが妥当な線だらうね…」

「わづね

無言でうむ、と頷く山田君。

そう言つことで、焚き火を挟んで奥に柊山入り口側に男三人が寝る

形になつた。

「はあー。色々考えなきゃいけない」はあるけど、いい加減寝ましょ。

明日も今日と同じくらい疲れるんじゃないの?」

巨大な木に似つかわしい巨大な、だけど柔らかな葉っぱに潜り込みながら、柊山が言つ。

さすがに疲れてるのは僕らも同じだったのに、それには全面的に賛成して眠る事にした。

それにしても、危険な生き物は居ないと太鼓判を押されたけれど、姉さんがいなのは不安すぎる。

ゆっくり眠れるだらうかなと考へて、じゅりじゅりとこじり始めた。

さすがに疲れているだけの事はある。

「(エ)不安でしたら、私が添い寝させていただきましょうか?」

そんな事を思つてみると、柔らかな声が僕の耳元から聞こえてきた。

「う…ん。お願ひしまふ」

「それでは失礼いたします」

夢うつつの中、柔らかな感触が僕を包む。

すべすべとした肌触りがまるで雪山の城でアウルさんに貰ったマントのようすで、なんともたまらないです。

夢にしてはやけにリアルな存在感と言つか何と言つか。

ビロードのような滑らかさが僕を覆い、常軌を逸した柔らかい何かが僕の顔に…って…？

睡魔に止めを刺されそなとこりを無理やり意識を覚醒させ、どうにかこうにか瞼をこじ開ける。

「えーっと…」

熾きになつた炎に照らされた、金色の髪を白い翅膀のティアラで纏めたアウルさんが、にっこりと微笑んで添い寝してくださつてますが、コレは一体全体どうこつたことでありましょうか。

「あら、目が覚めてしましましたか？申し訳ありません宏一様」

「あ、こ、こんばんわ。って、ええええええ？」

つて言つてる場合か僕。

つい挨拶をしてしまつたが、次の瞬間現実を直視して大声を張り上げてしまつた。

次いでアウルさんが添い寝しているといふことは、またあの雪山に連れ込まれたか？

考えをめぐらせて回った。

だなび、わたり居た洞の中に間違はなかつた。

「うぬせえぞ志二……ちへ。」

「ちよつとなに騒いでるのよ……って何でそこいつが面るのよ。」

僕の叫びに飛び起きた二人は、状況を把握するのに手間取つたようである。

まあ、普通はそつだらつ。ちなみに山田君はイビキかいて寝てる。

「一〇一ひやんから離れなさい。」

飛び起きた柊山が、起きた勢いそのままに僕らの間に突っ込んできた。

細身に似合わぬ臂力もあることが、瞬発力も尋常じやない。

「ちよつと待つて」と暫く間もなく、柊山はアカルさんと組み合つていた。

僕を挟んだ田の前で、まるでレスリングのようにお互いの両手を掴み、にらみ合つてくれているのだ。

「わ・ざ・わ・ざ・」こんなところまで追いかけてきて、何がしたいのよー。」

「ち、父の所業ならば申し訳ありませんとしか……。

それも含めて先ずは落ち着いて私のお話を聞いていただきたいのです

す

おっさんを通じてはいないと力説している。

「父の思惑と私の行動は、相容れなくなってしまったのです

と言つアウルさんの言葉に、とりあえず話だけでも聞いてみようと

「…暴走した柊山なんぞ、初めて見るわ。つか、あいつを止めれるのか？」

八馬が我関せずと言つた風に傍観者に徹した態度で腕組みして僕に耳打ちしてくれる。

「うーん…ずっと前に通用したのなら…」

そういうて僕は柊山の背後に忍び寄り、両手を広げて人差し指を立てた。

「ていつー！」

必殺ワキ腹アタック。

「レは人差し指で無防備な両脇を軽く突付くという技である。

幼少時において彼女を無力化できていたのであるが、ここ何年もろくに接点がなかつた僕にとっては、現時点でも効果があるかどうか

は未知数であった。

が、しかし。

以前に比べて遙かに効果が増していたのだ。

「ひやうんっ？！」

一気に力が抜けたのかして、柊山は背筋を反らして膝から崩れ落ちた。

それを見た八馬が、「あーなんと言つか。お前を舐めてた、スマン」と俺の肩に手を載せて感心していた。

「えと、それじゃあ……」

「話だけは聞いてあげる。まあ、瞳先生が帰つてきたら、ただじやすまないと思つうけど」

僕を制して柊山が場を仕切る。

確かに姉さんが戻つてきたならば、何事もなく穂やかにとはいかないだろ？。

それを受けてアウルさんが居住まいを正して僕に向き直りこいつ切り出した。

「アステイルティート…いえ、宏一様のお姉さまがお戻りになるに

は今しづばらへかかりましょ。」。

宏一様、私の事を、覚えておられますか?」

何故姉さんが遅くなるのが判るのかと言つて突っ込もうとした所で、いきなり切り出された件に戸惑つた。

つか、会つたばかりで何を思い出せと言つのドジョウか。

戸惑つ僕の表情に、アウルさんは一転して瞳が潤みだす。

「…」Jちゃん、アンタ何したの?」

「何にもしてないよ…」

焦る僕に、さらさら松山が追いつちをかけてくる。

だって、知らないものは知らないし…。

「で、ではそれはまた後ほどお話をさせていただく事にして。

もう一つ、私がここに来たのは、貴方についていきたいからです。

お許しいただけないでしょうか?」

「はい?」

「な、な、な、何を…」

僕は完全にフリーーズした。

柊山は頭に血が上ったのかして言葉が続けられない。

八馬は完全に他人事モードだ。

しかし、一介の高校生…じゃないか、この世界じゃ。

と言つが、むしろ彼女らにとつては仇敵の生き残りといつ立場じやないか。

おまけに姉さんは、ビリやラ彼らの戦士を大量に屠った殺戮者のはずだ。

とつ捕まえてなぶり殺しにするとか言つのならばともかく、同行を願うなんて。

「僕らを捕まえるとかなら話はわかるんですけど、ビリじて着いてくるって話になるんでしょう」

そう尋ねた僕に、「それは…」と視線を伏せる。何か言い難い事でもあるんだろうか。

それでも伏せた瞳を何度も上げ、僕に向かって口を開こうと努力はしているようである。

言いくらい事があるからか、なかなか実行に移れないようであるが。

何度も目の時、深呼吸をくり返してよつやく言葉を紡いだし始めた瞬間、背後から冷淡な声色が響いてきた。

「続きはアル・クルアーンで話すがいい。大人しく我らの元に来て
もらおうか」

全神経を話を聞く事に集中していたため、突然の追手襲来にまるで
反応できなかつた。

驚いて視線を上げた僕らの眼に入ったのは、翼を大きく広げた、一
人の翔翼人の男だつた。

最初、おっさんかと思ったけども別人で、これがまた恐ろしいほど
に男前。

今まで見た筋肉マッチョな連中とは違い、比較的にすつきりとした
体格である。

しかし、そこに内封されている筋肉は、鋼鉄のワイヤーを束ねたか
のように、絞り込まれてゐる。

そして、その腰の後ろに装備された、長大な剥き身の剣。

ちょうど尾てい骨あたりに皮製の帯のようなもので包まれて、横向
きにぶら下げられていた。

歩くの邪魔そだなー、長すぎときつと鞄から一人じや抜けないん
だろうなー、なんて場違いな事を思い浮かべるだけで、言葉を発す
る余裕なんて生まれなかつた。

それほどに威圧感が段違ひだつたんだ。

動けない僕らに、唯一アウルさんだけがすつくと立ち上がり、「下

がつていてください」と僕らに告げた後、奴に言葉を向かた。

「… // カール。アメシャ・スペンズである貴方が差し向けられると
は、お父様は本気なのですね?」

アウルさんが奴に相対している間に、柊山と八馬は未だ寝ている山田君を一人で引き摺つて出来るだけ奥に引っ込んだ。僕も逃げ出したかったが、何故か身体が動かなかつた。

「さて、アル・イラーフの」意思是私如きでは推し量れませぬな。

まあ、つまらぬ前置きは不要。その小僧を渡していただけますかな?
?」

アウルさんの言葉に、ミカールと呼ばれた男は慇懃無礼な態度でこちらに手を伸ばす。

無論それは、目的であらう僕に向かつて向けられている訳だ。

絶体絶命な雰囲気が辺りを占めるなか、僕は相変わらず思案に耽つていた。

ここにこじう風に追つ手が来るということは、アウルさんがその尖兵だつたと考えるのが普通なんだろう。

話をと言ひ出したのも手勢が整つまでの時間稼ぎとも考えられる。

大体姉さんがここにいないと言ひ事自体がその最たるモノだ。

だけど僕は、彼女が悪意を持つてここに来たと言ひ事に納得できな

かつた。

僕の中の全僕が、それは早計だと叫びまくるのだ。

恐らくはアウルさんを自由にしておけば、おのずといつこいつ行動に出るとわかつていておっさんの差し金だひつ。

でなければ僕らが逃げ出したときにあっさんの邪魔をしていたにとかかわらず、自由に動けるはずが無い。

「渡すとか何とか、勝手に話を進めないでくれる？ 大体アンタ誰よ。あのおっさんの手下ならラスールとか言ひんだつけ？ 名前くらい名乗りなさいよ」

突然の事にあっけに取られていた柊山が、よつやく動きだした。

だが、その発言に対して返ってきたのは、圧力を増した尊大な物言いだつた。

「ラスール？ 私はそのような兵卒ではないぞ？

マラーアカを統べるべく生まれた、アメシャ・スペンズの第一位、ミカールである！」

貴族階級みたいなものだろうか。

貴族だらうが一兵卒だらうが、どうひこしても、めちやくちや強そ うのはかわりが無い。

洞の入り口を塞ぐように立つ奴の背後には、じいつが乗ってきたのだろうカラドリウスが羽を休めながらこぢらを覗き込んでいた。

「ミカール、私は争う気などありません。

どうか引いてはもらえないでしょうか。

私も、恐らくは宏一様も、戦いを好むとは思えません」

戦争はもちろんの事ながら、喧嘩も含めて暴力は嫌いです。

ええ、出来ればの話ですが。

「残念ながら、生かしてつれて来さえすれば、手段は問わぬとお墨付きをいただいておりますゆえ。参りますよ？」

そう言って、下げていた長剣を握るつと抜き放つ。

それは、人間だったたら持つことさえ不可能であるうと思われる、長く、厚く、重そうな、まさに鉄の塊のような剣だった。

僕を背後に回して庇いながら、アウルさんも腰の剣に手をやる。

「争いは好みませぬが、かかる火の粉を払いのける事を厭つつもりはありませんよ」

細身の剣をゆっくりと抜き、田の前にまっすぐに立てる。

格好良いけれど、その剣である鉄の塊みたいな武器の相手は無理なんじゃないだろうか。

受け止めるにしても何にしても、剣がもたないのではないかと。

なんてことを考えてじるうちに相手が動き出した。

巨大な剣が、豪速とも言つたら良いのだろうか、重さを伴つよつな鈍い残像を伴つて、僕らへと突き進んできたのだ。

その剣でコレは止められない、そう思つてアウルさんを逃がそうとしたんだけど、不甲斐ない事に、目がついていつても身体がついてこない。

彼女に触れようと動く前に、ミカールの剣は僕らを纏めて両断するかのように直上から降つて……こなかつた。

「さすがはアウリエル、アメシャ・スペンズの一角を担うだけのことはある。

この一撃をいなすとは。だが、その小僧が居ては、これ以上は無理だろ？

大人しくしていれば、さほど悪い扱いにはならんと思うぞ？」

そう言つて、僕らにギリギリ届かない位置で床を割つた超重量級の剣を、手首を返しただけで肩に担ぎなおした。

そこでようやくアウルさんが剣を斜めに立て、奴の剣を受け流したのだ、と僕は理解した。

アウルさんはと黙つと、受け流せたとはいさすがにその威力は半

端ではなかつたのか、眉を顰めて呼吸を整えている。

奴の言つとおり、もう一撃がくれば防げるとは思えない。

しかし、アウルさんの口から零れたのは、諦めの言葉ではなかつた。

「言つたはづです。私はかかる火の粉を払いのけるだけだと。

それに、私が勝つ必要はありませんから」

剣を再び顔の前でまっすぐ立て、アウルさんがそう告げた直後、奴の背後で凄まじい気配の爆発が巻き起つた。

「宏一が世話になつたよつじやな

そこには、言わざと知れた姉さんが、咥えタバコで腕を組んで立つていた。

「どうあれ、礼は言つておるべきかの？」

「いや、当てにしておつましたから」

視線も合わせずにアーヴルさんが応え、僕を半ば引き摺るよじこして後方へと下がる。

十分な距離がとれる前に攻撃されたらどうしよう、とか思っていたが、意外やミカールからはその素振りは見えなかつた。

それはいつでも倒せるといつ自信がそつとせるのだろうか。

姉さんも奴の強さを感じ取つたのか、加えたタバコを捨てながら咳く。

「確かにこのままでは厳しかつじゃの」

笑みを浮かべつつ、ポニーテールに束ねていた髪をとき、風に靡かせる。

言いながら、すたすたと奴のすぐ横をまるでただの障害物だとでも言つのように通り抜け僕のすぐ傍にやってきた。

ミカールは、一瞬戸惑つたような表情を見せたが、すぐに口の端を吊り上げるよつて凄みのある笑みを浮かべた。

姉さんは僕の前に立ち、耳元で呟いた。

「スマンの。もう一度じや」

姉さんがすっと皿を細め、僕の顎に手をやる。

何を、と思つまもなく。

唇が迫つて来た。

治つきていないうちの傷に歯を立てて、血を啜るために。

「…痛くしないでね？」

「馬鹿者、茶化すでない」

普段は見せない仕種で僕の顎を優しく持ち、眉間に顰めて見つめる。

そして、その塞がりかけた傷口を優しく舐め、さっきまでは無かつたはずの尖った犬歯を突き立てた。

ブツリと皮膚を突き破ると同時に、血を吸つためだらうか、負圧が唇に感じられた。

「… // カールは先の戦は、若いながらも最も多くの首級をあげたと聞いています」

唇を吸つ姉さんを不思議がりもせずに、アウルさんが姉さんに耳打ちする。

それを聞いているのかいなか、悶絶しそうな僕を無視して唇を堪能した姉さんは、「ふはあ」と満足したような声を上げ、口元をぬぐつた。

そして、真っ赤な舌で唇をひと舐めし、ねめつけるように相手を見ながら吐き出すように言い放つた。

「ふむ、ならば我らのもつとも忌むべき存在と言つわけじゃな？」

ならば遠慮する必要など微塵も無いなど、姉さんは新しく取り出したタバコに火を点け、空高く紫煙を「すぱあ」と吹き上げ、言つた。

「いっでも良いぞ？」

ちょいちょいと指先で挑発する姉さんに半ば呆れつつ、僕はアウルさんと共に、邪魔にならぬように更に脇に下がつた。

奴は無言のまま軽く片眉をあげ、肩に乗せた剣を背後にまで回した。

ずどん。

剣を背中に回した、その次の瞬間、剣が振り下ろされていた。

巻き起こされた空氣の乱流が、僕らを襲う。

背中に回したはずの剣が、まったく予備動作無しで一閃、姉さん曰掛けて振り下ろしたんだと理解できたのは、その剣先が姉さんの頭上で止まっていたからだ。

それも、姉さんの両手の指が剣に食い込んだ状態で止まっていると

いう、非常識な事態だった。

「なんと…」

呆然とした表情で、奴は止められた剣をまじまじと見つめていた。

それは驚くだらう、僕だって驚いたし。

だけどその直後、奴は驚きよりもむしろ喜んでいるような表情で、まさに欣然といった態度でひとしきり笑い、こう言つた。

「俺の剣を止めるとは。しかもこのよつつな形でつーこれでこそ戦いよつ！」

言つや、奴の腕の筋肉がはぢきれんばかりに膨れ上がり、剣を戻そと軋みを上げる。

しかしながら、姉さんはびくともしない。

「達人なれば、手の平で受けて叩き折る所までやれるんじゃがの。未熟ゆえ多少荒っぽいのは許せ」

驚く僕を尻目に、姉さんは突き刺した指に力を込めたまま、そんな事を言つ。

講釈はいいから、しかもそつちのが凄いから。

奴との力比べを樂んでいる訳ではないだらうけれど、その表情からは焦りはあるで見えなかつた。

「あんまり時間をかけてもおれんのでなあ。宏一、出来れば眼を瞑つていってくれ」

そう言つや、風に棚引く髪が姉さんに絡みつき始めた。

いつもならそよ吹く風にすらなびく柔らかな髪が、それに逆らつて姉さんの身体を覆つ。

腰までしかなかつたなかつたはずの髪は、まるで何か違うモノのように長さを変え、肩に腕に、背に腹に。

そして両の脚にまで隙間なく包み込む。

それは、まるでそれは漆黒の…鎧。

「ははっ！ そ、うか、貴様がアスティル・ティートか！ アル・イラー
フから話は聞いていたが、艶血公主の一いつ名、伊達ではないようだ
な！」

本当に楽しそうに笑うミカールに、姉さんは不機嫌そう言い返した。

「私の名は野見山瞳じゃ。それ以外に名は持たぬ

「貴様がなんと言おうと、その力、明らかに伝え聞いた話そのもの
よ。

貴様は知らぬであろうがな、我等が同胞には鮮血に塗れた貴様がいつか再び現れて、災いを為すと信じられているのでな。

その首貫に受け、既に平穀をもたらすのも俺の勤めよ!」

言つなり剣から手を離し、その剣の峰を足場に、姉さんとの距離を詰める。

両手を塞がれた形の姉さんに一気に詰め寄り、無手で何をするのかと思つたら銀色の輝きがひらめいた。

予備の短剣?!

奴は腰に下げる剣のホルダーの内側に、さうに短剣を収めていたのだ。

巨大な剣に田を奪われていた所に、間合いも剣速も違つ短剣が襲い掛かってくる。

「ふに」対処できる者はそつはいないだろ!。

諦めにも似た感覚が僕を襲う。

しかし、僕の横で固唾を飲んで見守っていたアカルさんが、ぼそりと「大丈夫」と口にした。

その言葉通り、姉さんを覆う黒髪の鎧が覆つていない咽喉元に食い込もうとしていた短剣は、翻つた黒い何かに絡めとられ、その勢いを喪失した。

「なんと!」

そう叫んで、奴は抗うことなく瞬時に短剣を捨てて間合いを広げ、

姉さんとござりみ合つた。

巨大な剣の刀身から指を抜きつつ、姉さんは短剣を絡めとつたその黒髪の束に指を伸ばす。

身体に巻きつき鎧となる艶やかな髪はまた、それ自体が意思を持つように動き、短剣を受け止めたのだ。

「…コレをやると、きゅうついくるが痛む。

あんまりやりとすれば無いが致し方あるまい」

姉さんの一族が武器を持つことを由としない理由、そ…その一端を垣間見れた気がした。

いつもは高い位置で纏めているか、ポニー・テールにしている髪だが、解いたのにはそういう意味があったのか。

そんな出鱈目な、普通ならば違和感満点の光景のはずなのに、僕にはとても綺麗に見えた。

ぼづつと見とれているのもつかの間、姉さんは一気に終わらせるつもりなのか神速の動きでミカールへと突き進んだ。

身体を覆う髪の鎧は、爪や拳に爪先は言うに及ばず、肘や膝なんかの突起部分全てが研ぎ澄まされた鋭利な刃物のようになり、身体のどの部分が奴に触れてもダメージを『えられるようになつていた。

姉さんの持つ臂力と相まって、一族でも稀有な戦士だったのも頷ける。

しかし奴も然る者、そんな姉さんの攻撃をすんでの所でかわし、翼を広げて空へと舞い上がった。

「逃さぬ」

そう言つて鎧の一部を解いた姉さんだったが、次の瞬間にはどういうわけか僕らの皿の前にまで下がり、「伏せろ!」と叫んでいた。

同時に、さつきまで姉さんがいた場所が白い閃光に包まれていた。

激しく瞬く稻妻が、そこに落とされたのだ。

「奴のカラドリウスが、主を守りおつたか」

稻妻の起こした火を消し、僕らは外に出た。

姉さんは天を見上げ、最早姿も見えぬ飛び去つていった灰色の巨鳥を視線だけで追っていた。

「何とか退けられましたわね」

アウルさんの言葉に「うむ」と答えた姉さんが、元の長さに戻った髪を束ね、地面に落ちた短剣を拾い上げ僕に放り投げた。

「宏一、これはおぬしが持つておれ」

くるくると弧を描いて飛んでくる短剣を慌てて避ける。

さつきまで姉さん達の動きがアレほどはつきり見えていたというの

に、軽く放り投げられた物の動きがまるで見えなかつた。

護身用にな、と言われて渡されたもので怪我をしたら笑えない。

地面に突き立つた短剣を抜き取り、鞘が欲しいなと呟いたら、その辺の木の皮を剥いで巻きつけておけと言わてしまつた。

「アッシュ、逃げたのかなあ」

言われたとおり木の皮を剥がし、鞘代わりに巻きつけズボンの背中側に差し込みながら聞いてみた。

「それはあるまい。役目を優先しただけじやろ。

戦闘狂というわけでも無さそつだつたしの」

姉さんは、奴が放り出していつた大剣を拾い上げ、片手で部分と振り回しながら、「追つ手がじきに靈霞の如く沸いてこよひ」と、ここを引き払う事を仄めかした。

「生きて返したのは失敗じゃつたかの」

「はい、間違ひなく。出来るだけ早く移動なさつたほうがよろしくかと」

手勢を引き連れて、舞い戻つてくるに違ひない。

次は確実に、準備万端整えて、だ。

「では行くぞ。そこの三人、何を固まつてある

柊山たちは、ほらの隅っこで3人小さくなつて固まつたまま氣を失つてしまつてゐたのであつた。

「なまくらじや」

そう言ひて、大剣を片手で軽々と振り回す。

その度に、「おー」と言ひ感嘆の声が響く。

「斬る」と言ひよつ叩き割るためのものじゃな。切れ味など考えられてはおらぬ。

日本刀などとはそもそも別の武器じやと思つたまつがよからひ

自分が教えを受けた剣術を躊躇するわけではない、と言しながらも、いかに日本の刀が持つ切れ味と美しさの両立が難しく、そして素晴らしいかをハ馬達相手に滔々と語つていた。

早く移動しないといけない、と言つたのは姉さんははずである。

何故にこんな話になつてゐるのだろうか、と言ふと。

あまりにも非常識な姉さんとミカールとか言つ奴との戦いで氣を失つてしまつた三人が、どうにか動けるようになるまで若干の時間が必要だつたのが発端だつた。

「今しばらく動けんか。さて」

僕らは、失神状態の3人を見下ろしながら、どうしたものかと首を捻っていた。

「あら、それでしたら私のディオスちゃんで運びましょうか？」

「なんじやオヌシ、まだ居つたのか」

「ちょっと姉さん、そんな言い方はないんじやない？」

なにやら手助けしてくれるというアウルさんの言葉を、けんもほろろに叩き潰す姉さんに、僕は思わず苦言を吐いてしまった。

「…宏一、おぬし」やつの味方をするところのか？」

「味方っていうか、つこさつき僕を守ってくれた人なんだよ？そんな言い方はないんじやないかなって」

「宏一樣…。ありがとうございます」

僕の言葉に対照的な反応を示す一人。

幾ら一族間で過去に何かあったからと言つても、この人と何かあつた訳じゃないんだから、そこまで嫌がらなくても、と思つ僕は変なんだろうか。

「あのせ、別にアウルさんのせいってワケじやないんだからわ。

それに手助けしてくれるって言つんだからありがたく甘えさせてもらつて…も、良いんじゃないかなあ、と僕は思つわけで」

段々と僕の声に勢いがなくなつていってるのは、別に姉さんがこっちを睨んでるからだとか言つわけではない。

アウルさんが、「ありがとうございます、微力ながらお力になります」と感極まつたかのように僕に抱き付いてくれたのを見て頬を引き攣らせていくからで。

「ん……どしたの……」カヤ……ひいつ！

そんな折、空氣を読まずに目覚めた柊山が、殺氣むんむんの姉さんの形相を見て、息を飲んで固まった。

「借りがあるからの、いきなり手は出せん。

立ち去るならばよし、そうでないのならば容赦はせぬ

そう言つた姉さんの指に力が込められ、ビキビキと血管が浮き上がる。

綺麗に揃えられていた爪が細く長く尖りはじめめる。

武器を持たずに闘つたための一族の誇りたる身体制御能力の、その顕現。

全身に隈なく意思を通じさせ、その強度を増し、身体を必要な時に必要なだけ変異させる。

姉さんのそれは、恐ろしく近接戦闘に特化された、まさしく一族の化身と言つても過言ではないものであった。

「お願いです、私もお連れください。」

端女としてでも構いません、宏一様と共に居させてください。

何に代えても私がお守りいたしますから

「残念ながら、おぬしに守つてもらわんでも私が守るゆえ、お引取り願いたいところなのじゃがの？」

そういうつてまた睨みあう。しかし、姉さんにしり、アウルさんにしろ、だ。ここまで強ことだ。

普通、こうこう風に異世界にしつつたらや、「僕が、何にかえても君を守るから」なんて言つちやつといひでしょ？

こんななんじや守つてもひばりばかりで立つ瀬が無いといふか句と言ふか。

それに何故僕にこれほどまでに執着するのかは謎なわけだが、正直な所悪い気はしない。

美人だし。

ともかく、本当に何故こうまで慕つてくれるのか。

不思議すぎる……が一緒に居ればそのうち判るだつ、と言つことだ。

「姉さん。アウルさんは悪い人じゃないよ。ねえ、いいでしょ？

「宏一はそれでいいのじゃな？」

真っ直ぐに僕を見つめてくる姉さん、僕は視線をそらしきこな
りながらもゆっくと頷いた。

「共に、と宏一が言つたのなりませ、致し方あるまい」

「よりしこのですかー!?

「いいのー?」

ちょっとブスツとしてはいるけど、意外な答えに僕もアウルさんも
信じられないとばかりに聞き返してしまった。

断固として撥ね付けるかもとも思つていただけに、ちょっととばかり
拍子抜けだ。

でもなんでそんなに簡単に受け入れられたんだろ?つか。

「お主が良いと決めたのである?私はそれに従おう。

仮にも主人となるおぬしの言葉じや、尊重せねばな」

「ちょ、ちょっとー主人って、一体どうこいつ意味?」

「主人、夫、亭主、連れ合い、旦那、はずばんじ、とまあ色々と言
い方はあるが、どれも同じ意味を含んでおるな。どれが良い?」

「いや、そうじゃなくて。僕が旦那つてどじゅ」とへ。

慌てる僕に、姉さんは何をこぼしたらとこつた顔で、腰に手を当けて

得々と語りだした。

「供物を捧げに行くものを護衛するのは、最も歳の近い娘なのじや。そして、その供物を捧げた男子と、それを影から助けたおなじの一人は、将来を誓つた許婚となるのが一族の習わしじや」

「えつと、二口一ではなく、二ヤリと笑う。

「えつと、二口一とは、僕らつて実の姉弟なんじやなかつたの？」

「いいや！ 嘘偽りなく姉弟じや！」

巨大な胸を惜しみなく張る。

「兄弟での結婚つて拙いつていうはなしぢや……」

「我が部族では、姉弟での結婚は奨励されておつた。

濃い血こそが、力となる、とな。

実の所、先の世界では自重しておつた。

郷に入りては郷に従えと学んだ故にな。

だが、こちらに戻つてしまつたからには仕方ないつ！」

やけに強い口調で言い切つてくださいました。

「えつと、我が姉上はこう申しておりますが、アウルさん的には

ପ୍ରକାଶନ ମାର୍ଗିକା ଓ ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ

もう何がなんだかさっぱりになつた僕は、一縷の望みをアウルさんの返事に求めた。

「私どもの部族でも、良き血を残すためにはそのような行いも認められておりますが。

良き血を求める幾人もの妻を娶る事が、男としての甲斐性もあるので。

先ほどのミカールなどは、妻が4人、愛妾が10人を超えていると
の噂です」

宏一にも頑張つていただければ……なんて言いながらぽつと頬を染めるアベルさん。

駄目だこりや。

どうもその辺り、元の世界と倫理観が違つてゐる。

「あちらでも、中東辺りでは結構当たり前であるぞ？」

僕の微妙な表情を読み取ったのか、姉さんがそんな特異な地域の事を言い出した。

話がややこしくなるからやめてください。

「だつ！駄目よつーそんなの駄目なんだからつー！」

二人の妻希望者に挟まれて頭を抱えていたら、横からもつ一人増えた。

ハアハアと息も絶え絶えな感じで力説していくださる終山梓嬢。

それを見て姉さんとア威尔さんは「ほほう」とか「あら」とか、いう反応をしてくださいやがりました。

しかし、これ以上のカオスは勘弁して欲しい。

僕は固唾を呑みこみながら突っ込んだ。

「なんで終山がそこまで出てくるのぞ」

「なんでつて！私だつて、私だつて、ずっとずっと、ユーチャンのことが好きだつたんだからつ！負けないんだからつー..」

あれえ？

なんだかもてもてですよ。

泣き出しそうな終山を、どう扱つていいか困りきった僕に、のんきな声がかけられた。

「お取り込み中のところ、すんませーん

「うわつ、つて八馬か。何だよ」

見れば氣を失つていた山田君とともに復活し、胡坐をかけて「ひらりを見物していた。

「何だよじゅねーよ。って言つかむしろ」「ちが何だよつー話だつての」

その横でひむひむと頷く山田君。

なんと言つか、達観したようなすつきりした表情にも見える。

「状況がどうにも理解出来んのだが。やたらと強そうな奴が襲つてきた所までは記憶してるが、そこからなんで痴話げんかに発展してるので。あきりきりと白状しやがれ！」

「何で僕が悪者なんだよ！」

「うひこう場合十中八九、男が悪者だ」

端的に言つてのける山田君。

何か嫌な思い出でもあるんでしようか。

「別に宏一が悪いわけではないぞ？ 単なる話の流れじゃ」

「そうですね。何もやましい所はござりません」

「そっ、そつ…なのかしら」

実際僕が何かしたわけじゃないから、3人が3人とも擁護してくれるのはとても助かる。

「…じゃあそれはいいとして。ありや何ですか？」

そう言つて八馬が指差した先には、ミカールが残していつた巨大すぎる剣が転がっていた。

「…見てわからんか？」

「わからんかといわれても…剣かな?と思わなくもないですが、サイズ的におかしそぎて」

「大きさは兎も角、剣と言つのは正解じゃ」

言いながら、剣に手を伸ばしひょいと持ち上げ、眼を見開いて驚く二人に見せ付けるように、姉さんは剣の刃を指の腹で撫でる。

「見よ、研ぎも口クに入つておらん。重ねと、振り回した際の慣性で目標を破壊する為のものであるな。要するになまくらじや」

そう言つてふんぶんと振り回して今に至るわけである。

「私は使わんし、他の誰も使えん。」ハリじゃな

そういうて投げ捨てようとした剣を、柊山が手を上げて「じゃあ私が持ちます!」と叫び出した。

「いやいや柊山さん、野見山先生は尋常じゃないからああいう風に振り回せるわけであつて」

「え、でも」

「いいじゃん、持つって言つてんだから終山に持たせてやれよ

無理だやめておけという山田君を、八馬が満面の笑みを浮かべて諭していた。

「よつ、つと」

ぶおん。

「なんですよー！」

姉さんに手渡された剣を、終山はさすがに片手でと言つわけにはいかなかつたが、両手で持ち上げ何とか正眼に構え素振りする事に成功していた。

「さすが終山。剛力無双は伊達じゃないな」

「ソレで呼ぶなっ！つていうか、見た目ほど重くないわよ？」

剛力無双と言うのは古い馴染みの友人しか知らない終山の別名だ。

さすがに花の乙女としてはそう呼ばれて嬉しいはずが無い。

憤慨して八馬に剣を向けかけたが、姉さんが剣先を抑えてソレを押しどじめた。

「いくら見た目ほど重くは無いと言つても、掠つただけで並みの人間じやと大怪我からの。

持つのはいいが素人は盾に使うへりこむしておれ

と、姉さんからのお達しである。

まあ、刃渡り2m超で柄を含めれば3m近く。

で剣幅が30cm、厚さで5cmはあるつかと言つ代物である。

持てるからと言つて、素人に振り回された日には周りの僕たちが怖すぎる。

「素人…剣道の段位持つてるのに…じゃなくて、何か役に立てればつて思つたんですけど」

と消沈するのも束の間、アーヴルさんが空を指差す。

「それよりも、早くここから逃げ出さなければいけないかと存じますが」

「ふむ、もう来おったか」

「まあアレだけ時間無駄にしたらね」

思わず溜息を吐いてアーヴルさんが指差した空を見上げれば、例の大な鳥さんの姿が遠くに何匹も確認できた。

「さつきの奴はいないみたいだね」

「ミカールは、武器もこのとおり持つておつませんし、恐らく一旦帰還したと思います」

柊山の持つ大剣をに視線を送りながらアーウルさんが言うのを受けて、姉さんが呟く。

「部下の得物を奪つてでも自分が先頭に立つて追いかけきそつな奴じやつたがの？」

「高みからカラドリウスの攻撃だけを行えば、手が出せないと踏んだのでしょうか？」

ソレは危ない。直撃したら命が死んでしまう。

取り急ぎあとと逃げ出さう。

流石に、上から攻撃されるのは防ぎようが無いし、一いつから手出し出来ないんだから。

「その辺は心配なから。ほれ、アウルとやら。おぬしの仕事じゃ。よもや同族には手を出せぬなどとは言わぬだろくな？」

「お任せください。全力をもって、道を開いて差し上げます」

そういって、空に向かって高らかに笛を吹いた。

「来い！ディオス・パテール！」

その声と共に、樹木を縫つて、巨大な赤い鳥が降つて来る。

それは、僕が最初に押し潰されて氣を失つ前に一瞬だけ見た、あの鳥であった。

降り立つたティオス・なんぢやらを見上げていたら、視線が合つたのかして、長い首をこじらに向けて、くえ?と鳴いた。

「うは、案外可愛い鳴き声じゃねーか」

「うん、僕も気絶するときに見ただけに、ちょっと印象悪いなあ、って思つてたけど、拍子抜けだね」

「だが、正直でかすぎて怖いぞ」

僕たちが、降り立つた鳥さんごビバヒトリ、その鳥の頭から人影が一つ現れた。

その人には見覚えがあつた。

最初に僕が目を覚ましたときにアウルさんの部屋に入つてきた、そして、あの食事をしていた広間にあのおっさんの供として入つてきただ、あのメイドの人だ。

そうだよね?と尋ねた僕に、アウルさんは困った顔をして頷き、彼女の紹介をしてくれた。

「はい、長年私付きの侍女として仕えてくれている、ファナーと申します」

そう紹介されたファナーさんはふわりとその身を宙に浮かべ、音もなく着地し、そして軽やかに一礼した。

前の時はあんまり人となりを見る機会がなかつたが、今ならばその

落ち着いた雰囲気が辺りを柔らかく包むような感じがよくわかる。

身長は姉さんより若干低い程度で、僕らの感覚では十一分に背の高い女性だった。

「ファン、準備を！」

「はい、アカリエル様」

アウルさんが一声かけるや、翼で覆つよつにしてアウルさんを僕らの視線から遠ざけてくれた。

おまけに巨大な鳥、ディオス・パテールと言つ名の鳥さえもその翼を開き、僕らと彼女との間に壁を作つたのであった。

何をしているのやらと首を傾げた僕らであったが、まだ遙かに遠い間合いから敵の闇雲な攻撃が始まられ、それどころではなくなつてしまつた。

とは言え、大まかな位置しか知られていないためか、周辺の森を焼いてゆぐのみで、直撃は一向になかった。

こんな状況にもかかわらず、アウルさんの鳥は落ち着いたもので、なんとも豪胆なものであるなと、姉さんすら感心して見上げるほどだつた。

翼の隙間から、ファンさんの声が漏れると、ディオス・パテールはゆっくりと翼をたたみ、アウルさんを僕らの前に送り出した。

白金の輝きを放つ甲冑が目に痛い。

黄金色の髪が、翼の生えた兜から棚引き、背には真っ白な翼が折りたたまれている。

凛々しさが美しさと渾然一体となつた姿は、身に着けたその甲冑よりも輝いて見えた。

「では、宏一様。行つて参ります」

磨き上げられた甲冑を身に着けたアウルさんが、そう言って僕を柔らかく抱きしめ、頬にキスをしてくれた。

「うん、気をつけて」

もつひよつと氣の利いた言葉をいえないものか、と自分で思いながら、彼女を見送った。

アウルさんは僕の言葉に嬉しそうに微笑んで鳥の背に飛び乗り、その背に置かれた鞍に備えられてた長大な槍を手にすると、アウルさんは威勢良く「参る！」と、ただそれだけを大呼した。

その声を受けて、巨大な翼が広げられる。

そして、ひと羽ばたきでふわりと宙に浮かび、次の羽ばたきで、一気に天高く舞い上がつていった。

「あの鳥…ディオス・パテール、と言つたか。奴の想い、嘘偽りではなさそりじやの」

姉さんが、腕を組んで見送りながらぼそりと呟いた。

それを耳にしたファナーさんは、頭を伏せて姉さんにこいつ叫びたのだ。

「はい。幼少の砌、恋をなさつたお相手のお名前をいただいたと言つことです」

ぎやりん、と。巨大な鳥同士が高空で交差する。

その光景を見ながら、ファナーさんは姉さんに続けてこいつ言った。

「私はお嬢様のお気持ちも存じております。

ですから、いかにアル・イラーフのご指示と申しましても承服いたしかねまして、このたびの出奔と相成ったので御座います」

絶対君主制、ってワケじや無さそうだけど、幾らなんでもそれだけの理由で仮にも指導者的立場であるつあのおっさんに対して反旗を翻すつてのはどうにも信用できなかつた。

「確かに、アレだけの能力を持つ者が裏切るというのも怪しいもんじゃが、まあ問題なかろう。ホレ見てみい」

鳥がすれ違つたびに火花が散り、すさまじい剣戟が繰り広げられているのだろう。

言われて見ればミカールと言う追手に抗つて僕を助けた時点で、アウルさんに帰る場所はなくなつたんだ。

「宏一様。アウル様は貴方様のお傍に置いていただけるのならば、

一族をも捨てる覚悟であります」「

戦闘を見守るだけで手も足も出せない僕に、やつぱいでくる。

戦う事も出来ないそんな自分が、情けなくもあり、悔しかった。

優勢な展開で追手を押しているアウルさんを見つつ、ふと先程の会話で気になつた疑問を姉さんにぶつけてみた。

「ディオス・何とかに意味があるの?」

「意味か?簡単な事じゃ」

苦笑と共に、僕の肩を搔き抱き、耳元に囁く。

「おぬしがこの世界に居た頃の、真の名じゃ

聞いて、僕は胸の鼓動が一段大きく打つたような感覚に襲われた。

なるほど、その頃からずっと、思つてくれてたつて言つ」となのか。

そこまで思つてくれてるのは嬉しいんだけど、いつ僕会い、僕はそこまで思われるだけの何をしたのだろうか。

戦い続ける空に、槍の打ち合ひ火花とカラドリウスの吐くオーロラのような輝きが時折交差する。その煌きをよそに、僕らは見物人と化している。

「負けないんだから、負けないんだから」

柊山は命を懸けていいるアウルさんに対してなにやら対抗意識を燃やしているようである。

そんな彼女を見て、つい僕は彼女の肩を抱いてしまった。

「ふえ？、な、何？」

驚いたのかして大きく眼を見開いた彼女の耳元に、僕はゆっくりと囁き、伝えた。

「心配しなくつても、僕、柊山……じゃなくて、梓ちゃん……ううん、あーちゃんの」と、好きだから、心配しないで

「本当？」

「嘘でこんな」と言えないついでば……ただ……」

ただ問題は……。

「どうしたの？」

上目使いで覗き込んでくる彼女の表情の破壊力に焦ったためか、僕はつい口走ってしまった。

「姉さんも好きだし、アウルさんも好きになりそくなんだよね。うん」

「……首絞めていい？」

締めてる締めてる。

「ごめんください」

「ふんだ！」

ちょっと死にそう。

ガギン！

甲高い響きを上げて、ついにアルさんが最後の敵を打ち倒した。

背に乗る翼人騎士と共に落下してゆく巨鳥が森へと消える。

敵の探索も、これで一から振り出し、かなう

咳いた僕に
姉さんは無表情に言い切った

- そんな容易いものでもなかニハ

次が出てくるだけの事。

三井川とせふ すぐは房で「よ」

「ミカールは恐らくアル・クルアーンへと戻っているのだと思います。

そして、今度は精銳を引き連れて再び、ここへ

申し訳無さそうに語尾が消えてゆくファナーサンを横目に、「はあと、姉さんの溜息が長く吐き出される。

「どうせよ急いで此処を離れねばならん。そこでアウルよ、頼みがある」

真面目な顔で見上げた姉さんの鋭い視線が、降りてきたアウルさんを刺す。

「囮に成れとかそう言つのは止めてね? 寝覚めが悪くなるから」

「それで話が済むのならば、そつしたいといひじゃな」

そんなこと振り切れるならば、苦労はしないだろ? と言い、

「しかしあぬしも人聞きの悪い事を言つ。私はそこまで人非人では無いぞ?」

と続けた。

再び見上げた姉さんの視線の先には、「くえ?」と首を傾げて姉さんを見下ろす巨鳥の姿があった。

ひとつと此処を離れるために、アウルさんの鳥、ディオス・パテールに乗せて貰うといつことに成ったのである。

成ったのではあるが…先ず問題になつたが、これって何人乗れるのか? ということだった。

幾ら大きいとは言え、そう何人も乗せて飛べるとは思えない。

鳥つて極限まで軽量化したから飛べるようになった生き物だつて聞いた事があるし。

ディオス・パテールの太い首を撫でながら、それでも僕はアウルさん尋ねてみた。

もしコイツがみんなを乗せて飛べるなら、それで結構ラクチンじゃないかなと。

「私を含め、皆さんをお乗せしても飛べるとは思いますが……もしその状態で追手に見つかれば、間違いない追いつかれてしまうでしょう。ですから、こういうのはいかがでしょう」

にっこりと微笑んだアウルさんに、僕はちょっとだけ嫌な予感がした。

いやまあ、良いんだけどさ。

「良くないわよ。チヨシトーちゃんーアンタにやけてるんじゃないわよ」

柊山の声に、ちょっとぴり身体を震わせる。

でも大丈夫、此処までは彼女の拳は届かない。

「大丈夫ですか？お辛くありませんか？」

「ええ、とつても気持ちいいで…じゃあなくつて、はい、大丈夫です。平気」

ちょっと怖いけど、プラスマイナスでかなりプラス気味です。

ああ、背中に当たる感触が素敵過ぎる。

「ここのよつな使い方は、意図しておつませんでしたが…」

今僕は、アウルさんに抱きかかえられるような形で飛行中である。
さすがにずっと手で支えっぱなしは無理だろつといつ事で、貰った
マントでキッチリと縛り付けてもらつているのだ。

おかげで背中に当たる感触が恐ろしいほどに伝わってくる。

あからさまなアドバンテージを取るつとする翼人一人に対し、他の誰かを、という意見が姉さんと柊山から出たけど、ファナーさんが却下した。

「お嫌ならば、歩いてどうぞ」と言われてしまえば仕方がない。

いつもして僕は至福の空中散歩を満喫しているわけである。

アウルさんの斜め後ろには巨大な鳥、ディオス・パテール。

その鞍に跨るのはファナーさんである。

そしてその後方、背中の平らな部分には、残る4人が羽毛に体を埋

めのまつして乗つてゐるのである。

因みに大剣は足で掘んでもらつてゐる。

気分よく景色を眺めていると、物騒なセリフが背後から聞こえてきた。

「ディオス・パテールよ。汝の主の身に、危険が迫つてゐるぞ?」

鳥も律儀に「くえ?」と答へ、なにが?と言つ眼で首を回して背中の姉さんを見、姉さんと終山、おまけにハ馬と山田君までが方向を指差し示すと、こちらに改めて視線を戻し、高らかに一鳴きした。

すると何故だか奴の翼の先端付近、風切り羽と呼ばれる辺りが、蒼い燐光を発し始めた。

「およしー!ディオス・パテール!」

「ちよつとまつたああああああああああああああああ

思わずだらりと下げていた足を、反り返らせたりアウルさんの足に絡める。

その次の瞬間、ファンナーさんの静止も聞かずにあのクソ鳥野郎は、つこさつきまで僕の下半身があつた場所を眩く輝く雷で焼きやがつたのである。

「すげえ…。これが、あの光か」

田をきりきりさせて、楽しそうなハ馬。

そうだ、僕らを襲いかけた蟹みたいな虫を一掃した、そしてミカールが引き上げるときに上空から放たれた、アレだ。

しかしハ馬。僕の下半身が、もうチョットで黒コゲになりかけたのは無視か。

「自己責任だ。俺は関知せん」

なんか、僕の味方はアウルさんだけな感じがしてきた。

「申し訳ありません、あの子つたらやんけりやで。

後でお仕置きしておきますわ。

あと、私は何があつても宏一樣の味方ですわ。

何時でも何処でも、私をお呼びください。

男性へのご奉仕も、ファナーから教わっておりますから……

そこまで僕に囁いて、アウルさんは言葉を切った。

四つの怒りに燃える視線に、ちょっと息を呑んだのだ。

どうなることかと思つたけれど、幸いなことに味方同士で一戦交える事は未然に防がれた。

翼ある人が乗るカラドリウスと呼ばれる鳥が、僕らの視界に入ってきたから。

冗談が言える場合じゃ、なくなつてきたんだ。

「こちらを見つけたな。では、行くぞ」

そう言つて、姉さんたちを乗せたディオス・パテール……長いな。

「ねえアウルさん。ディオス・パテールって呼びにくいから、ちょっと変えてもいい？」

「はい、宏一様のなさりたいように」

「じゃあパテちゃん」

はい決定。

くえ―――?、つて反論は受け付けません。

アウルさんはくすくすと笑つて、鳥さんのことを僕に傲い「パテち
やん」と呼んだ。

「くうええええええええええ」

パテちゃんの悲痛な泣き声と共に、出来るだけ例の岩山【アル・クルアーン】とか言うのから離れる方角へと全力で飛び始めた。

カラドリウスと呼ばれる同じ種の鳥だというのに、パテちゃんは他の鳥よりも飛行速度がかなり速い。

多くの人を乗せていいる分だけ遅いと思つてたんだけど、他より一回り以上大きな翼は、それを重荷とは思わないよう羽ばたきを増し

ゞゑゞゑんと弓を離してゆく。

アウルさんも僕の重れを苦にせずに、速度を増す。

この人、パテちゃんと乗らなくても速いじゃないか。

「はい。私のように複数の翼を持つ者は、身体能力のみならず、様々な点でラスールたちとは比べ物にならない力を有しています。残念ながら生まれること自体、『ごく稀ですが』

それはまたミカールも、か。数十人のラスールを瞬殺……いや、殺してないけど。

まあ、あつという間にやつつけた姉さんを手こすらせるんだから、並じやがないとは思っていたけれど、上位種族だったわけだ。

ファンタジー世界なら、ヒルフにおけるハイ・エルフ、ゴブリンにおけるホブ・ゴブリンって所かね。

かなりの距離を飛行しても、飛ぶ速度がまるで落ちないし。

追手も頑張つてはいるが、そもそものスペックが段違いなのは如何ともしがたいらしく、みるみる姿が小さくなつてゆく。

「降りるぞっ！」

姉さんの声と共に、僕らは一斉に巨木の森へと降下する。

そして、幾重にも折り重なるように生える樹木の隙間を縫つよつに飛び、二つしか追手をまく事に成功していた。

敵をまいたあと、再び空の旅を暫く続け、適当な場所を見つけて再びねぐらに出来そうな洞を見つけ、腹ごしらえをすることになった。

今度の休憩場所は、やけにグネグネとした幹を持つ、まるで盆栽を巨大にしたかのような樹の根元だった。

見つかりにくく、かつ食料調達が容易だから、という事らしいが、木の実でもなっているのだろうか。

火を用意せねば、との姉さんの言葉に、アウルさんが木の枝を擦り合わせて焚き火を熾そうとしたが、

「ほれ」と差し出されたタバコ点火用のライターにより時間を費やすことにすんだ。

「こ」のような小さなもので、火が

突然と呟くアウルさんであつたが、八馬が思わず突っ込みを入れていた。

「つて、おっさんの剣はめっちゃ燃えてるじゃねーか」

「アレは…」

アレはどう見ても、僕らの世界の技術でも作れそうにはない。

ガスバーナーを束ねても、あんな風に炎を纏わりつかせたりは出来ないし。

「あの父の剣は、形こそ違え、私の物と変わらぬ、質が良いとは言え、『ごく普通に鍛えた剣ですわ』

「そうなの？」

「じゃあ何？あの炎とか」

僕や八馬だけじゃなく、山田君さえも思わず身を乗り出して聞いていた。

「あれは、私どもの個々人の力です。

父は炎。

私は光。

ミカールは、伝え聞くところによれば、水とも言われておりますが、まだ誰にもその力を見せておりません。

いえ、見た者は生きていない、といつた方が正しいでしょうか。

彼の使う力は大きく、周囲の味方さえも巻き添えにするため、常に単騎で動くのです。

それに、彼自身それを用いなくとも勝ち抜けるほどの力量ですし。

他にも多種多様な力を、皆が備えてあります。

無論、力の大小はあれど、ラルースの一平卒に至るまで

そうして、僕を見つけたときに辺りを照らしたのは、彼女の能力だったのだと告げられた。

しかし、力の差はあれ、そういう能力があるのを知っていた姉さんは、だからドラゴンよりも厄介だつて言つてたのか。

とはいえるアルさん曰く、自身が持つ能力、さすがに使いすぎれば疲れるのだそうだ。

それでミカールは使わなかつたのか？

奥の手は隠しておいてこいぞといつ時に使つてこそ、つて？

まあそんな事はさて置き、ともかく腹^ヒしらえである。

食料が簡単に確保できると姉さんは言つていたが、どうも木の実がなつている気配はない。

さて近くに食べられそうな動物でもいるのかと辺りを見回していた僕らであったが、姉さんは迷うことなく巨木の幹につかつかと歩み寄り、その表面を確かめるように撫でていた。

どうするのかと思つたら、そのまま手の平にもう一方の手の平を重ねて「ふんっ」と短い気合を入れた。

何をしたんだろうかと疑問符を浮かべたのもつかの間、上空からばさばさと落ちてくる、巨大な樹に見合った大きさの葉と共に、それ

に張り付いたままの、巨大な。

巨大な
。：

芋虫

予想外の落下物に、僕ら一同はこの世界の住人（元も含む）を除いて、一様に動けなかつた。

ああ、一人盛大に悲鳴を上げたのは居たけど。

山田君だ

そりやあもひ、派手に叫んで涙流して姉さんの背中回つこみまし
た。

柊山は顔を引き攣らせて固まって動きません。

う。許容範囲を超えて、悲鳴を上げる暇もなかつたといふことだろ

八馬は「う」と、最初の衝撃を受け流してからは巨大芋虫にすら感動して、田をきりきらさせてた。

「どうかなさごめん？」

そんな僕らに首を傾げながら、大人の腕位ある黄緑色の芋虫を、ア
ウルさんとフアナーさんは平氣で拾い集めている。

「毒も有りませんし、『j 覧のよつて』の樹の葉を常食にする、害の
ない生き物ですわ。… 皆様どうなさいたのです？」

虫が嫌いって訳じやない僕も、流石にそれを大量に抱えて持つてこ
られたら引きます、ええ。姉さんはよくすくす笑つてこちらを眺めて
るだけだし。

一人…いや、一羽だけ嬉しそうにしてるのはパテちゃんくらいだ。

あちこちを這つ芋虫を長い首を伸ばしては啄ばんでいる。

見た目で驚いたのが落ち着くと、再び大事な点に皆が気が付いた。

「もしかして、アレを喰うのか？」

顔どころか全身を震わせて、山田君は怯えるよつて誰とはなく尋ね
た。

「これはこの樹でしか取れん貴重なものなのだと? 蛋白源としては
かなり優秀なものじゃとこりのこ…」

「お味もべぐなくて、お口に合つかと思こますが…」

「これといった手間も掛かりませんし。何よつ捕りえるのが楽です

三者二様に食べ物としての大芋虫を褒めちぎる。

そつは言つても、お口に合ひ合はないじゃありません。

正直、材料がそれと知つてしまつと、ちょっと口にしたくないかなあ、つて。

僕の意見に生徒一同うんうんと頷いた。

「案外やわなヤシラージャの」

芋虫は勘弁してぐだむこと泣いて縋つた山田君の甲斐もあつてか、姉さんが見た田のグロくない生き物を狩りに行つてくれた。

笑いながら戻つてきた姉さんは、ちょっと小振りな羽の無い短足な鳥のような生き物を捕らえてくれた。

あと、おまけにやけに太い棘で覆われた果物の房もその肩にかけていた。

「これなら食べられる」

涙を流しながら、山田君は焼けた肉を頬張つていた。

だが、副食として添えられている芋虫の「中身」だけを搾り出して作つた、どろりとしたスープ状のモノには一切手を伸ばそうとしなかつた。

実は彼、先ほど一回氣を失つている。

芋虫の中身を搾り出す段階で、意識をなくしてしまつたのだ。

「私も、バスだなあ……」

僕と柊山、同じくギブアップ。

原材料を知つてしまふと、日本人的な感覚からすると拷問に思えてしまひ。

ハ馬だけが、葉っぱ丸めて作られた簡易スープ皿に入れられた液体を恐る恐る、口に運んでいた。

「…美味いんじゃがのぉ

既に空にした器を手に、姉さんが首を傾げる。

「姉さん。食べ物は味が良ければいいってもんじゃ…。虫嫌いだとこれは無理でしょ」

いつも作ってくれていたご飯は、アンナに綺麗に盛り付けてあつたのに、この短期間であつていう間に再順応でもしちゃつたんだろうか。

「そんなつもりは無いのじゃが。仕方ないのぉ

そう言つて、およそ殆どが残つた僕らのスープ皿を集め、残すのは食べ物になつた連中に悪いから、とすべて平らげてしまった。

唯一食べきったハ馬曰く。

「味は悪くない。原材料を知らなければ、美味しいと思えたんじゃないだろ?」

と評していた。

そんなこんなで一息つけた僕らは、これから事を話そつと燃え残つた焚き火に木の枝を放り込もうとしたんだが、アウルさんが「明かりならば任せください」といつて、手を大きく開いて洞の天井へ差し伸べた。

すると、焚き火とは比べ物にならない明るい輝きがそこに発現した。

「コレが、私の能力の「光」ですわ」

言つて、ニコリと笑う。

そしてこの程度ならば疲れることも無いとこいやかに続けた。

明かりが確保出来、皆がさて何から話しかけと思案するその前に、いきなりハ馬が血の涙を流しそうな勢いで、僕を指差して力説を始めた。

「これから行動については確かに重要で、ちゃんと話しこなきや駄目だろうけども。

それより先ず俺が聞きたいのはー何故コイツばっかりつて事だ!」

ハ馬に同意したのは約一名、山田君だけだったが、確かにこの世界に居た頃から許婚と決められていた姉さんや幼馴染の柊山は判らなくもないけれど、アウルさんに関しては腑に落ちない。

「そう言えばそうよね。何で知ってるわけ?元はこの世界の人間だ

つたからって言つても、仲間じゃなくつて敵対した陣営じゃない。
そこからおかしいのよね」

柊山の指摘に皆一様に頷き、ほぼ同時にアウルさんへと視線を向けた。

それに戸惑いを浮かべたように彼女は首を巡らせ、ファナーさんと視線を合わせ頷いた。

「それについては私から

そつ前置きして、ファナーさんは長くなりますがと口を開いた。

彼女が語る内容に、僕は驚きを隠せなかつた。

その昔、自分たちを生み、育んだ地を捨て、この世界にやってきた、マラーアカたち。

彼らが長い旅の末にたどり着いたのは、広大で豊かな大地と、様々な顔を見せる様々な気候と、それにより育まれた様々な生物が、逞しく生きる、命に満ちた世界であつた。

新天地にたどり着いたと、彼らは一様に思つたらしい。

しかしそこには既に、先住民である姉さんたち一族が暮らしていた。

その姿かたちはともかく、生活、風習、その他、とても彼らには相容れることの出来ないものであつたため、別の地へと再び跳ぼうと

いう意見が、上層部の大勢を占めた。

しかし、現実的な問題に彼らは直面した。

非支配層の疲弊である。

幾度もの転移と、長い流浪の末辿り着いた、広大な、そして、多くの肥沃な大地。

それを目の当たりにした上で、再び当て所ない旅に出るとなれば、どのような混乱が巻き起こるであろうか。

異なる知的生命が存在するのであれば、この地を終の棲家とすべきではない、という意見が上層部では大勢を占めていたが、深謀遠慮を解さぬ人々には、この広い世界、彼らと交わらずに生きることなど造作もないという意見が多く、いつしかこの地こそが自分たちが導かれた理想郷なのだと言う世論に取つて代わられた。

そうして最終的に、上層部もその意見に屈し、この地に足跡を記し始めたのである。

確かに当初は、はるかな距離という障壁が二つの部族を分かち、平和が続いていた。

しかし、新たにこの地の住民となつたマラーアカ達による大地への榨取は、やつくりとではあるが、確實に彼らの住まう地域の荒廃を進ませていた。

やがて世代を重ね、始めに降り立つた地を食いつくし、彼らは過去に禁忌として刻まれた不可侵の地を犯した。

豊かな土地を求め、自らの祖が不可侵と定めた地へと、姉さんの一族が暮らす大地へと、移動していったのだ、あの、巨大な、岩のような城と共に。

「あの巨岩の城は、私たちの祖先がこの地にやつて来た際に用いていた、『船』であったといいます」

その城の力が尽きようとしていたことも、彼らが住む土地を移ろいろとした、最大の原因の一つだったのだとか。

「アウリエル様は一族の次代を担うものとして、あの地に移動してきた時に最初に大地を踏むものとして先遣を言い付かっておりました。

そう、あの城 私共は【アル・クルアーン】と呼んでおります
が が。

今的位置に降りた時の事です。

今から……そう、あなた方の世界の時間で、十年ほど前に前になりました
ようか

そこで一回語るのを止めたファナーさんの後をついで、アウルさんが僕の目を見て囁くように言った。

「城がこの地にやつてきた日、私とお会いした」と、覚えておりませんか？」

「僕と？」

言われて思わずきょとんとした表情をしてしまった。

10年前つて言つと、僕は6歳くらいである。記憶があやふやなのは仕方ないと思つたが、正直覚えていない。

「なるほど」

「何がなるほどなの？」

一人納得したような姉さんの声に、僕は意味を問いただしたが、「内緒じゃ」と煙に巻かれてしまった。

「じゃが、その時に会っていたとして、宏一に拘るのは何故じゃ？」

「それは……」

目を伏せ、言葉を選ぶようにしてアウルをなんばゆつくりと続けた。

「あの時、私はファナーに供をしてもらつ事で、初めてアル・クルーンから出ても良いことと言われたのです。

狭い城の中でしか羽ばたいしたことのなかつた私は、それがどのような意味を持つのかも知らずに、はしゃいでおりました。

それは、一族の代表として、神の示された地だという事を知らしめる為の、礎だったのです

「よくわから無いけど、上からの命令で前人未踏の地に降りる、って言われて喜んで降りてちゃつた、と

「はい、夢にまで見た外の世界ですから。

「私、戯れのあまりお供の者を振り切ってしまったのです」

いわゆる『領有』の宣言を行つ尖兵だった訳か。

だけど、名田上のお飾りともいえる当時のアウルさんは、実務担当のお供の人を放り出して、遊び呆けてしまつたということか。

「私はそれはもう、天にも昇るかのようでしたわ。

ファナーが言うのも聞かずに、遠くまで思いつきり飛んでしまつて、一人きりになつたのにも気がつかなかつたんですね」

飛んで飛んで、飛びつかれて、気がつけば一人きり。

そうして眼下に湖が見えたので、咽喉を潤そつと降りてきた所に、僕が居たのか。

「はい。大きな湖から流れ出る、一本の水の束が私の田を引いたのです。

そこにふらふらと近寄つていつた所で、辺りを見回している宏一様を見つけたのですわ。

驚きましたわ。翼を持たない方がいらっしゃるなんて。

それに、自分よりも大きな籠を、その背中に背負つていらっしゃるんですもの」

そう呟われても、僕にはそんな記憶はない。

無いはずなんだが、何かが僕に語りかけてくる。

理解できない言葉で、何度も何度も。

心拍が上がる。

汗が噴き出していくのが判る。

覚えていないはずの何かが、思い出せと語りかけてくる。

紅い光と、抑揚の無い、聞き覚えの無いビコの言葉と共に。

そして、僕の意識は。

跳躍だ。
とん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0278p/>

掃天のストラトス

2011年10月8日04時55分発行